

# わいふ

特集◆美容と私

座談会●公園育児ってこんなもの

●私の男女共同参画体験記

投稿誌



逐次刊行物

平 12. 8. 07 成

国立婦人教育会館  
婦人教育情報センター

285

# 子どもに振り回されてはいませんか？

正しい子育ては、ラクな子育てです

ニュー・マザリングシステム（NMS）を  
ぜひ試してみてください。

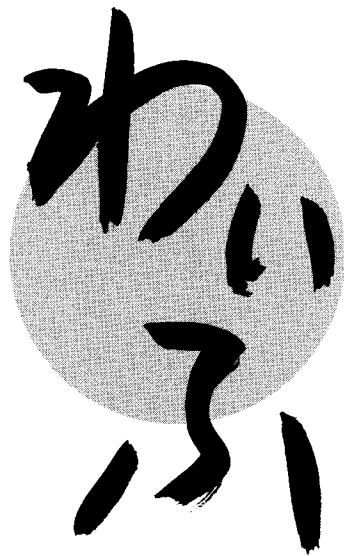
●NMSについて知ったころ、娘は4か月でまだおすわりもできない状態でしたが、私はすでに心身ともに疲れ切っていました。「赤ちゃんが泣いたらとにかくだっこが大切」と思いこんでいたのです。今では寝かせるのも本当にラクで、自分からベッドに行こうとしますし、断乳も自然にできました。しかしいつも思うのは、あまやかさないで子供を可愛がるのはパワーがいるなということです。ついついこちらも面倒になって、まあいいか、と大目に見てしまいそうになるのには、気をつけようと思っています。（神奈川県 I・Aさん）

●テキストに、「赤ちゃんは何でも知っている」とあり、最初のころは「ホントかなー」と半信半疑でしたが、一歳五か月の長女を観察していると、好き勝手な行動をしているようでも、実は親の言葉を実によく理解しているようなのです。彼女はいまではお片付けも上手ですし、眠くなると、「バイバイ」といって自分のふとんのなかに入って寝てしまいます。（大阪府 M・Mさん）

●どういうことが子供をスポイルするか、感情的にはわかっていたのですが、具体的な日々の行動としては全くわかっていませんでした。でもアドバイザーの一言一言は、実に説得力がありました。はっきりいってこのシステムは、私には口うるさい親のような存在です。（神奈川県 K・Kさん）

●私が変わったことというか、大切に思うようになったことは、「友人をつくらう、外の世界に出て行こう、私が私らしく、幸せになる道をさがそう」と思うようになったことである。毎回、同じアドバイザーの方が担当してくださるということも嬉しいかった。「困ったことがあっても大丈夫」という心強さを感じた。（奈良県 M・Yさん）

ゼロ歳から満3歳までのお子さんをお持ちのお母さまに子育てのアドバイスをさせていただきます。興味のある方は、資料を請求してください。☎162-0062新宿区市谷加賀町2-50-26「わいふ」分室内 NMS研究会 ☎03-260-2509 まで



「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

# わいふ

読んで書いて  
みんなでつくる

285

## 目次

デザイン／宮塚真由美  
題字／石渡希和子  
表紙イラスト／箕輪絵衣子

イラスト／荒井知恵 荒田ゆり子  
梅村 苺 奥島千恵子 小沢恵子  
カステラネンコ 弘法堂建二  
小林正子 佐藤瑞江子  
Jaslime 田沼千恵  
西宮さき 山田京子

4

梅雨の晴れ間をぬって

小石川後楽園で花菖蒲を観ました

「わいふ」編集部主催 花菖蒲を観賞する会

写真提供・文／「わいふ」編集部

### 特集 美容と私

高額な美容費用に反発 三田サキ

おしゃれはやめられない！ 入江由里

三種の神器のサメ・馬・蚕 鴨川典子

きれいになりたい 砂原富美子

たかが化粧、されど化粧 清水 司

私が化粧をしないわけ 中野正美

90

母の病氣

林 直美

94

座談会 私も言いたい

公園育児ってこんなもの

柴尾恵子・高木飛鳥・山本洋子

103

おすすめの二冊

桜井淳子

104

かいま見た中国の家庭

青木千恵

108

ブック情報

109

私の意見・あなたの意見

後藤 晶

110

ワーキングライフ

和田美代子

113

おすすめの二冊

和田好子

114

コミック これが子供の生きる道 ⑰

栗田 笑



一筆両断 ①7 西田淑子

## 私の男女共同参画体験記

森 栄美

## エッセイスト・クラブ

福島みさを・幾野真理子・加藤智恵子  
青島典子・中村哲子

おすすめの1冊 野本美希子

連載4

いのち、はるか——老親介護の日々—— 小林智枝

## フリートーク

高梨陽子・藤 広見・高松恭子・笠原静枝  
斉藤さよみ・田中慶子・太田啓子

連載2

リラの花 桜の花 浅野素女

笑える！

大久保れい子

## ズバリ一言

花岡京子・広瀬サカエ・井上暁子・島 初美・柴尾恵子

子育てフォーラム ●NMSのページ●

隅田美幸・両角葉子・由美あき子

## あなたへスマッシュ

飯島まゆみ・匿名・麦穂・林 夏子・菊池喜恵子  
末永真理子・山口遼子・後藤 晶・高宮みか  
十文字圭子・井上暁子・森本満美子・岩崎八恵

## 私もひとこと

伊藤琴子・鴨川典子・海林寺ひろい

石井しのぶ・立山花恵・斉藤さよみ・奈桃有子  
匿名・サト ウタ・草野ゆき・永田道子

コミック 毎日が平日 海砂

## 情報コーナー

スタッフから わいふインフォメーション

募集します 投稿のきまり

編集だより

文章講座のおすすめ 39 バックナンバー 59  
自費出版はわいふへ 69 お友達にわいふを 89

梅雨の晴れ間をぬつて

# 小石川後楽園で花菖蒲を観ました



満開の花菖蒲の前に記念写真

「わいふ」編集部主催

花菖蒲を観賞する会

六月十七日 小石川後楽園 涵徳亭

「わいふ」編集部主催の読者懇親会というのは、昔（東京編集部発足後の十数年、つまり今から十五年くらい前）はかなり行われたように記憶しています。

新宿の中村屋や随園、神楽坂のイタリア料理屋ソリッソ、あちこちでご馳走を食べた覚えがあります。

あのころは編集部も暇があったのか？ いや忙しくはあっても、編集長や副編集長がまだ若くて、元気だったからか？

どちらとも言えませんが、近年はやらない年が増えてきました。

今回の後楽園では、何年前であったか、編集部周辺の内々ばかり十人前後が集まってお

ビルに囲まれた小石川後楽園は、都心のオアシス



「今後もわいふをよろしく！」



出席者全員で乾杯！



花見をしたのが初めてで、それから誌上公募してお花見を二回しました。味をしめたのは、涵徳亭という貸席が他の公園にある貸席と違い、料理を出してくれるしアルコール類もあるということからです。ふつう公園の貸席は、料理はお弁当など持ち込まねばならず、お酒も禁止のところが多い。しかも新宿のビル街と比べれば、公園ですから環境がすこぶるいいので、繰り返しここで開くようになりました。

ところが三回とも桜がほとんど散ったあとのお花見、これは半年前に申し込みをしないと席が取れないため、開花予想がはずれてしまふのです。そこで今年は趣向を変え、花期の長い花菖蒲をねらいました。

ねらいは当たって写真にあるとおり、ちょうど満開でした。花菖蒲は梅雨どきの花ですが、幸い短い晴れ間にも恵まれて、楽しいひとときを過ごすことができました。

涵徳亭のお弁当で昼食会、ビール少々が入ったところでお一人ずつ、自己紹介を兼ねて近況を話していただきました。みなさん本当にいろいろな活動をしていらつしやう、「わいふ」の会員は元氣印ぞろいであることがよく分かりました。



辻浦知津代さん(左)と早乙女光子さん(右)。早乙女さんは7月3日から9日まで、「ギャラリー八重洲・東京」で開かれたグループ展に絵画を出品されました



## 小石川後楽園

### 円月橋



水面に映る形が満月のように見えるところからこの名がついた

さて後楽園といえば、遊園地や野球場のイメージが強いけれど、東京都の特別史跡・特別名勝に指定された公園が東京ドームの西側一帯を占めています。

これこそ江戸時代の初めから、水戸徳川家の屋敷であったところで、二代藩主水戸光圀、つまり黄門様の作った庭園なのです。

光圀は朱舜水という中国人の学者が日本に来ていたのを援護し、師事していました。この庭園には中国の名所をミニチュア化して、「西湖の堤」などと名付け、中国趣味溢れる異色の景観を作っており、「円月橋」という石橋は朱舜水の設計といわれています。



「一度も投稿したことがないのですが……」と有園順子さん(左)。NMSスタッフの万波真紀子(右)



今号に中国ルボを書いている青木千恵さん(右)と「わいふ」スタッフの望月浩子(左)



「今日初めての樋沢さんを誘ってきました」と八城安恵子さん(中央)。樋沢功子さん(右)と「わいふ」編集長田中喜美子(左)

## すばらしい仲間とともに

八城安恵子

むせかえるような新緑の木々の中で、自らを誇示するかのよう色とりどりに咲き乱れている花菖蒲。その美しさに感動し、おいしいお弁当に舌つづみをうち、すばらしい仲間に出会えた喜びをかみしめています。

それにしても「わいふ」の皆さんのパワーと知識欲には圧倒されました。25年という長い年月刊行され続けているということに納得。



『「わいふ」の講座への参加がきっかけ』と言う須藤範子さん(右)と「わいふ」副編集長和田好子(左)



高梨陽子さん(右)と「わいふ」スタッフの五十嵐和子(左)

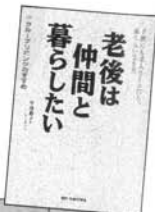


右から「わいふ」スタッフの成井登代子、山本節子、菊池裕子、野村康子。「わいふ四姉妹」(?)と呼ばれています



「わいふ」の歴史を知る桜井淳子さん(左)と「わいふ」出身のフリーライター早川裕子さん(右)。最近の著作『老後は仲間と暮らしたい』(主婦の友社)を紹介

有名な紅しだれ桜がありますので、何とかしてその見ごろに貸席を押さえたいと思うが、そう思う人が多  
いから競争率が高い。六カ月前の申し込み受付開始直後に押さえなければならぬし、その時点では開化予想が立ちません。三度とも失敗していますが、来年も試みてみたいと思います。  
今回はあまり参加者が多くなかったのですが、次回にはぜひ多数のご参加をお待ちしています。





社会思想社

<http://www.shakaishisou.co.jp/>

(価格は税別)

東京都文京区本郷3-25 ☎03-3813-8101

書店品切の時は代金引替宅急便380円

大反響！

# 年金で豊かに暮らせる町

主婦の投稿誌 わいふ編集部編



四六判・1600円

老後は、年金が一・五倍に使える町に移住しよう！  
安心の町30カ所を解説付で紹介。

その町とは——交通機関が通っている、安くて豊富な食料が手に入る、病院が複数ある、老人ホームがある、温暖な土地である、農園や園芸ができる、家賃が東京の50%以下、その上温泉が近い……。この条件に合った30の自治体を選び、老後年金だけで豊かに暮らせる町を資料・解説付で紹介。気に入った町があれば、すぐにも移住計画がたてられ定年後の人生設計を考えるガイドブック。

新版日本流行歌史 (上中下)

矢沢寛他編 日本初の流行歌歴史事典 ◆各五五〇〇円

日本を知る事典

大島建彦他編 習慣風俗等伝統文化事典 ◆八七三八円

歴史の研究 (全3巻)

A・J・トインビー 著者の代表的著作 ◆各二四〇〇円

定訳菊と刀——日本文化の型

R・ベネディクト 日本論の古典的名著 ◆一五〇〇円

教育史料出版会

〒101 千代田区西神田 2-4-6

☎03(5211)7175

## ハイスクールレポート

自分にあつた学校をえらぶ私立高校ガイド

入学してからでは遅すぎる！  
服装・頭髮規定は？ 生活指導の中身は？  
どんな行事があるのか？ 力を入れてい  
る教育内容は？ 進学への取り組みは？  
学校生活がこの一冊で見えてくる！

関東版 わいふ編集部編 4月末刊 ★2000円＋税

関西版 公立校も収録 / 5月末刊 ★2000円＋税

子どもはなぜ

★1500円＋税

渡辺 位

学校に行くのか

自分にあつた

★1602円＋税

早川裕子

高校のえらび方

●生徒・父母・教師が綴る 私の北星余市物語

やりなおさないか

暮らしのままで

北星学園余市高校編

中退生を受け入れる北の学園！

★1500円＋税

# 特集

## 美容と私



# 高額な美容費用に反発

横浜市緑区 三田サキ (64歳)

## 思春期終わりの頃

思春期の頃私の顔は、ニキビのみで出来あがっているようなひどいものだった。顔の肌は常に油でどろどろしていて、化粧をする年頃になっても、それすら出来ないありさまだった。

昭和三十年私が十九歳の時、ある病いで電気治療師に電気あんまをしてもらう事になった。そして毎日三十分間それを続ける事になった。金鎚みたいな器具でお腹や足の裏等を、こんこん

こんとたたくのである。温かい器具なので身体がほんわかして、とても気持ち良かった。

その治療を半年間続けたある日、ふと気がついてみるといつの間にか病氣も直っていた。そして嬉しい事に、あんなに頑固にはびこっていたニキビが私の顔から姿を消していた。私はとびあがって喜んだ。常日頃「神様、私は美人になりたいなんて、欲ばりな事は申しません。せめて普通の肌、化粧の出来る肌にして下さい」と祈ったものだった。

## ニキビが直っても

二十代に入ってニキビの無くなった私に、一抹の希望が芽生え、本気で肌の手入れをするようになった。ニキビのブツブツは無くなっても油でべとつく肌はそのままである。ファンデーションやパウダーできれいにメイクしても、一時間も経てば顔全体に油がにじみ出て化粧くずれして見られたものではない。毎日常な夕なに洗顔して、肌に磨きをかけたが油性はなかなか直らなかった。

## 少し高価な化粧品を使って

そして四十代前半から少々高額な化粧品を使い、また本格的な手入れをしてみた。洗顔、パック、マッサージとあらゆる事に気を使い、一生懸命努力

をしてみた。だがその成果は得られず、肌は依然としてあかぬけなかった。

## お金をかけずに 楽しい手入れを教わる

そして十年位過ぎた頃、近所の豆腐屋さんにきれいな娘さんがいた。その人は化粧は全くしてないが、肌がものすごくきれいでとってもあかぬけた顔をしていた。そこで思い切って普段どんな手入れをしているか聞いてみた。するとその人が仕事の手を休めて、自分の手入れの方法を教えてくれた。

「私は、けちだから化粧品にお金をかけないですましています。先ず洗顔のあと、ジョンソンベビーローションを顔にぬり、熱いお湯につけたタオルをしぼり、手早く顔に当てしばらくそのままだにして肌を蒸らし毛穴を開く。すると毛穴の中の汚れが外に出てしまう。そこで手早く洗顔してヘチマ水をぱちぱちとたたき込み肌をひきしめる。

さらにジョンソンベビーローションを乳液として使い、その上からマダム

ジュジュクリームE（大昔から使われていた）をぬりこんで終り。そしてメーク落としも、ジョンソンベビーローションでふきとる」と言った。その方は毎日それを続けているという。私は早速その安あがりの化粧品、つまりジョンソンベビーローション（六百円）、ヘチマ水（八百円）、マダムジュジュクリームE（六百円）を買い求め言われた通りにやってみた。

## スチーム美顔を 始める

少し経った頃新聞の広告欄で、スチームを顔に当てる美顔術のあるのを知った。これはいいかも、蒸したタオルを顔に当てるよりもっと効果があるのではないかと思い、早速その器具（二万円）を取りよせ使い始めた。私には一寸高価すぎるかなあとも思ったが、何より化粧品にお金がかからないので、これくらいいいだろうと思った。

その器具は一寸深みのあるお皿のような釜が付いていて、その釜に湯を沸

かしその上に顔がすっぽり入る大きさの、かこいが付いている。その面に顔を当てて湯気がたち始めてから十五分間位顔にスチームを当てて毛穴の中の汚れをとるのである。そして豆腐屋さんに教えていただいた通りのスキンケアをするようになった。これを週二回ほど行なう二、三年も過ぎた頃には、あの頑固な油性も大分少なくなってきた。化粧くずれも昔ほどではなくなった。磨けど磨けど、どう黒かった私の肌も、少しはあかぬけたのではないかと心ひそかに思っている毎日であった。

## さらに欲を出して失敗

そうした中、私はさらに欲を出し、この大きな毛穴のある私の顔を、きめの細かい肌にしたくてある野心を持った。やはり新聞広告で見つけた「淡谷のり子さんの使っているという美容ローラー」を、今にも美肌になれるような甘い宣伝文句につりこまれ、使ってみようと思い早速注文して取りよせ

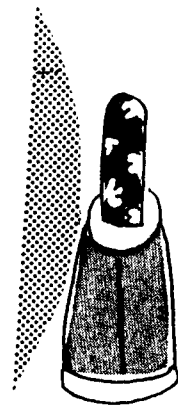
た。そして三カ月間毎日スチームをやめて、ローラーを顔にころがしてみた（毎日二十分間）が、これは大きな失敗だった。何の効果もない。

この間スチームを休んでいたの、ローラーを使う前より肌に吹出物が出来て、かえってきたなくなつた。宣伝の甘い言葉に乗せられて、そんな物を使う気になつた自分の心のあさはかさに、腹が立つ思いをした。

## 手ぬきしても

そして押し入れにそーっとしまつておいたスチーム器を取り出して、再びこつこつと休む事なく肌の手入れに専念するようになった。そのスチームを当てた後の自分の肌を両手でそーっとなでてみると、実にしっとりしてとても気持がよい。それに日頃の化粧のりが、とっても良いのである。

昔美容師に聞いた事がある。「高級な化粧品でも安い物と比べると中身はほとんど変わらない。ただ違うのは香



料だけだ」。そんな裏話を聞いてなるほどと思つた。私の身のまわりに、ポーラ化粧品を使つて一個一万円以上もするクリーム等を買っている人がいる。

その人と一個六百円のクリームしか使つてない私の肌とくらべてみると、全く同じような皮膚をしているのに気がついた。そして、むやみに高額な化粧品を使わなくとも、自分の肌に合った手入れをしていれば、化粧くずれのない肌を保つ事が出来ると分かつてきた。

## 肌の手入れも

### メイクも安価で

そして基礎化粧もこんなに安価な物

で、手間ひまかけずに使用している。こうして出来あがつた顔にメーキャップするその方も、今ではすこぶる簡単で安あがりな方法で行なつてゐる。先ず洗顔してスキンケアしたあと、ファンデーションをぬり粉おしろいをたたきこみ、上まぶたの目のふちにグレーのアイシャドーをぬる。

上側だけの目のふちに、一本の糸ほどの細い線で真つ黒のアイラインを描くのである。

そして、眉毛の形を整える程度に眉ずみをぬる。口紅を付けて終り。

四十代の頃美容師のすすめるままに高い化粧品を買いこみ、肌の手入れをするのに幾通りもの物を使つて毎日一生懸命だった。今となつてはまわりの人から「顔の肌が若いね、何か特別のことをやっているの?」と言われながら、ちよつぱり嬉しくなつてゐる。ここへくるのに、ずい分まわり道をした。

もつたいない事をしたと思う今日この頃である。



# おしやれはやめられない！

京都府乙訓郡 入江由里（32歳）

私が美容に目覚めたのは二十八歳の夏、久しぶりの海水浴でヒリヒリ痛くなるほど真つ赤に焼けてからだ。

二十歳過ぎまでこんな事は何回もあつたが、結婚して初めて、しかも三十前で、地黒になるのでは……シミだらけになるんじゃない?! 不安というより恐怖で居ても立ってもいられなくなり、当時、新発売のホワイトニング（五千円）を買った。それ以来、年中、冬でもホワイトニングは欠かさなくなり他の製品にも興味を持ち出したのだ。

それまでの私は、洗顔、化粧水だけでメイク落としても使つてなかつた。独身時代は夜中飲んだくれて帰り、その

まま寝るのもしょっちゅう。それでも肌がきれいと言われてんだから若いっですごい!!

今の基礎化粧品を紹介すると、朝、

①美容器具のスチームを当てながら洗顔 ②雪肌精（コーセー）でホワイトニング ③化粧水 ④フェースアップ美容液 ⑤UVカット入乳液 ⑥目元クリーム ⑦まゆ毛と口紅のみのメイク（お出かけ時はファンデ、マスカラもします）。

ポイントはいつもファンデをつけず、UV乳液で紫外線カットする事、せっかく毛穴をきれいにしたのにすぐファンデで汚くするなんて嫌です。ゆつくりできる日曜日の朝は泥パック

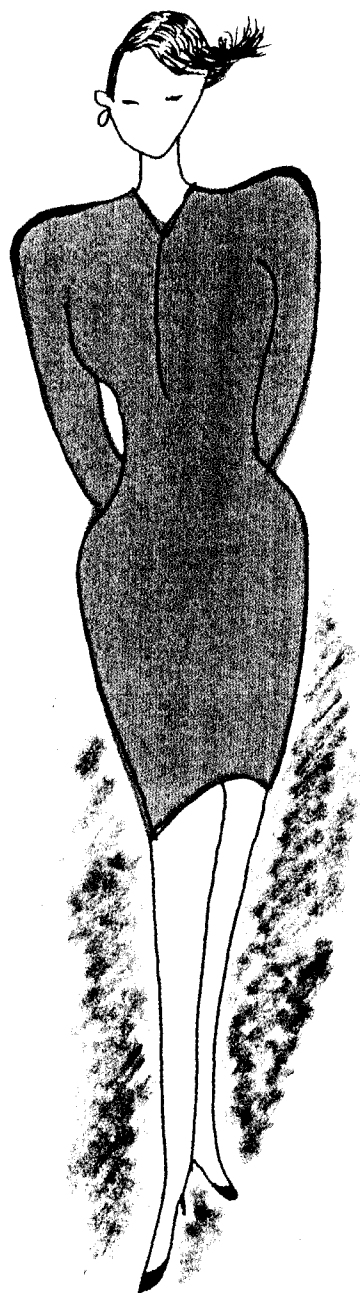
や毛穴パックもします。

ちなみに商品名が書いてあるのはお気に入りだと思って下さい。

夜は、①DHCクレンジングオイル<sup>プラス</sup> ②洗顔は入浴中に、③雪肌精 ④化粧水 ⑤フェースアップは朝と同じですが、心持ちたつぷりめです、⑥DHCオリーブオイルで保湿、⑦目元クリーム、または目元パック。ポイントは⑥のオリーブオイルを髪や手にも使う事、べとつかずサラサラになります。

こう書くと非常に面倒くさそうでやつてられない、と思う人もいると思うけど、テレビ見てゴロゴロしながらなので、肌や心をいやしてくれる、欠かせないリラックスタイムとなっている。お手入れ最後にもう一本、などのコピーの美容液を使った事もあったが、基本+自分の気になつてる部分ケアをする、多すぎず少なすぎずの今のやり方が性に合ってるかもしれない。

他の体部分もケアしてます。手はもちろん、ひざ、かかとにクリーム、お風呂で塩もみしたり、冷水シャワーな



ど手頃なモノは試してみても、続くか続かないかは自分が気持ちいいと感じるか感じないかです。効果があるかないか自分では分からないものだと思うし、ハッキリ言って目元クリームを欠かさなくても目元のシワが深くなったり、クマも取れない。年齢より若く見られる事もありません!! これではダメだと目元のハリを保つという美容器具(三万三千元)を買ったばかりだ。ダイエットのように体重が少しでも減

るとその効果を確かめられるが、これだけは「十年後に差が出る」との言葉を信じるしかない。でも差つきちんとケアしてない人との差でしょ? このメーカーとあっちのメーカー使い続けた人との差、五千元と千円を使い続けた人との差なんてないのかな? いかにも美容に無頓着な人に勝つても、うれしいわけがない。たくさんこういう人を見かけるが、内心、まだ若いのにもつたない、と思う。また反

対にきれいな肌の人を見ると見習おうと思う。美人やスタイルなどの外見じゃなく、いつまでもきれいでいたい、いようと心がけている人が内面から素敵になっていくのでは?と思う。それじゃ化粧品なんてどれも同じ? これは永遠の疑問、先ほどの「十年後に差が出る」と同じくらい未知のテーマだ。

でも私はこのテーマを逆に楽しんでる。一本化粧水が終りかけの頃、次

は何を使おうか雑誌で情報収集し、真剣に悩む。実はこの時が服のショッピングと同じ感覚でウキウキするのだ。そして、初めて肌につける瞬間のワクワク感、おニューの服に袖を通すウキウキ感と全く同じ。唯一、我慢ならぬのは、新製品が出て、「いやっ、よさそうやん!!」とすぐ飛びつきたいのに、現在、使用中の物がたっぷり残っ

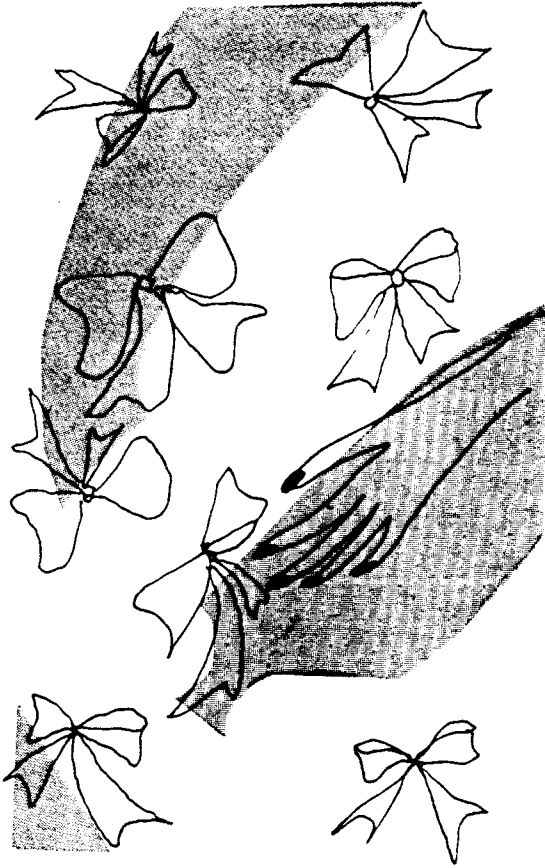
てる時だ。何度かそれを無視して買っで置き場所には困るわ、古くなつてボディスプレー用にしてもつたいない事をしたので、使い切ってから買うことにしてるのだ。これは店頭で気に入った服を見つけたのに、もうすぐバーゲンや……と我慢する事に似ている。そして、お気に入りのアイテムに出会ったうれしさは、何回着ても買ってよ

かったと思う服と同じかな?

「十年後の差」は近所の人と比べるレベルじゃなく、今の自分との差。シワの数や体重が変わらないのが理想。そして今のように美を追い求める心を保っていたい。

実は最近、自分の写真を見て、老けたと実感し妥協しかけたのだが、あきらめるのは早い、と思い直した。きつとこれからも何度も自分の顔を見て、ギョッ!!とする事があるだろう。でも、もうええわ、と逃げたらダメだ。いつまでも若い時の自分と比べてため息しないで、その時その顔を受け入れて好きになれたらいいな。

それにしても、このマメさと情熱、他の事にも注げたらいいのだが、料理や裁縫なんてでんでダメ。そして自分でも不思議な事にメイクも全く興味なく、下手でマスカラやアイラインなんてひどいものだ。主婦代表美容ライターになりたいなんて思ってるのだが、メイク商品にも詳しくないとダメだろう。



# 三種の神器のサメ・馬・蚕

静岡県小笠郡

鴨川典子（46歳）

整理整頓が格別下手なので、なるべく物を持たないようにしているが、唯一の例外は帽子。農作業用（家はミカン農家）のも含めると、なんと一ダースを状況に合わせて、とっかえ、ひっかえ被っている。色こそ白、青、紺で地味だが、素材も形も種々で、綿、絹、フェルト、化繊に、サンバイザー型、多機能型、稚子様型まである。

帽子好きというわけではなくて、ただひたすらUVケアのためだ。全く化粧しない私は、直射日光に当たるのだけは避けたいのだ。妹が職場で、姉は外を一メートル歩く時でも、帽子を被る人だと言ったら、

「オゾンホールも拡大してるから、

オーストラリアでは帽子どころか、長袖・長ズボン着用が国策ですってよ」などと言った人から、「お姉さんて、なんて大げさな人」と言った人まで、賛否は半々だったとか。

まあ、なんと言われようと私は帽子なしでは暮らせない。面倒だし蒸れるし、暑苦しい。髪もベチャンコになり、視界も悪くなるので本当は被りたくはないのだが……。

最近、サンケア関係の記事で、人は二十歳までに一生分の三分の一以上の紫外線を浴びると書いてあった。小さい頃から外遊びが好きで、中学校時代からずっとテニス部に所属していた私など、きつともすごい量を浴びてし

まっているはずだ。ただでさえ加齢現象顕著な肌に、これ以上の紫外線をのさばらせてはならじ……。

それにしてもテニス時代通算六年、元は色白であるはずの私がなんて色黒だったことか。今でも忘れられない思い出が幾つかある。

その① 大学一年の夏、名古屋市に試合に出かけたおり、銭湯に入った私は鏡に写った自分の姿を見て驚いた。なんと下着を着けたまま風呂場に入ってしまった（と思った）。よほど疲れているんだなあと、恥ずかしさで飛び出そうとしたとたん、気づいた。上下の下着部分だけ、やや日焼けを免れていたの、チラと見た目には着衣のまのように見えたのだった。

その② 同じく二年の時、夏の大会に出場後、電車で乗り合わせた小さな女の子が、私達を見て祖父らしい人に尋ねた。「なんでこの人達、こんなに黒い顔してるの」。おじいさん、悠然と答えていわく、

「塩水を被って外にずっと立っていれ

ば、ああなる」

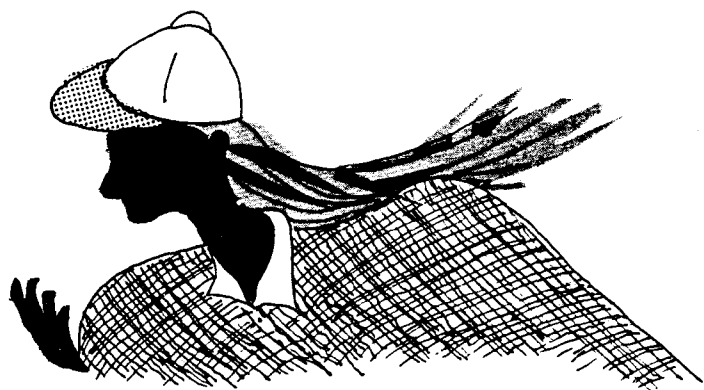
このラケットを見て下さいと、私達は言い返したかったけれど、笑いをこらえるのに一生懸命だった。今どきのガングロ姉ちゃんにも勝てそうな黒さだった。

その③ 大学一年の春休み明け、教室に行ったら、ひとりの男子が私をまじまじ見つめて、

「なんだ、君だったのか。あまり変わってしまったんで、誰だかわからなかったよ」

春の紫外線が、よほど強かったらしい。世の中の人が色白な季節、休み中コートにいた私は、部員皆まっ黒なので、自分の黒さに気づかなかったのだ。

体育会系クラブで、週二回は午後半日、日曜、祝日も大部分コートにいた。色黒の女の子を見たらテニス部か、陸上部と思えば間違いないというのが、学内の定説だった。UVケアなんて言葉も知らない色気なしの学生だったが、五月に教育実習を控えてい



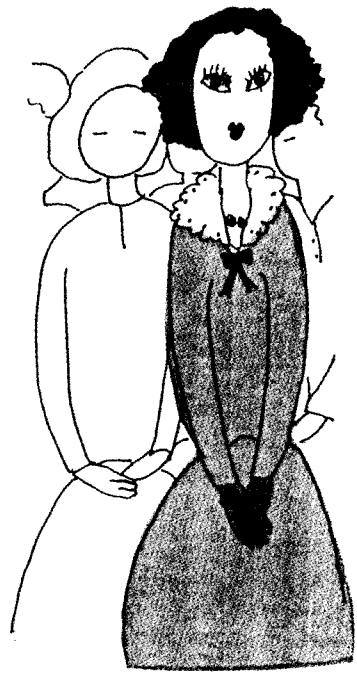
ることもあり、四年の春休みに、ついに日焼け止めファンデーションを買った。ところが元来荒れ性の上、下地に油性の物を塗るなんて芸当もできなかったので、肌が荒れてしまった。なぜかファンデーションを塗った日に限って、テニスの調子も悪い。黒い上に荒れてしまった顔を鏡の中に見つめながら、スランプ状態の私は、自分の肌に真剣に言い渡した。「申し訳ないが、あなたには手をかけてやれない。自分で何とかしてちょうだい」。心の隅で、以後肌に何か塗る(化粧する)ことは、たぶんしないだろうという予感がした。

卒業後も何年間かは、紫外線には無頓着だった。子どもを外で遊ばせながら、平気で日向に座って本を読んでいた。

その後、近くの公民館のボランティアア司書をした時、日本消費者連盟刊の化粧品の害を書いたシリーズを読む機会があった。

無精な私には都合のいいことが書か





れていた。肌に塗る物は全て肌にとってには汚れであるから、何も塗るな。フェイスブラシなんてもつてのほか、洗顔は自分の手の指がベスト、水道の流水でOK。

それまでもメイク・アップ用品は持っていないかったが、これらの本のおかげでますます化粧しない決意が固まった。それでも気の張る式典に出席する機会に、必要に迫られて口紅と粉おしろいをひとつずつ、合計四千円を買って、今まで五回ほど使ったが、その時の写真を見ると、「わたしでないわたし」が写っている。いつもの素顔の方

がよほど「見られる」のはなぜだろう。

前述のように元来が乾性・荒れ性で、名にし負う「遠州からっ風」の吹く所に住んでいるので、冬場には少々油分が要る。特にくちびるとその周囲が荒れるので、スクワランオイルと馬油をつけることもある。

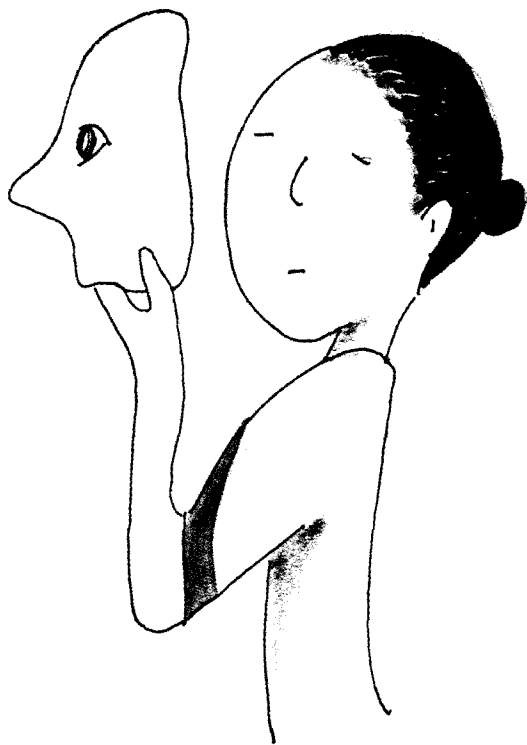
そんな私の肌でも「きれい」、「素肌美人」（ホメ殺しか）と言ってくれる人もいるので、化粧品代ほとんどゼロの私は、実にお安い女なのだ。

さて髪。テニス時代、美容院で「いっただいどんな生活をしているの」と聞かれたほど傷んでいた。紫外線で

傷み、アンツーカーのほこりで傷み、枝毛もできて赤茶けていた。化粧品害についての本を読んだ時、合成シャンプーが毛髪に与えるダメージについても知った。そして一大決心をして石けんシャンプーに替えた。なぜ決心が必要だったかと言うと、合成シャンプーで知らず知らずに傷んでいるので、石けんに替えるとしばらくの間、髪がごわつくこともあると書いてあったからだ。

心配したほどリバウンドもなく、毛質も徐々に改善され、この頃の茶髪軍団の中では、私の髪などは見事な「カラスの濡れ羽色」だ。市販のリンス代わりに、「お湯洗面器一杯に、おちょこ一杯の酢」。お安い女極まれり。だが、この石けんシャンプー（私のは太陽油脂のパックス・ナチュロンシャンプー）と酢のリンスのコンビはとってもいい。抜け毛も減ったし細くてコシがなかった髪が、とても丈夫になった。

では、ここで再度、私の素肌対策を列挙。



①何も塗らない

②直射日光に当たらない

③汚れたと思ったら、すぐ洗う

軽く八難以上有するお顔の持ち主で

あるが、目指せ美肌！ 目指せ美白！

「富士山の見える所」に生まれ育って、定住しているという大ハンディな

なんて何のその。サメ（スクワランオイル）と、馬（馬油）に助けられて、ひ

たすら歩む四十路。おっと忘れていた。

洗い晒しの木綿がとても好きだが、なぜかシルクも大好きで、タンス

や引出しを開けると、あるわあるわ、

くつ下、ショーツ、スカーフ、タンク

トップ、ブラウス、パンツにジャケッ

ト……。シルク一〇〇%のオンパレー

ドだ。シルクにはUVカットの性質が

あると近頃知り、一石二鳥のラッキー

気分。

本当はお安くはない女であることを、自己発見してしまったが、犬・猿

・キジならぬサメ・馬・蚕を引き連れて、以後もこの直面（ヒタメン）路線

でいこうと、決意した次第である。

# きれいにになりたい

熊本県八代郡

砂原富美子（43歳）

私は姉妹の中でも一番色が黒い。四人姉妹の一番下だから、「あんたはでがらしだね」と言われて育った。

でがらしとはお茶の残りのこと。お茶の味も悪くなり段々色が濃くなり、ますますなる。

長女は雪のような肌をして、次女もまあまあ色白で、三女は普通の白い肌。ところが私ときたら、色が黒い。姉達の色白だから幼い頃よりコンプレックスが強まる。これじゃ、みにくいアヒルの子の人間版だと思ったりした。

それでも子供の時は、日焼けも気にせず、川や野原で遊んでいたが、さすがに高校生になると、悩みはじめた。

アルバイトで少額の金銭を手に入れるようになる、さっそく化粧品を買い始めた。

ファンデーションは高くて買えなかったの、その頃、TVで宣伝していた「ロゼット洗顔バスタ」を使うことにした。白子さんと黒子さんが風呂呂に入って顔を洗う場面が気に入った。やがて黒子さんも、真っ白い肌に。

初めて使った時は独得のイオウの香りに驚いたが、泡だちも良く、洗い流すと肌がつるつるしてきた。

高校三年間は使い続けた記憶がある。しかし宣伝のように白い肌にはなれなかった。毎日二時間以上も太陽に照らされ、通学や運動したりの日々

は、洗顔料の力だけでは、日焼けを防げなかった。

大学生になってファンデーションを使い始めると、一応人並みに白い肌に変身できた。

価格は高価でセットで集めると、すぐ一万円札が飛んでいく。

基礎化粧品だけメーカー品にして、表面をぬる分は、当時流行した百元化粧品を利用することにした。

しかし中には肌がひりひりしたり、ぶつぶつができたりと合わない商品もあった。

ニキビの年頃も重なり、思いきって化粧品を使うのをやめて、友達のお母さんからすすめられたアロエ石けんを使い始めた。普通だと石けんで洗うと顔がつっぱった感じがしたが、このアロエ石けんだとつっぱらず、肌がしっかりとしてくる感じがした。

アロエ石けんをしばらく続けていると、少しだが、色が白くなったみたいだ。

社会人になると、化粧もうまくなっ

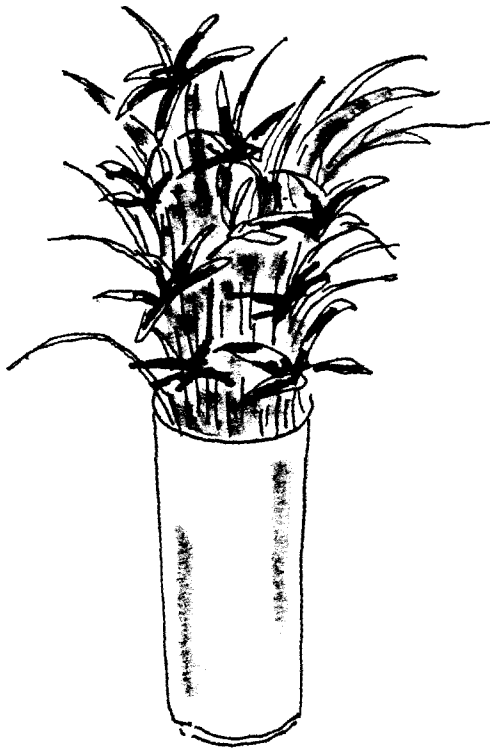
て、地肌の黒さもカバーできるようなった。

ただ机に向かう事務職は運動不足を招きやすく、朝食ぬきの毎日が原因なのか、私はガンコな便秘になり肌が荒れた。

その時、ふと見た週刊誌で、いい物

を発見した。それが美容洗顔器、エレンスパックだ。

四万円は高い値段とは思わなかった。水をいっぱいに満たした透明な容器は、下部のヒーターのある本体によって温められ、小さな気泡を発生し、ただじつと顔を水面に浸すだけ



で、振動によって肌の奥の汚れを取ってくれるという商品だ。

時間がくるまで息を止めているのは大変だが、タイマーが止まり、水面になにやら白いゴミのようなものが浮いていると、きれいになった気がしたものだ。

私は朝夕顔を洗い、これで美人になれるぞとおおいに期待した。

ところがある夕方のニュースで、私は自分の耳を疑った。

「美顔器という名のもとに発売された商品はまったく効果のないものと判明しました」

ニュースの画面に現われたのは、私を買ったあの美容洗顔器にまちがいない。

買ってから一カ月もしないうちに、私の期待は水の泡になってしまった。

週刊誌にも話題となつて、美容洗顔器としては効果はないが、痔の治療にはいいかもという記事まであった。イラストには、洗顔器に、顔ではなくお尻を浸している老人の姿が描いてあつ

た。ああ、ショック！

しばらくすると、スーパーの日用雑貨売場に、なんとあの美容洗顔器が、五百円で売られてあった。

私は四万円で買ったのに、この三万九千五百円の差はなんなのよ。すごく・ソ・ンした気分ではばらくは落ち込んだ日々を過ごした。

一度でこりれば済むものを、その後も歯のマニキュアや、脱毛処理器など、美容広告を見るとこれこそ求めていた商品だと買ってしまうありさま。

効果のある商品はほんの一部。ほとんど途中であきらめたり、捨てたり、押し入れに片づけたりと、ずいぶん無意味な金を使った気がする。

外から手入れしても、効果があるとは限らない。そう気づいた私は、食べる美容食や、飲む美容飲料に替えることにした。

現在私は、ビタミン剤を飲んでい

る。化粧品は、外出しない限り使わない。家にいる時はノーメイク主義。便



秘に気をつかいファイバー飲料も飲んで

いる。野菜不足は血液の流れが悪くなる。

野菜類が不足気味かなあと考えたので、青粒も通販で手に入れた。

化粧品を入れるドレッサーの中は私の宝物が入っている。

ビタミンA、B、C、E、その他健康薬品もそろっているのである。

私がたどりついた美への追求は、体の中から美しくという結論になった。

ただし、コラーゲンとローヤルゼリーは高価なので、ただいまストックは空っぽです。



# たかが化粧、されど化粧

東京都大田区 清水 司

「そんなバカな……」本屋の書棚から何気なく抜き取った本を開いてみて愕然とした。「読んではいけない。はまってしまったら大変な事になる」と思いつつ、数日のうちに全巻読破してしまったのが、船瀬俊介著『あぶない化粧品シリーズ』。

そもそも私が探していた本は、笑い皺を目立たなくさせる化粧法の載っているものだった。体を動かすけいこ事を始めて、自然に十キロ以上痩せたのはいいけれど、本人はバリバリに元気なのに、近所で「どこか病氣？」と噂されるのだ。頬がこけて見え、口元には笑い皺にファンデーションがくつきりと線を作り、よけいに疲れた表情に

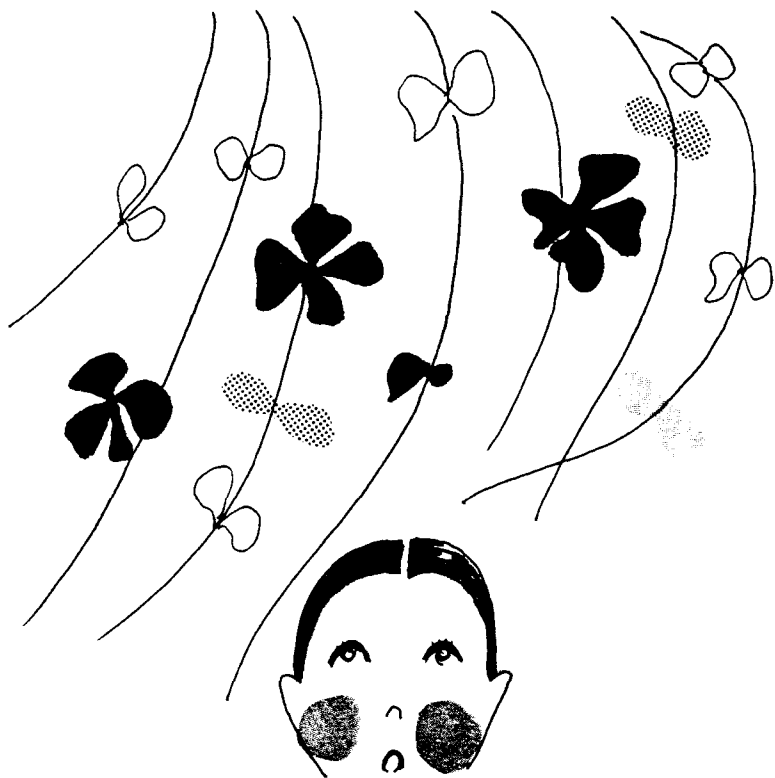
映ってしまう。その頃はやりの目もとクッキリシートを、口元に使っても何の効果もなかった。

そしてもう一つ気になっていたのは左頬のしみだった。最初はちよつと気になるほくろのような点だったものが、あつという間に米粒大まで広がっていた。しみ隠しのスポットファンデーションのようなものを買った。が、化粧はかえってそのしみを目立たせてしまう。そこへ持ってきて化粧品被害の数々の事例。化学物質による累積性皮膚炎のしみなのだとすぐに理解した。即刻ノーマイクを決意する。

しかし、化粧を始めて二十余年、化粧することがあたりまえ、素顔で人前

に出るのは罪悪だときえ思っていた。化粧した顔を見慣れていると、素顔はとても疲れて見える。化粧を落としたら絶対に買いい物にも出なかった人間が、ノーマイクで外出したらどうなるか。まず、会う人ごとに「どうしたの？」と質問責めにあう。その度に「えーと、そのう……」としどろもどろ中途半端な言い訳をくり返す。まだ質問される時はいいが、何も言われない時は相手の視線が妙に顔に突きささる感じがして、いてもたってもいられない気持ちになる。人前で素顔でいることが、あたかも全身を裸でさらされているような恥ずかしさなのだ。

化粧がこんなに女性の行動に影響を及ぼすとは、思いもよらなかった。外出しようと思っても、「ノーマイクであんな所へ出掛けるなんて」と躊躇してしまうのである。世間の一般的な常識として、化粧は女性の最低限の身だしなみだ。四十歳近い女が、近所の買いい物でもないのに素顔で電車に乗っていると、回りの人が皆軽蔑の眼差しで



見ているように感じる。でも、たしかに化粧品に含まれる化学物質の有害性は理解できるから、ノーメイクは実践したい。ジレンマ。ひきこもりがちになる自分に決心が揺らぐ。

それでも化粧品に手が伸びなかったのは左頬のしみのおかげだった。薄くなっただのだ。まるで生き物のように少しずつ形も変わっていく。

「一年間ノーメイクでがんばろう。このしみがどうなるか、自分の顔で実験だ」

決意さえ揺るがなければあとは慣れである。隈のある目元も、色のない唇も、これが素のままの自分と納得して気にしない。純せっけんを使って洗いつばなしの顔は（基礎化粧品がいちばん皮膚に悪いということは、化粧品被害の常識である）、カサカサと粉がふくように皮がむけ続け、四六時中つっぱっていたし、リップクリームも塗らない唇は、スーパードライの時でも構わず割れて流血する。でも、半年くらいがまんした頃、そんな症状もなく

なった。最初、げんな顔で見ていた母も、肌の艶が良くなったとほめてくれた。

ただ、困ったことに洗っぱなしの顔に慣れてくると、鏡を見るのを忘れてしまうようになった。うぶ毛のひげが生えていても、眉毛が雑草のようにぼうぼうでも、あげくの果てに髪の毛が逆立ちしていても気にせず外出するようになってきた。気がつくときピアスすらしていない自分に、「なんか私、女を捨ててるような気がする……」と深くため息をついたものだ。

あの本に出会ってから一年半が過ぎた。今でもノーマイクを基本にした生活は続いている。化粧する時間が削られて、朝はのんびりと好きな事ができる。化粧品を買わないので家計にずい分と余裕もできた（考えてみると今まで二十余年、いったいのくらい化粧品費としてお金を捨ててきたのだから？ 気が遠くなりそうだ）。左頬のしみは完全にはなくなっていない。けれど確実に少しずつ薄くなった。

ている。皮膚の奥深くに沈着したものは二年くらいかかる、と書いてあったので、もう少しかな、と期待しながら鏡を覗くのも楽しみだ。紫外線防止のため、ベランダに出る時も外出する時も一年中帽子を被っているが、いろんな帽子がはやっているのだからこれ選ぶ楽しみも増えた。夏は帽子と日傘のダブルブロック。多少の日焼けによるしみは覚悟して、あえて日焼け止めクリームも使わない。

化粧する事については、当初ほどこだわらなくなった。女としてより美しく見せたいと願うのは当然の事だし、女の勝負時にお守りがわりに化粧で武装するのも、必要だと思うからだ（これはノーマイクを経験した上で改めて深く理解できたように思う）。老人ホームのお年寄りが化粧をしたら元氣になったり、あざのある人がメイクで人生が変わったり、舞台メイクに至っては必要不可欠なものだ。『メイクアップ』には本当に多くの利点がある。要は、化粧品の成分には皮膚に悪

いものが必ずと言っていいほど含まれているということを、本人が認識した上で使用することなのだと思う。化粧品を使っている人の大部分は、成分として表示されているものが人体に有害だということも知らないで、毎日せっせと顔にいろいろなものを塗りたくっている。化粧品業界の打つ宣伝に洗脳され、化粧品を使うのがあたりまえと考えてしまう。化粧品についての正しい知識を学んだ上で、素顔の美しさを損わない生き方もできるということを、一人でも多くの人が知ってくればいいと思う。

私だって、もつときれいでありたいという気持ちは常に持ち続けている。和服を着る時、パーティに出席する時、大切な友達に逢う時、夫とたまたまに出掛ける時、ここぞとばかりにがんばってメイクアップに励む。でも普段の自分は、化粧でごまかさなくても胸をはって生きていたい。心が満たされて瞳が輝いていれば、それが一番美しい自分であると信じて。

# 私が化粧をしないわけ

大阪府南河内郡

中野正美

## 化粧品との出会い

高校三年生の時、ある化粧品会社主催の美容講習会があった。一応希望者対象ということだったと思うが、私も参加したところを見ると、その頃はまったく化粧に興味がなかったわけでもなさそう。そのときサンプルでもらったのが、私が手にした最初の化粧品である。その中にきれいな色のマニキュアが入っていたので塗ってみた。しばらくすると、はげて汚なくなってきたが、どのようにして取ればいいのかわからない。友人に尋ねて、除光液というものがあるのをはじめて知っ

た。化粧品についての知識もその程度のものであった。

## 化粧をやめたきつかけ

高校を卒業してからは、そんな私も時々口紅を塗ったり、アイシャドウをつけてみたりと、まったくノーメイクではなかったが、ある時、私が化粧をやめるきつかけになる出来ごとがあった。

私の友人のIさんは、いわゆる化粧ばえのする顔立ちで、とても美しい人だった。その人と旅行に行ったことがあったのだが、夜お風呂に入ったあとのお化粧を取った素顔を見て驚いた。眉毛は半分以上ない。皮膚の色はまっ

たく生氣がなく土色。唇の赤味もほとんどない。お化粧をしたときの顔とのあまりの違いにショックを受けてしまった。そのとき、私はやっぱりいつどんなときでも、同じ顔でいたいなあと思っただけで、これが化粧をしなくなった最初のきつかけである。

## なぜ女性だけが化粧？

ところで、学生時代の女性に化粧をしないと言う人はあまりいない。若い美しい肌になんか化粧する必要はない。自然のままが一番いいとか言われる。ところが働くようになると、肌の状態はそんなに急に変化するわけではないのに、言われることは百八十度変わってしまう。化粧は女性のたしなみとか、素顔のままではまわりの人に失礼であるとか、色々理由をつけられて、今度は化粧することを強制されるのである。

幸い私の勤め先は学校で、あまりうるさく言われることもなかったが、他

の職場だったら、居心地の悪い思いをしたかもしれない。

だいたい女性は人に素顔を見せるのは失礼だなんて、なんと失礼なと私は怒りを覚える。男性も化粧しなければいけないと言われているのなら、まだ

少しは許せるかもしれないけれど……。なぜ女性だけが言われるのだろうか。

こういうまわりの風潮に気付いたとき、私は絶対に化粧はしないでおうこうと思った。私が化粧をしない第二の理由には抵抗である。



## ノーメイクの利点

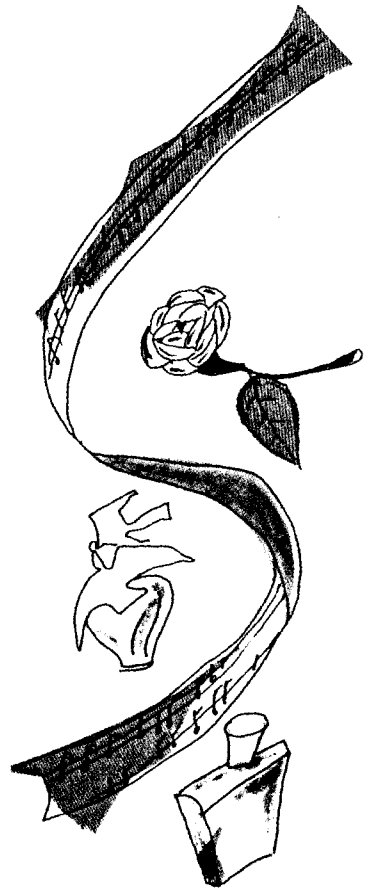
ノーメイクは何よりも快適である。夏は涼しい。汗をかいてもすぐ顔を洗える。時間がかからない。お金もかからない。そして肌のためにも一番いいように思う。

化学物質の固まりのような化粧品を塗ることは、皮膚呼吸も妨げられ、いかにも体に悪そうな気がする。

実はノーメイクというだけではなく、いわゆる基礎化粧品といわれるものも私は一切使っていない。以前は何度か使ったことがあるのだが、いつも使って一週間ぐらいうると、肌が黒ずんできるといった気がするのだ。そういうことが何度かあり、とうとう使わなくなってしまった。

唯一の手入れ（と言えるかは疑問だが）はお風呂に入ったときに、ベビー石けんで顔を洗うことである。もちろんそのあとは何もつけない。

それと、ここ数年気をつけているの



が紫外線である。夏には日傘をさすよ

うになり、海やスキー場では日焼け止めを塗るようになった。おなかなど日の当たらない部分の皮膚がとでもきれいなことから考えても、紫外線は皮膚にとってかなり悪そうである。紫外線対策はもっと若いころからしておけばよかったと少し後悔している。

このように何もしていない私の肌は、まっ黒でしみやしわだらけかというところでもない。それどころか時には年齢の割には肌がきれいだと、褒められることもあるくらいだ。基礎化粧品で手入れすることが本当に肌のため

にいいのか、疑問に思っている。

## 自分で納得できる 美しさを求めて

私は四十六歳である。化粧をしなくても美しい年齢はもうとつくの昔に過ぎてしまった。時には化粧をしたら、もう少しましに見えたり少しは若く見えるかな。いつまでも意地を張っていないで、してみたらと思ったりすることもあるが、結局はやめておこうということになる。

ただ化粧をしていないから、身なりもかまわない人とは思われたくない。

化粧しないからこそ、おしゃれな人になろうと心がけている。

まず、服はバーゲンなどを利用して、できるだけ質のよいものを購入する。自分に似合う色を研究し、体型をカバーできるデザインを選ぶ。朝、服を着たら必ず大きな鏡に全身を写し、前や横、時には後ろ姿もチェックする。なるべくいい姿勢で颯爽と歩く。以上のようなことに気をつけている。

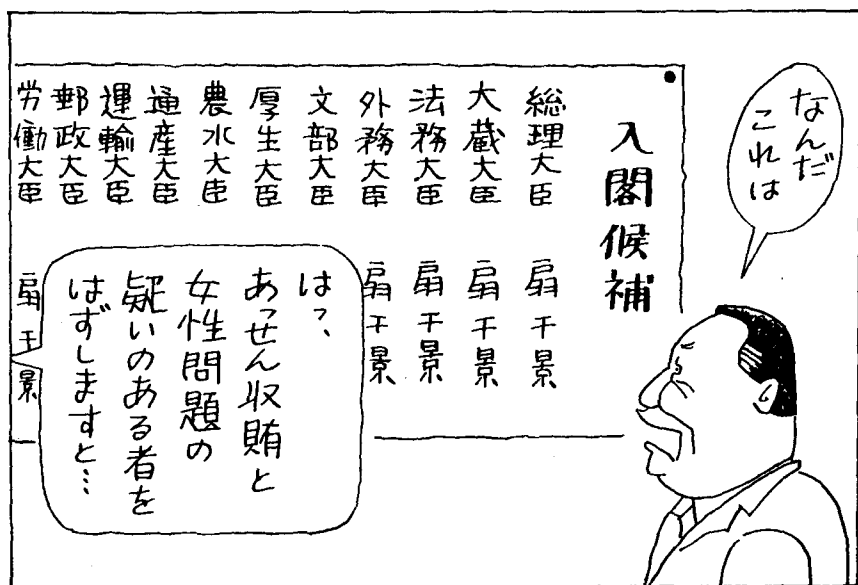
できるだけ自然のままの姿を大切に、納得のできるおしゃれをし、自分らしい美しさを求めていきたいなあと思っている。

(え・田沼千恵)

第2次

森内閣初の女性建設大臣誕生 (17)

一筆両断



# 私の男女共同参画体験記

森 茉美 (39歳)

四月、毎日少しずつ暖かさを増し、新しいことが始まる季節にこの話も始まる。

「H市の生涯学習課のYと申しますが、今回、男女共同参画社会づくりの推進委員をお願いしたいと思ひまして」という電話が、この話の発端だ。

女性団体には所属してないし、市の行政とは何の接点も持たなかったから、「何で私?」というのが素直な気持ちだった。

そのころの私は、県で主催する生涯

学習講座を修了し、そこで出会った先生のカウンセリングの研究会に入ったばかりで、これに夢中で他のことを考えるゆとりはなかった。確かに修了講座の中には、女性学やジェンダーについての講座もあったけど、できれば、向き合いたくはないという気持ちの方が強かったから、推進委員なんてとんでもないと思った。

「お声を掛けて頂いて大変ありがたいと思いますが、この件に関して、あまり問題意識をもっておりませんので、

お役に立てないと思います」と答えた。

「森さんは生涯学習講座を修了されますよね」と、言われて思い出した。

講座修了者名簿が、市町村へ人材リストとして配付されていたのだ。このリストは有名無実でほとんど役に立たないという評判だったから、すっかり失念していた。ふーん、役に立つこともあるのね、などと思っていると、

「これは、市民の皆さんのご意見を伺うというのが目的で、是非、引き受け



て頂きたいのです。五回、夜の会合に出席して頂けば結構ですのぞ」と

と敵もしぶとい。

このとき、ちよつと違和感を覚えたのだが、それが何であるのか分からなかった。

今思えばもつと認識するべきだったのだが、「まあ、五回ならいいか。役所に顔をつなげておけば、なんかいいことあるかもしれない」と思つてしまつた。

我ながら浅ましいと思う。これからの体験はこんな私への戒めだったのか。けれども一方ではカウンセリングの場面で、女性であることに起因した悩みにも気付いた頃だったから、いい機会なのかも知れないと思つたことも事実だ（言い訳みただけぞ）。

ともかく、「そういうことでしたら、やらせていただきます」と、電話を切つたものの、焦つた。男女の不平等やジェンダーについて私にはいい加減な認識しかなかったから、会合に行つて、ひとりの外れな意見なんか



言つちやつて、「あなた、論点がずれてない？」なんて言われないように勉強しなくちゃ。

慌てて図書館に行き、関係する本を借りて読んだ。ほかの委員の迷惑にならないように、せめて話についているように出来るだけの努力をしようと思つた。

Y市で共同参画の情報紙の編集をしているMさんや、女性学の勉強をしていたFさん、Sさんに話を聞いてもらい、自分なりに問題点を整理した。行政の側からは、高齢社会での労働力の確保、少子化の歯止めへの期待があるということ。女性の側からは、区別は差別であり何より人権問題だということを確認した。個人的には、今女性が抱えている多くの心の問題に関わっているのではないかと強く感じた。

こうして一カ月後、最初の会合の日はやつてきた。

人数は十五人、男性七人、女性八人。内訳は、自営業者、保育関係者、

教師、女性団体の方等、何の団体にも属さない専業主婦の私はちよつと異質な存在だったと思う。自己紹介のあと委員長（男性）、副委員長（女性）を決めた。担当職員から、この会の主旨説明、今なぜ男女共同参画なのかという話があった。さらに県のモデルケースとして行われる政策の一部であつて、これは当市がこの件について、進

歩的で前向きなのだ、と説明を受けた。その時、委員長が、「質問があるんですけど、ジェンダーってなんですか？」と発言。私は、??何それ？ジェンダー知らなくて委員長なんかやっていいわけ？と思つた。更に驚いたのは、担当職員が即答できずに、資料をバサバサとさせてやつと、「生物学的な性に対して、社会的文化的に作

られた性のことです」と答えたこと。こんな基本の基本くらいすぐに答えてよと思つているうち、ある男性委員が口を開いた。

「ジェンダーが日本語に訳されていないということからも分かるように、こういうのは日本の風土に合わない。私は、色々世界にも目を向けているが、イスラム社会のように女性に参政権がなくてもうまくやっている国もあるのだから、日本の伝統の良さを守っていくというのも大切なことではないか」

彼が話しているうちから私は顔が熱くなり、手が震えた。聞きたくなかった。感情的に怒りを感じたが、その時はまだ余裕があつた。的外れな彼を哀れにさえ思つた。誰かが反論してくれるはずだと思つたから。

けれども、年配の男性が「そうだなあ、男女それぞれ、特性つてあるし、何でも平等がいいっていうものでもないなあ」

さらに中年男性が「うちなんか、僕は家事を手伝いませんけど、手を出し



たら却って迷惑がられると思いますよ」

……誰も反論しない。私はパニックを起こしていた。こういう人達と議論したくない。でも悔しい、どうしよう、どきどきしながら考えていると、職員の方が、「そういう意見に対するものとしては……」と教科書的ながらもこの問題の意義を話し出し少しほっとしたもの、「まあそんなこと言ったら、オリンピックだったって男女一緒に走るのがほんとですよ。ははは……」と結んだ時には、泣きなくなりました。

「あのう、いいでしょうか？ 私は専業主婦をしていますけど、それは私が選んだからであって、女だからそうしろと言われたら嫌です」

話さずにはいられなかった。  
「社会で、女だからこうあるべきと思っ  
て欲しくないし、まずその個人を見て  
欲しいと思います。女なんだからこ  
うするべき、女なんだからこうする

のは望ましくないとされたくないし、そうされることでどれだけの人がその能力を発揮できないでいるのか知って欲しい。それに少子化や、将来の労働力の問題について、これは避けて通れない事だと思っています」

こんなことを言ったと思う。落ち着いて考えれば穴だらけだけど、私にはこれが精一杯だった。私にはきちんと反論できるだけの十分な知識もなく、議論の方法も未熟すぎた。

全く予期しない展開に、すっかり取り乱して家に帰った。とにかく悔しくて、悲しかった。夫に事の次第を涙ながらに訴えると、一言、「田舎の意識なんてそんなものじゃないか。いったい何を期待していたの？」

期待？ 私は何を期待していたんだろう。何でこんなに傷ついたんだろう。

その夜興奮した頭で考えたのは、私は、私が意識しているよりずっと深く「女であること」に傷ついていたらん

ということ。女であるというだけで得られなかったいろいろなこと、開かれなかった道や、理不尽な態度・差別、忘れようとしていた不愉快な出来事を不意に目の前に見せ付けられて取り乱したのだと思う。

その場で私は女性を感じている「差別」を、彼らにわかってもらうための議論をする用意は全くなかった。女性のおかれている現状に何の問題も感じない人達に、女性の抱えている問題を分かってもらうのは並大抵のことではない。そういう人達には「その考えでいいですから、せめて邪魔しないでください」とお願いするしかないと思っていた。

けれども「推進」委員会だと勝手に思い込んでいたために、みんなと同じ方向に向かって話し合えるのだと期待していたために、それを微塵も疑わなかったために、思わぬ言葉の攻撃をまともに食らってしまったのだ。私にとつてまさに闇討ちにあったようなものだった。

最初に私が感じた違和感は、これだったのだ。まず、軽すぎた。私が知っている男女共同参画の活動をしている人達は、すごく勉強しているし、色々な方面で問題意識を持っている。私のようなものがたった五回、数時間の会合で何かできるほど甘くはないのだ。次に、一番引つ掛かっていたのは「推進委員」という言葉と、「市民の皆さんのご意見を伺う会合」という言葉のギャップ。私は勝手に「推進するためにはどうしたらいいのか話し合う会」だと思っていたのだ。この勝手な思い込みのために不意打ちを食らい、胃の痛む眠れぬ夜を過ごすはめになったのだ。後悔しきりである。いまだに私は納得できない。推進って、どういう意味なの？

もうあんな人達に会いたくない、話もしたくない、やめてしまいたい。今までの私の暮らしのなかには、こんな不愉快なことはなかった。私が選んだ夫や友人に囲まれて、小さいあたたか

い世界でぬくぬくと生きてきた私にとって、それは耐えがたいストレスだったのだ。ずっと社会の中に活躍の場があった人なら、こんなことはなかったのかもしれない。私の人生で、議論する能力は評価されたり期待されるものではなかった。議論することより、争い事にならないようになだめ役になることを期待されていたのだから。

私は専業主婦に満足していた。外で働かなくてもある程度の生活を保証され、金銭的に許される範囲ならば、どんな活動にしても何も言われない。テニス、ろうの花、片道二時間の学習会も、好意的に認められた。何より、料理や洋裁といったことが得意だったので、たっぷり時間を自由に使え、好きなことをして過ごす毎日にそれなりに満足していた。だから、ともすると専業主婦が「敵」のようにいわれる女性運動には、二の足を踏んでしまう。こんな私は男女共同参画とは対極にいるようなものだと思っていた。

それがどうして興味をもつようになったのか？ それは私が私自身を、女性であることで卑下してきたことに気づいたから。私は三人姉妹の長女で、生まれたときから「この子が男の子だったら」と言われて育った。男でないために両親を悲しませている、私の心の中にはいつもこの思いがあった。それは次第に自分自身の存在を否定し、生きていることの実感さえ希薄になっていった。私自身のこんな体験からカウンセリングに興味をもったのだが、気づいてみると、女性であるという理由で傷ついている女性は驚くほど多い。女性であるために背負わされた荷物に気づかないまま、その苦しみを自分の責任として耐えていたり、耐えきれずに病んでしまう女性のなんと多いことか。そんな人達に気づいてもらいたい。あなたのせいではないのだと、思い込まされているだけののだと、気づいてもらいたい。そのために私の出来ることは、社会に蔓延しているジェンダーに気づき、伝えること。

そして最終的には男女共同参画社会の実現こそが理想なのではないかと思いはじめていた。

こうして精神的なことから興味を繋げたために、私はつい過剰なほど感情的になってしまったのだと思う。私にとって課題は、感情的にならずに議論することだった。あと四回の委員会を嫌な思いをしないうで無事やっていける自信はなかったが、逃げるのも嫌だった。私がいなくなったら果たしてあの

人達にこの問題を考える事ができるだろうか？ そんな考えもあつて何とか続けていく気持ちを作った。

さて、二回目以降の内容は、男女共同参画社会実現のための標語の募集と、毎年開催されるフォーラムへの協力、県下の現状の学習などだった。標語についてはなかなか応募がなく、あつても主旨が分かつていなかったり、正反対に男らしく女らしくしよう

と言ったものまであつて的を射たのは数えるほどだった。このことからいかに問題として促えられていないか良く分かった。この中から数点選びフォーラムの場で発表することになった。

フォーラムでは落語家の桂文也さんを招いてジェンダー落語を語ってもらい、そのあと茶話会を開くというものだった。この時までに委員会は四回を終え、後はフォーラムと反省会を残す



だけだった。

フォーラムの当日は友人を誘って参加した。文也さんのお話はとてもおもしろく、初めてジェンダーにふれる人にも分かりやすい内容だった。一部に高齢の男性の苦虫を噛みつぶしたよう

な顔もあつたことはあつたが、概ね参加者の反応はよく、講演会荒らしを自称する友人にも「今日のは、Aクラス」と満足してもらつた。茶話会は程々の出来栄えといった感じで私はすっかり肩の荷を降ろし、反省会の日

を迎えた。

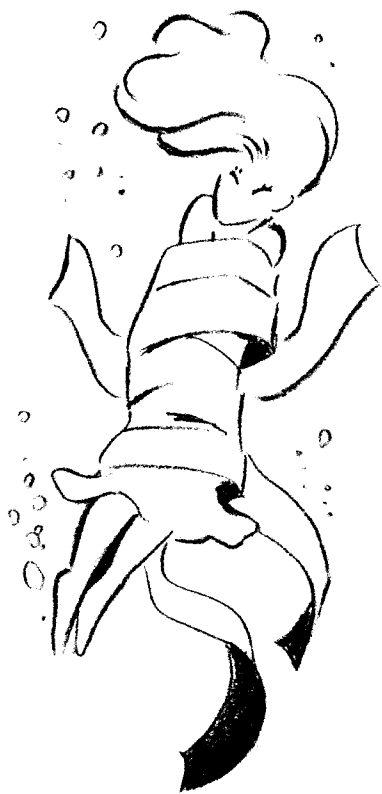
波乱の一回目から九カ月あまり、今日でおしまいといった雰囲気の中、最後の委員会は始まった。穏やかな気持ちだった。フォーラムの成功もあつて、寛容な気持ちになつていた。頭を切り替えられない男達も、仕方のないことかもしれないと許せた。多少の暴言ならもう大丈夫、取り乱したりはしない。

けれど……「フォーラムの感想はいかがでしょうか？」との問い掛けの答えに私は耳を疑つた。

「文也さんの話は一方的で、ちょっとついていけませんね。何でも平等にと言ったり、女性の権利ばかりが主張された感じで。ちよつとやりすぎじゃないですか。最近はセクハラにしても、騒ぎ過ぎですよ」

教師である彼はそう言つて隣の女性をちらりと見た。

「私もそう思います。なんだかぎくしゃくした感じで、ゆとりがないって



思います。私は、母として子育てをしたりすることは有意義なことと思ってるし、男の子らしく女の子らしくって、結構好きなんですよね。そういう生活に満足しているし……」

「そうだな、あんなことばかり言っていたらますます女性には子供を生まなくなってしまう。子育てだって誰がするんだ。今の子供の問題だってそういうことが関係している」とは、最年長男性。

気を良くした教師はさらに、「母親が赤ちゃんの世話をすることなどの母性がないがしろにされている。僕は教師として子供達の男らしさ、女らしさは大切にしてやりたいと思う。こう言う」と反論されそうだけど」と言い、私を見た。

私は、やっぱりそういう考えを変えつつもりのなかった人だったんだと思いつつながら、無性に悲しかった。こういった役割分担をもった慣習の中でどんなに女性が苦しんでいるか、声に出しても届く事のないむなしさ。人っ

て、気付くつもりのないことには決して気付こうとしないし、見たくないものは決して見ることはないんだなあ。

彼には女性の苦しみを理解するつもりはないし、それが苦しみであることさえ理解するつもりはないのだ。そして彼は何のためらいもなく、善意をもって男女の役割分担を子供達に植えつけようとしている。

「だったら反論させてもらいますけど、私は教師である人がそういう考えでいることは問題だと思います」と、言ったとき、皆がいつせいに引くのが分かった。私はこの場のほとんどを敵に回していることを、肌で感じた。思わぬ反応にたじろいだ私は、あっけなく取り乱して、何とか自分の思っていることを説明しようと必死だった。

私はこう言いたかったのだ。男らしさ女らしさを大切にするというけど、「らしさ」ということを押しつけることにはならないか。女らしいということが、優しいとか、控えめであるとかいうイメージであつたとすれば、男の

子が優しい事は評価されないのか。それは今ある役割分担を再生産することではないか。母性というけど、母性って何？ 母親は精神的に安定していることが大切で、専業主婦でも不満や我慢の大きい母親では、決して子供のためにはならない。今問題なのは、母親が外で働くことなのではなくて、母親への理解であり支えであり、家にいればいいというわけではない。

言いたいことは後から後から押し寄せてきて、整理できないまま口から出ていく。こんな言い方じゃ分かってもらえない、まるでヒステリーを起こしているみたいに見えるだろう。そう思うと余計にめちゃくちゃになつていく。「だから女はだめなんだ」そう言う声が聞こえた気がした。

惨めだった。誰も私に助け船を出してはくれなかった。一生懸命になればなるほど、滑稽な感じがした。一人なんだ。ここでは私一人きりなんだ。

かみ合わないまま、会は終わろうと

していた。落ち込みながらも、態度だけは何とか笑顔をはりつけていた。あなた達がどう思おうと私は平気よ、少しも傷つけられてなんかないわ。負けを認めなくなかった。

市の担当者が、「来年度は行動計画の作成を予定しています。皆様にもご協力をお願いするかもしれませんので、その時はよろしくお願いします」と言ったとき、最年長男性が「もう、こういう会合には二度と声を掛けない

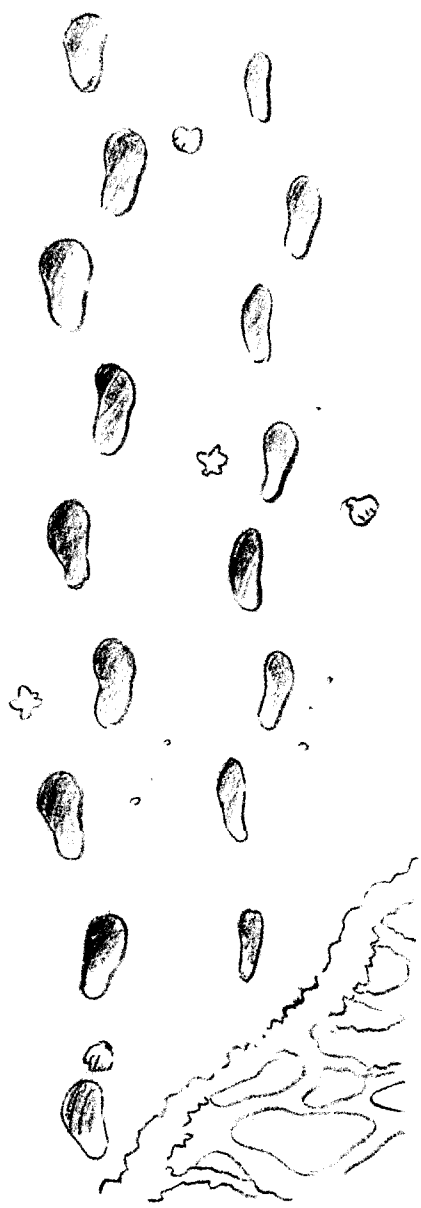
でくれ」と言って、私を見た。その目は「お前のようなものには二度と会いたくない」と言っていた。私はにっこり笑って、その視線を受けとめた。その言葉をつくりお返しするわ。

ともかく仕事は終わった。これからこんなところに首を突っ込まないよう気を付けよう。私は本来、争い事を好まないように女らしく育てられたのだ。こんなところでダメージを受ける

筋合いなんかないわ。第一回の会合ショックに比べれば落ち着いていると自己評価していると、最後に悪魔がやってきた。

「ごめんなさいね。あなたの気持ちも分かるけど……」

最初に発言した女性がすまなそうに私を見て言った。続けて、「私は恵まれているから、そういうことに気が付かないのかもしれないわ。本当に恵まれていて、そんな苦勞を感じたことが





ないの。主人も理解があつて、私はどこにでも好きなところに出してもらつてゐるし。だから……」

まるでこんな議論は不幸な女の悪あがきのような言い方で、ここまでずれてると笑つちやう。呆れ果てて、ぽかんと口をあけたまま、「あ、そう」と言つたきり言葉もなかった。「出してもらつてゐる」だつて。私は自分の意志でどこにでも行くけど、ここまで気付かないでいられるなんて、彼女はこれで本当に幸せなのだろう。

彼女を悪魔と言つたのは、この後何かの拍子に彼女の見た「私の像」が私の意識の中に入ってきて、自分を惨めに感じる事があつたから。「本当は違う、私あなたなんかよりずっと幸せで恵まれてるわ!」と思つていけど、人の評価で自分を確認しなければいけない弱さをもつた私の心に、彼女は一番効き目のある毒をまいていつた。いろんなことがあつたけど同性から投げられた最後の一言が一番利いた。女の敵は女にもいる、しかも一

番厄介だつてことかな。

あれから一年経つて、私は相変わらず女性の問題の多くはジェンダーが関わつていと思うし、男性にも同じように問題を起こしていると思つてゐる。大切なことはひとりひとりに、ありのまま受け入れてくれる、認めてくれる「誰か」がいること。そしてありのままの自分自身を好きになれば、他人を尊重することが出来ると思ふ。

「だから」という先入観で人を見る事のないようにしたい。男なんだから、女なんだから、子供なんだから、老人なんだから、身障者なんだから、不良っぽい子だから。いろんな思い込みはあつて当然だけど、ちよつと立ち止まつて考えたい。今その人のありのままを見ようとしているか。

この体験で学んだことが、いずれ誰かの役に立てればいいなと思う。今私はそのために、次に何をすべきか模索中である。

(え・西宮さき)

## わいふ文章講座のおすすめ

公民館 女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立つたライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多いと思います。

●PTA主催の成人教育「家庭教育学級」での講師としてもご依頼ください。

# エッセイスト・クラブ

## 桐の下駄

東京都青梅市 福島みさを(78歳)

「おばあちゃん、一博がおじいちゃんのこの桐の下駄ほしいっていつているの」

と孫娘の千紗が男物の桐の下駄を持って来た。物置の奥の、今は使われていない下駄箱から見つけて来たらしい。

「よく見つけたわね、気に入ったの？ 履いて頂戴。おじいさんも喜んで下さるよ」

思いがけない展開に私は嬉しくなった。この子達にとってはひいおじいさん、私にとっては舅が病気で倒れる前に履いていたもので、昭和も十年前後の時代ものと思われる。

よく見ると幅十二センチ、<sup>まさ</sup>楯の目が十五本も通っている駒下駄である。鼻緒も黒い絹天(絹ビロード)でしっかりしている。

今まで誰も手を触れず何十年も眠り続けていた、こ

の下駄を見た時、私は不思議な思いがした。

舅が昭和の初期、材木屋「福森」の主として威勢のよかった頃を想像してみた。己と家族にはことのほか厳しく、人様には親切で思いやりの心で接し、信用にかけては絶対に約束を守る人と定評があったようだ。

山の本を買いに行ってもお大尽の旦那、奥様からの覚えもよく、「どうせ買って貰うのなら福森さんに」という具合に先様から話が来たし、原木の仕入れ代金の借り入れも、容易であった。

「森(名は森蔵といった)は金は返す奴だから」

地元の銀行の取締役にも信用が厚かった。それは常に家人にも言って守らせていたことだが、返済の日限にはどんなことが起きようが(人の生き死があろうとも)、銀行に出向くこと、また「当て事ともつこふんどしは先から外れる」のたとえがある。返済に当てる金の穴は三つ用意しておけ」と。

自分は酒は嗜まないが、人をもてなすことにおいては達人であったようだ。

こんなことを思い出しているうちに、この頃かしら？ 洋服屋(仕立て屋)、呉服屋が「作らせて下さい」と向こうからやって来て、知らず知らずのうちに出来てしまったとかいう、英国の生地で仕立てたモーニングがあった。戦時中結婚した息子に仕立て直して着せた。

特別に作らせた一・二メートル幅の桐のタンスの中に結城紬のお対、錦紗の絵羽の長襦袢、博多の角帯など、また寒中に着る外套、インバネス、二重回しなど結構おしゃれでもあったようだ。

桐の下駄のことから舅の思いを書いてしまったけれど、孫は素足で桐の下駄を履きこ機嫌で、音を立てて庭を歩き回っている。

## 猫の不思議

千葉県習志野市 幾野真理子(51歳)

ある朝の事。いつものように私は洗濯機のある水屋にいた。台所からは五間程離れているのだが、ちよつと濁りがかかった声で、猫が私を呼んでいると思つた。

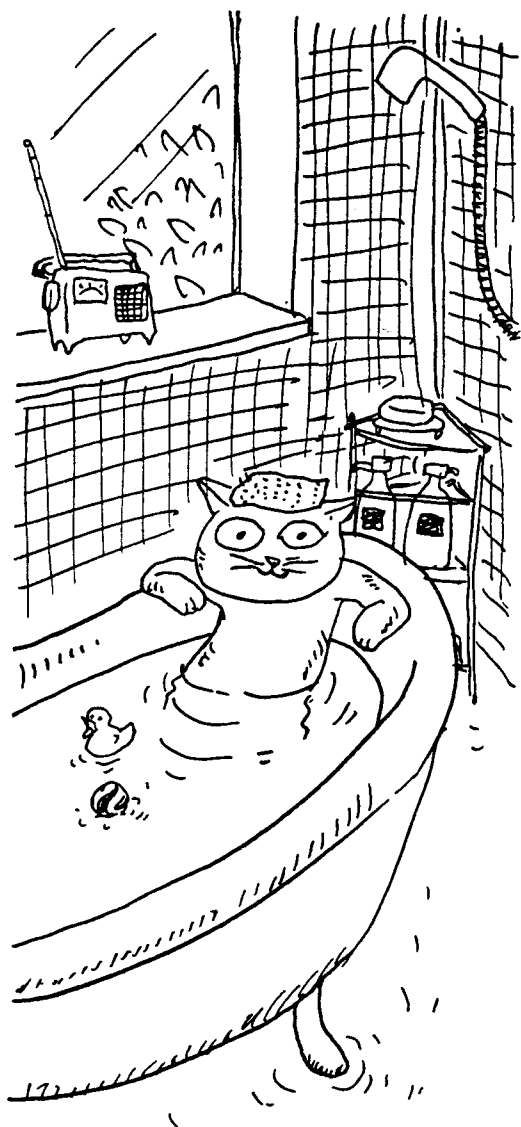
やりかけだった仕事をそのままに、台所へとんでゆくと調理台の上で、おしっこスタイルで頑張っている猫がいた。何回かきばるのであるが、なかなか出ない。数分後やつと小指の頭程の血尿がたれた。私が確認したのを解ったようで、安心したのか、調理台から降り外へ出ていった。

いつもは、庭で用をたすのであるが……。

もともと、この子は、隣家で生まれてしまった野良の子で、妙な事にうちの末っ子と気が合ったとみて、のこのこ家に入り込んできたのであった。

当時、姑は脑梗塞で寝たきりに近い状況であった。その六年前、まだ姑が元気だったころ、長男(当時小学三年生)のクラスに迷い猫が居ついてしまい、やさしい先生と子供達は、週末には当番を決めて家に連れ帰りえさをやり、また、月曜日には、当番の子といっしょに登校する、という風であった。授業参観の日には、教卓の座布団の上で、気持ち良さそうに寝たふりをして授業を聞いていた(らしい)。そんな折、長男が「うちで、その猫を飼いたい」と言い出した。ところが姑に「私は猫はキライだから、お泊まりだけならいい」と、きっぱり禁じられてしまった。一度だけ泊まりに連れてきた猫と、長男は至福の週末を過ごした。そのときのことか思い出された。

入り込んで来た猫と、子供達の喜びようの中で、私は浅はかな一計を案じ、「きんぎょ」という名前前で、奥の部屋で飼ってしまう事にした。支えがなければ歩けなくなってしまうっていた姑に、気を使つたつもりであった。一度は「駄目」と言つた私は、「おばあちゃんが死ななければ、飼えないの?」という何気ない子どもの一言に、ショックを受けたからである。



何日かは、姑に気付かれず、うまくいっていたのだが、その内、居間の方へも出てきてばれてしまった。しかし、体と共に気も弱くなっていた姑は、「私の近くに寄らなければ飼っても良い」と言ってくれた。

しかし、一難去って、また一難。病床を見舞いに、週一度、泊まりに来ていた義姉が、姑に輪をかけた猫ギライなのであった。家に入るなり猫が居ようものなら、たたき出さんばかりの大騒ぎである。決まったその日は、子供部屋にちつ居を余儀無くされる猫なので

あった。そんな折、実家の用事で遅く帰宅した私がお風呂に入ろうとすると、前の部屋から「マリコさん、ちよっと」と姑の声。いつもなら、寝入ってしまったている時間帯である。不審気な顔でのぞく私に、「猫さん、ゴハンもらっていないよ」と、告げてくれた姑。思わず涙をこぼしてしまった私である。

少々、痴呆も出てきていた姑であったが、——猫ギライの義姉が、ゴハンをやるはずがない——と、思って心配をしていてくれたのである。嫁の私と、猫を思

いやってくれた事に私は涙したのだ。

その頃には、猫の姿が見えないと、「何処に行っているのだろうね」とか、「ゴハン、もらったの?」とか、そばに寄らなければ、結構可愛がってくれる姑になっていた。介護犬はいるが、介護ニャンもいると、その時思った。その姑は、三年間病んで今はもういない。

話が昔の方へ行ってしまったが、私が疑問に思うのは、何故調理台の上なのか?である。

その日、動物病院で診断を受け、膀胱炎という事で六日分の飲み薬をいただいていた。

次の日の朝台所へ行くと、同じ場所に結構な量の尿をしていた。血が混じってはいたものの、薬の効果が出づらかった尿が大量に出た事を「お知らせ」するかの様に。何故、調理台の上なのか? 床でもなく、絨毯の上でもなく、爪とぎの段ボールの上でもなく……尿の色と量が計測できる場所? そこまで猫は考えたのであろうか?

そういえば、人の視線を感じる事は、出来るに違いない。新聞をひろげて読んでいると必ず、読んでいる記事の上に座り込む。息子も勉強をしている時は邪魔にする。書いているノートの上に座り込むからである。

私は朝起きると必ず台所へ行つてまず、お湯を沸か

す。その事を計算に入れてか……。なかなかの知恵者。

家に来てから十年が経つ。あの目で、人の視線を受けとめながら生きてきた。自分をアピールしながらもお邪魔にならぬよう、居場所をつくってきた。そんな猫族もいつかは、家の中だけの暮らしを強要される日がくるのであろう。かわいそうなことである。

ちなみに、この猫の名前は「ねこ」である。「きんぎょ」と名付けた私に、猫はネコといわねばかりに、三人の息子達は「ねこ」と呼びつづけている。

## わが家の食事思い出話

山形県山形市 加藤智恵子(69歳)

暇が出来て、少しだけ金にゆとりが出たら、食べるものも着るものにもあまり興味がなくなった。毎日の食事は、一日に卵一個、納豆など豆製品、魚、青野菜の摂取を主軸にする。海草は一日置き位、しらす干しは常備している。納豆、豆腐、油揚げ、卵が無いと不安になる。

そして肉はめったに食卓にのぼらない。理由は簡

単、調理主任の私が嫌いだからにすぎない。わが母は類を見ないほどの肉嫌いだった。それが今もつてわが家に受け継がれている。ちなみにカレーライスとは鮭缶で作るものと、二十歳近くになるまで思っていたほどである。今のようには外食産業が発達していた時代なら、肉入りを知らずにいることもなかったろう。母の肉嫌いは私にすっかり定着してしまった。今、わが家のカレーは、もっぱらシーフードカレーである。えび、ほたて、いか等入っておいしく、みんなそれに慣らされてしまった。しかし犠牲はわが夫、肉が食いたいと嘆き、ひとり焼きとりを買いこんでくる。

子ども等が成長期のときは、いやでも肉料理は抜けない。当時は金が無いからどうやって食べさせるか考えた。カレー汁は挽肉を使った。かの有名な、わが山形の芋煮も挽肉にし、低価格で味出しをした。ロールキャベツ、ギョーザも肉料理の定番。どれもわずかな肉で大きく見せられるからであった。

その極めつけがハンバーグステーキである。四大家族で百グラムの挽肉に、おろし人参、たまねぎ、パン粉、卵その他をたっぷり入れると一人分が結構大きくなる。いい味だったと思うのだが、再現してみたくないようなものではない。

食習慣は子ども時代に形成される。私の肉嫌いは、幼い頃の物資不足もあって肉になじむチャンスを失っ

たためと思う。動植物それぞれが、恵みを分け合って生きていく生態系を受け入れる心は理解できるが、もう一步の感情の制御ができないでいる私なのかも知れない。

ただ一つ心配だったのは、それらが子ども達に影響しないかということだったが、給食や部活動で訓練され、今ではそれぞれの家族ともに、外食産業大好きだから心配はいらなかった。

教員として働きながらの家事はやっぱり大変だったが、悲壮感などはなかったと思う。二人の子は女だから食事の量で苦労はなかったし、休日をうまくつかい保存食も工夫した。

夕方遅い帰宅の時は、簡単にできる鍋料理がわが家の定番であったが、それが今、子ども達の笑いの種になっているのだ。

遅く帰れば買い物もままならないし、時間も無い。だから「鍋」になる。豆腐と白菜とあれとこれとを入れて、あとは漬物と果物と……なんていうと子どもからクレームがつくのだ。彼女らは夕食の鍋には豆腐きり入っていないかった……と言いつけるのだ。自分ではそんな食事をさせた覚えはないのだが、子どもらはそう言うて譲らない。だからまあ一度位はあったのだろう。それを何時もそうだったと言いつけるから憎らしい。そう言う割に大きく育っているから私は自信を

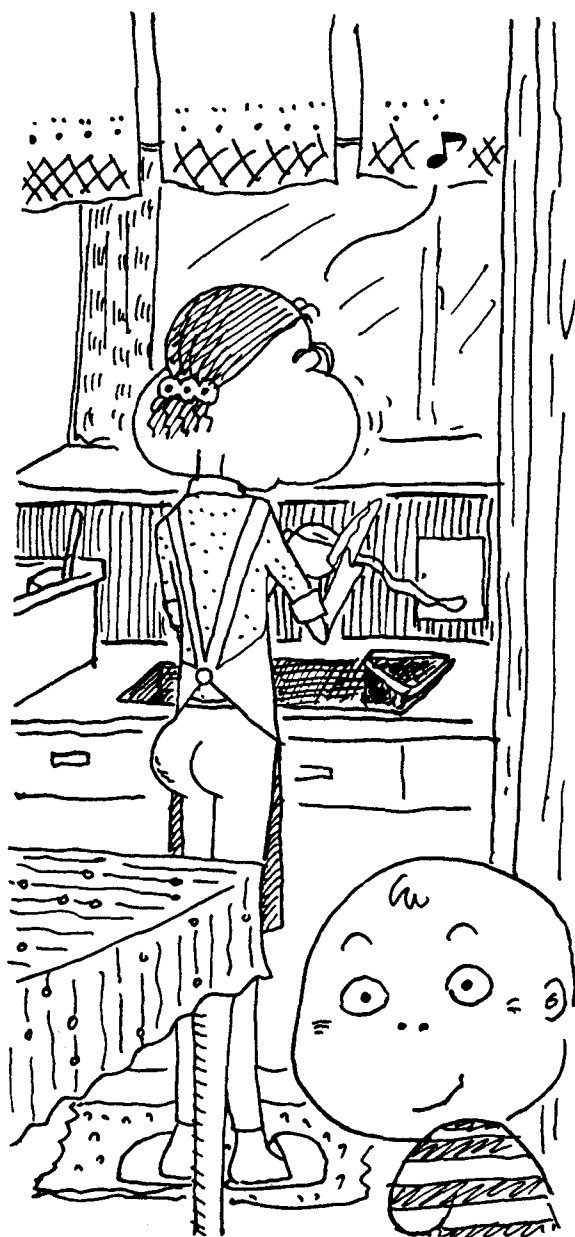
もっている。

よく親は自分は食べなくても子には……と言う。終戦後の厳しい食事情の中で、私たちもそうした恩恵に浴し育てられた。

その私には絶対に許せない食品がある。こんなにやく、トコロ天、筋子、タラコがそうだ。筋子、タラコは高価であるのに、こんなにやく、ところ天とともに栄

養的価値が低い。金に余裕でもない限り買えない。これらは年に数回お目にかかるだけだ。こんなにやくを煮ると匂いが部屋中に満ちる。匂いに誘われて子ども等は寄ってきて味見をねだる。ほんのちよっぴりを口に入れてやり追い払ったあと、大き目の一つ自分の口に入れる。その美味しさ！

トコロ天は今でも自分の器に多目に盛る。



筋子やタラコは良質のものは大変高い。今でもとても買えない。切りながら一口、皿に盛って一切れと口にする幸せ。食い意地は良心をも蹴ってしまう。

以前本で読んだか、教わったか忘れてしまったが「その家の食生活のレベルを決定するのは、蒸し物がどれだけ献立に入れられているにかかっている」と言うことであつた。以前はそのことが気にかかつて時々無理もしていた（今は全く無視）。

蒸し物の代表は茶碗蒸しである。中身は本にあるようには揃っていない。白身魚、かまぼこ、しいたけなどある物を入れる。ひどいときにはほんの申しわけに二品位小さなものが箸につかまつた。二女は一品の時間が多かったと言ひ張る。

魚は蒸しものになりやすい。酒むしにして野菜あんをかけた、マヨネーズを調味してかけたり結構楽しんだ。

まあ振り返ると私達の育ち盛りの頃は終戦直後の食糧難にあい、苦勞のみが思い出される。さつまいもの入ったご飯、大根の葉で黄色にそまつた弁当を手でかくして食べなければならなかつたこと、じゃがいもの皮の食べ方の講習会、得体の知れない醤油作り……、数え上げればきりが無い。

子育ての時は物はあつたが金も時間もなく、加えて猛スピードで来る食糧事情の変化に会い、四苦八苦の

うちに時は過ぎてしまったのである。だから子ども達には良い意味での母の味も、思い出も無いだろう。むしろ母の味は「苦い味」として心にとどまつているだろうと思う。単に「笑いなしの種」を提供したに過ぎないのではないかと思うのである。

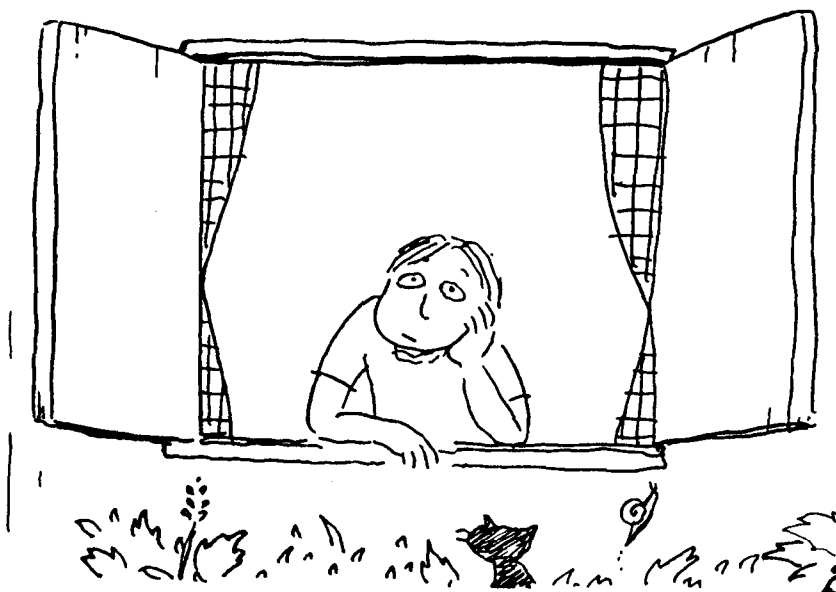
## 梅雨の話

神奈川県座間市 青島典子(45歳)

私は関西出身です。私の見た梅雨の話です。学生の頃、甲斐バンドの甲斐よしひろの歌に「五月雨しとし」という歌詞を見つけて、とても不思議でした。五月雨はしとしと降るか？ 梅雨はもつと強く激しく降るはず、特に梅雨明け直前は恐ろしい豪雨で、とことん降って、カッと暑い夏になるよなあ……。

自分の知る詩歌の中の五月雨の描写を思い浮かべたり、そういえば以前はNHK大阪が毎年梅雨の頃には、土砂崩れの恐れのある道路地点をNHKまでお知らせ下さいと放送していたよなあと考えていました。北海道は梅雨がない、とは聞いているが、やさしい梅雨はあるのか？





歌詞の一部にひっかかっていた私に対し、甲斐よしひろの歌は国語的センスがないと言って、切って捨てる知人もいました。彼女は多分この部分のことを言っているのだろくな、と何となく納得していました。その後何年かして、関東に暮らし始めると最初の梅雨入りで「五月雨しとしと」の記憶がよみがえりました。

ある日、どんより曇っているが、降りそうで降らなさそうだからと出かけたら、しとしとと五月雨が降り出しました。急いで帰る私の目に、あわてて梅干しの大ざるを片づけているお隣同志の二人の主婦の姿が目にとまりました。オイオイ、こんな曇天の日に梅干しを広げるのかい？ と思いつつ、耳にした言葉は

「せっかく干したんだけど、降ってきたわねえ」

「でも梅雨の雨だから、ちよっとしめつただけよ」

私は聞き耳頭巾をかぶった若者の昔話を思い出し、「五月雨しとしと」の謎をいっぺんに理解したのです。こちらの梅雨時の雨の降り方は、本当にやさしいのです。いつの間にか弱まっているかと思えば、また降り出したり、なるほど甲斐よしひろが歌う通り。

その後しばらくして、ラジオを聴いていると鹿児島出身の青年からのリクエストの葉書を読み上げていました。

「東京に来て、梅雨入りしたとニュースで知って急い

で懐中電灯を買いに行きましたが、東京では梅雨だからといって停電するわけではないのですね。鹿児島では梅雨入りすると大雨で必ず停電するので、懐中電灯は必需品でした」

とても愉快な気持ちで笑ってしまいました。多分梅雨というのは、西へ南へ行く程強く激しく、北へ東へ行く程穏やかで、北海道まで行くと空模様だけになるのでしょう。

関西の梅雨を懐かしく思い出していたら、子供の頃、傘をさして登校する時に見た、じゅん菜摘みの風景がよみがえりました。梅雨時、池に小さなボートを出して雨ガッパの人が何かしているの、上級生に「あれは何?」と尋ねると、「じゅん菜摘み」と教えられたつけ。多い時はボートが三つぐらい出ていたよなあ。

懐かしくて懐かしくて、スーパでじゅん菜のびん詰めを見るとついつい買ってしまうが、毎回そのあまりのまずさに家族からのブーイングとなり捨ててしまいます。今年はたれ付きのじゅん菜というのを見つけ、買ってみようか迷っています。

あの懐かしい池も今じゃ水草がなくなってしまう、ただの水たまり。これも環境汚染のせいでしょうか。住宅地より上の方にある池なんだけどなあと不思議です。

## ヒマラヤの旅から

東京都田無市 中村哲子(73歳)

白神山地に山仲間を誘って、樫<sup>シ</sup>の植林に五年間通った後、ヒマラヤへ出かける様になりました。そして五年たって――。

ヒマラヤの三大街道といわれるジヨムソン街道。ラタン、リルン、そしてエベレスト街道はナムチェバザールから西奥へ入ったチョーオユーの登山口のタメ村まで足をのばして無事終わりました。三つとも春のしやくなげ――ラリグラスの満開の時です。三つとも春のしやくなげ――ラリグラスは二千メートルから上でないと咲かないようでした。

ターメは西沢溪谷の百倍美しくダイナミックで、四千メートルの高地に広がる静かなヒマラヤの村。その北の峠を二つ越えるとチベットです。土曜日でバザールの日でしたから、何人ものチベタンに会いました。カゴを背負った彼女達がパスポートを持っているとはとてもおもえず、ヒマラヤの山奥の北と南に暮らす人達の生活圏内の物物交換みたいなかんじでした。

ヒマラヤの中に入ると、小さな村にもロッジがあり、一泊二食千円位で泊まりました。

食事は小さなじゃが芋とチーズはどこにもありませんが、電気のある村には肉があつてぎょうぎ（モモという）はとてもおいしいと思ひました。冷蔵庫がないと肉はなし。

川ぞいに、日本やカナダからの援助の小さな発電所をみかけました。ガスはどこにもなく、ロッジの台所でも流しのない家もあり、料理は薪を燃やして、かまどで作っていました。

ブライベート・ルームのベッドは縁台のような木の小さな台で、ふとんはなし。持参の寝袋にもぐりこみ、毛糸の帽子をかぶつて寝ました。高地は夜冷えるし、暖房はないので。

ロッジの入口にホット・シャワーの坎バンが出てゐる家をつつけ、たのんだら、バケツ一杯のお湯を持って来てくれ——石鹸なし——百五十円でした。ポーターが川に入つて、頭や足を洗つてゐるのをよく見かけました。

街のホテルは別として、普通の家にはお風呂はなく、トイレのない家もざらでした。

それでもなんでも、かわる人達が働きもので、特に小さい子どもの働くこと、親おもいで、素朴で、親切で、ゆつくりと時間が流れてゆくのがうれしく、こ

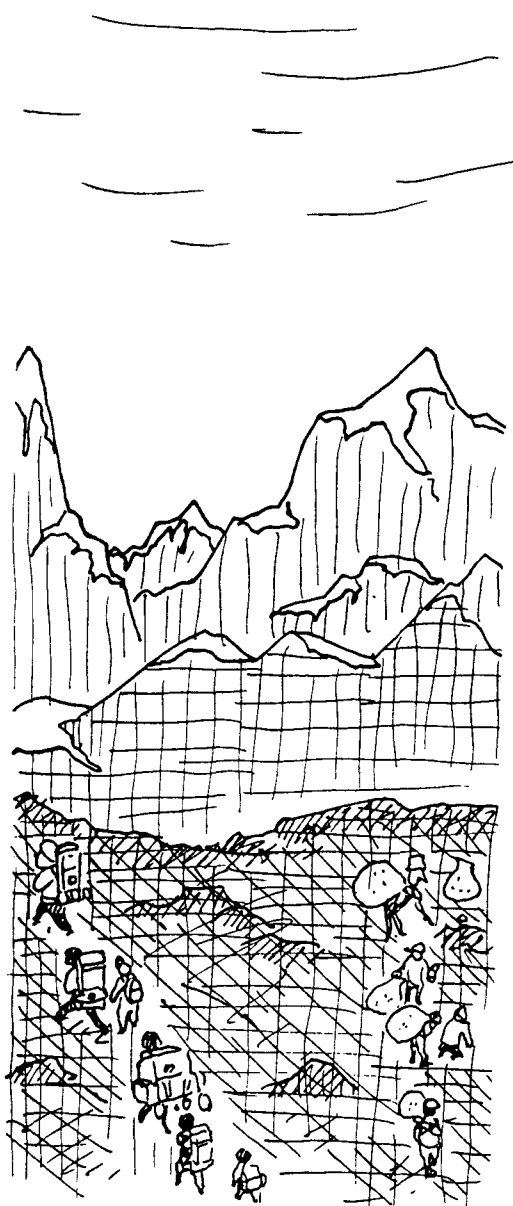
れからの日本の高齢社会で、年金の少なさをなげいてゐるよりはヒマラヤに来れば暮らせると思ひました。

この秋は、西ヒマラヤのスイケットから入つて、ガンドルン、ビレタンテのトレッキングを企画しました。一週間以上お風呂なしはつらいので、二週間の旅の中でトレックは一週間。雨季あけの十月はまだ上空に湿った空気がこつていて、ヒマラヤに寒気が入ると雪になるので、十一月にしました。

ヒマラヤのベストシーズン、ロッジのないテント泊まりで、静かな山旅です。星は美しく、見上げるは、アンナブルナ、マチャプチャレ、ランジュン、ヒウンツリー、ダウラギリ、ガネツシュと八千メートル、七千メートルの山々です。私達は二千メートルをこえないけれど、十五人参加すれば、たぶんガイド、コック、キッチンボーイ、ポーターと三十人から四十人の人達が面倒みてくれることでしょう。ネパールの人達のたのみで、旅行社を通さない旅になりました。旅行社はたたくだけたたいて、もうけがなく、ネパールの人達の生活が良くならないから——。

ボランティア半分ではじめたヒマラヤの山歩きも五回目。蒼い空、美しい山、千枚田の続く谷、今は世界のどこへゆくより楽しく、面白い。ヒマラヤで生きる人達の生活を見るにつけ、人生観を変えてきました。日本人は少ないけれど、今やヒマラヤのトレッキン

グは、世界的なブームで、世界各地からトレkkerが入っています。アメリカは若い人が多く、百人規模で、ロスアンゼルス、成田、バンコク、カトマンドウと連日入って来るので、日本から、時に成田からは空席がなく、航空券を買うのに、本当に苦労しました。成田からネパールへの直行便はないし、関西空港は東京からは使いにくいし。アメリカの人達は二十二時間、乗りっぱなしでヒマラヤへ入り、その多くが今やエベレストBCとカラパタール五千五百メートルに登り、下山は清掃してくるのです。



わたしはタンボチエの東のピーク四千メートルとナムチエの東のテンプルマウンテンの下りでゴミひろいをしてきました。

ヨーロッパの人達は、たいてい一カ月、二カ月、三カ月という休暇で、働きざかりの人達がヒマラヤにアタックしていました。

春と秋のベストシーズンにどうしてこんなに長い休暇がとれるのか、日本人は考えてみる必要があります。

(え・荒井知恵)

おはあちゃん先生

## 愛と怒りの中国顛末記

法村香音子 著



法村香音子著  
亜紀書房  
本体1800円＋税

東京都新宿区

野本美希子

中国生まれの筆者は第二次大戦の後、医療技術者の父親とともに八路軍の馬車に乗せられて、各地を転々とした数奇な少女時代を送った人だ。その彼女が数十年を経て自分の「祖国」である中国に日本語教師として赴任し、「深く傷ついて日本に帰った」。どうしてなのか。

旅行記、滞在記、中国を紹介する本はいくらでもある。しかしこんな

抱腹絶倒のおかしさ、そしてこんな深刻さを伝える作品は珍しい。何よりもそこには単なる「お客」でなく、中国人のなかに入ってともに生活したほんものの体験があるからだ。

「赴任してからの毎日は、それこそ怒ったり嘆いたり憤慨したりの毎日であった」「同時にそれは、（実はわたしは、中国人をまったく知らなかった）と思いつくことになった七カ月でもあった」と著者は言う。

帰国後鬱々と日を送るうち、彼女ははっと気づく。少女時代に彼女の知っていた中国人は、毛沢東と時代につくりだされた特別の「新中国人」で、いまの「自己中心主義」こそ中国人の素顔だったのだ、と。

中国人との衝突や摩擦から彼女は

思うようになる。実は特殊なのは日本人ではあるまいか。

「個を押し出せない、自己主張ができない、噛みつくべきときに噛みつけない、自由闊達に感情表現ができない我々日本人のほうが、よっぽどおかしいんじゃないか、と」「彼ら中国人のほうがよっぽど心が自由で、自分に正直で人に対して素直だ」

著者の私立学校での教師としての生活や、校長夫妻との衝突の顛末を中心にまとめたこの一冊は、日本人の淡白さとは対照的な、濃厚な喜怒哀楽に満ちた中国人の人間模様をありのまま伝えてくれる。

マスコミには絶対に出てこない中国の素顔を知るために、一人でも多くの人に読んでほしい。

# いのち、はるか

## 老親介護の日々

新潟県中蒲原郡 小林智枝

### やっぱり、家がいい

春は花が次々と咲いて、街を明るく豊かにしてくれる。北国の冬は長く厳しいだけに、耐えて待ちわびた季節だ。赤いチューリップや黄色い水仙を眺めていると、冬囲いの縄を解いた途端、縛られていた枝が伸びやかに広がるように、縮んでいた心が解放されて、春の喜びを実感する。

我が家の狭い庭にも、大きな真っ赤な椿の花が次々と咲き始めた。病室に持っていった一輪差しも母を慰めてく

れた。この椿の花が終わらないうちに、母を家へ連れて帰ることができた。椿の隣りに白い雪柳、手前に赤いチューリップ、黄色の水仙と彩りも鮮やかに楽しませてくれる。

退院した母が夜中に何回も用足しで起きるか心配したが、一回だけで朝までぐっすりと眠った。母の枕元に小さな鐘を置き、用があるときは鳴らすことにした。私はベッドの脇に眠っていると、母の寝息やかすかな気配を感じ、遠い子育て時代を思い出した。あのころも眠っていても、赤ん坊の気配ですぐに目覚めていた。チリンチリン

と母が鳴らす鐘の音で起きる。春とはいっても夜中はまだ寒い。風邪をひかせると悪いので、ゆっくりしていられない。手を引っ張って体を起こし、私の肩に手をかけさせてベッドの脇に立たせ、ポータブルトイレにかけさせる。終わったらベッドに上がらせる。

朝、目覚めた母はぼんやりしていた。椿の花を見ようと声を掛けて起こした。何とか這うことが出来るので、隣の居間まで這わせる。わずか三メートルくらいでしかないが、母の這い方は、雲の上を漂っているようにフワフワと力がなく、心もとない。気が付く

と私も並んで這っていた。母を座椅子に座らせて、椿の花を眺める。直径十五センチくらいの大きな赤い椿の花。母に見せることができてよかったと心底思った。風が吹くと、隣の雪柳の枝が揺れて、白い小さな花が赤い椿に戯れているようだ。真つ青な空も心なか澄んでいるような気がした。

疲れると悪いので遅い食事にする。

ベッドで食べるのはいかにも病人のようなので、こたつで食べさせる（母が退院してから、夕食は揃ってこたつで食べることにした）。ほんのわずかしか食べないが、病院食と違って食べ慣れたものばかりだ。目玉焼き、煮豆、小魚の佃煮、キュウリ漬け、味噌汁。ご飯は私の二口くらいしかない。それでも点滴に頼らずに、食事をするこ



ができるのに感謝した。そして大好きなとくめ茶を飲むと、疲れてすぐにベッドに戻り横になった。もう病院へ行かなくてもいいという安心感は大きかった。今にして思えば、毎日病院へと自転車走らせながら、自分を囲む一メートルくらいの空間は、異次元の世界のような気がしていた。周りを歩く人や車や、全ての見慣れた景色が、今の自分とは目に見えない壁に隔てられ、私だけ別の世界にいるような感覚に包まれていた。そんな風に感ずることは、多分、日常とかけ離れた生活を強いられた私の弱さかもしれない。

退院したことで、その不思議な世界からようやく現実の生活に戻った。しかし、次に待っていたのは、先の見えない大きな黒雲だった。それはいつになつたらどうなるという明るい展望がなく、考えたくない「いつか」という大きな不安が漠然と漂い、寝ている間も二十四時間、私の全てが拘束されて、自由がないという息の詰まりそうな生活だった。

何はともあれ、あれだけ苦しんだ末の我が家での生活だ。暖かさに向かう花の咲く美しい季節で幸いだった。病院通いに追われているうちに、庭の草が伸び放題に伸びていた。狭い庭なので、二時間くらいでさっぱりした。夫が昨年から始めた家庭菜園も手つかずで、草ぼうぼうだ。他の仲間たちはすでにナスやキュウリの苗を植えていた。夫は焦りながら畑仕事に取りかかった。お互いに、平凡な日常生活に戻ることができた喜びは大きかった。

母が用事があるときに鳴らす鐘では、音が小さくて聞こえないときがある。夫がブザーを取り付けた。ブザーが鳴ると、どうした、どうしたと家中の者が駆けつける。

瀕死の状態で退院した母は、一日ひと元気になり、顔つきもしっかりしてきた。しかし一カ月の入院生活で、記憶がだいぶん薄らいだ。入院していたときに、家が分からなくなったと言っていたが、自分の部屋で寝ていても、まだ混乱しているようで、

「この家は沼垂の家なのか、子供たちは沼垂の家に居るのか」と言いだした。

新潟市沼垂は母が六十年も暮らしたところだ。昔住んでいた家と今の家を混同してしまったようだ。私は沼垂の家の周辺や間取りを書いて見せた。しかしこの疑問は当分解けなかった。

家の前を通る子供たちを見て、「あの子供たちは沼垂小学校に行くんだろうか」とも言った。「ここは亀田町だから、亀田小学校に行くんだよ」と言う。と、不思議そうに考えていた。

「向かいが賑やかだねえ、何だろう」「保育園だから子供たちが遊んでいるんでしょ」

息子たちが通った保育園も忘れてしまった。

電気毛布のスイッチの使い方や、テレビのリモコン操作が上手くいかない。母はしっかりと知っている人だったから、信じられないような変わり方になったつもりともられた睡眠剤のせいじゃないかと恨めしくなる。

母は小柄なので、ベッドの上り下りが楽になるようにと考え、思い切ってエアマットを外した。その結果は上手いきき、ベッドの上り下りが楽になった。そこでベッドの柵につかまってひとりで起きる練習をさせた。腕の力がないので、最初は思うようにいかなかったが、何度も繰り返し、何とか出来るようになった。そうすれば、次はひとりでポータブルトイレを使えるようになりたい。ポータブルトイレは一見おしやれな家具調の椅子で、木のしっかりとした肘が付いている。

「おばあちゃん、立つたら、右手で遠くのほうの椅子の肘に手を伸ばしてみて」

母は短い手を伸ばし、ふらふらしながらようやく届いた。

「ふたを上げて」「パンツをおろして」「座って」「もう少し後ろに下がって」私の誘導で何とかひとりでできた。

退院してから六日目だった。しかしまだ危ない。私が付いているときだけにしてね、と言っておいたが、いつ



の間にちゃんとポータブルトイレに腰掛けていた。初めから自分でやっていったような顔をして！

当然、パンツ式おむつは外した。

寝たきりになるかもしれないと覚悟はしていたが、いや、絶対にさせないとも思っていた。幸い骨に異常がなく、手と足を動かすことができたので、体力の回復を待って、少しずつ足の運動をさせた。こんなに回復すると

は思わなかった。やはり住み慣れた家

が いいのだと思った。家族と暮らし、

食べ慣れた食事をし、安心して眠る。

そして次々と咲く庭の花を眺める。

ベッドからよく見えるようにと、母の

部屋の前のぬれ縁に、花が咲いた鉢植

えやプランターを次々と並べた。

チューリップ、水仙、バラ、カーネー

ション、百合、アマリリス、ゼラ

ニウム、ハイビスカス、そして朝顔

と。

二男と婚約者が、母のために寿司を買ってきてくれてお祝いをした。私は母の好きなおはぎをたくさん作って、姉や妹の家に長男から届けてもらった。

がらんとしていた母の部屋は、ベッドやポータブルトイレで一杯になった。それはこれからの母の、生活必需品となった。



## 歩きたい

明け方、どすんという大きな音にびっくりして飛び起きたら、母がベッドの脇に転んでいた。

「トイレに行きたくなつて、何気なしに起きて歩こうとしたら、転んでしまった」と言う。まだひとりで立ったり歩いたりできないのに、ひよいと立とうとしたりして、危なくて目が離せない。まだひとりでは危ないからといくら言っても、忘れるのかひとりで立とうとする。

立つことは人間の本能なのか、それとも長い習慣なのかと考えてしまう。母は頭で思うより先に、無意識のうちに体が立とうとするようだ。

足の運動をさせようとするが、難儀なようで素直にしようとしれない。年を考えると、あまり無理をさせるのもよくないような気がする。それでいてひとりで立とうとする。そしてベッドの周りをふらふらと伝い歩きをするよう

になった。足が思うように動かず手が先に出て、どこにでもしがみつく。私は四六時中母に付いている訳にもいかず、転ぶのが心配で落ち着かない。台所にいても、しょっちゅう振り向いて母の姿を確かめる。

母の行動範囲が広がり、おやつ、いない、と思つてのぞくと、ベッドに戻つていたり、ポータブルトイレに腰掛けていたりする。

そこで日中母を支えてトイレまで行くことにした。腰が曲がつているので前に倒れそうになる。行くときは何とか足が前に出るが、帰りになると、立ったまま足がぶるぶると震えて動かなくなる。私は足を出してと言つてしまうが、その足が出ないために、怖くてどこにでもしがみつこうとするようだ。

入院していたときには、手や足の肉がげっそり落ちて、足には縦にしわがでていたが、少し肉が付いたようだ。あんなに少ししか食べないのにと不思議だが、そのために伝い歩きが出来る

ようになったのかもしれない。

トイレまでひとりで歩いていこうとするようになった。それはいいことだけれど、まだひとりでは歩けないのに、ふらふらと伝い歩きをしている。また転んで今度は骨でも折れたら大変と、私の心配は大きくなった。しかし母は一度も声を掛けずに立とうとするので、そばにいて付いていくようにしなければならない。

ある日、とうとう転んでしまった。「どうして分からないの、私がいなときは危ないから、ポータブルトイレにしてねって言ってるでしょう。聞き流してるの、それともぼけたの」「両方みたいだね」

「また入院したくなかったら、ひとりで歩かないでね」

私は大きな声で、ひどいことを言つてしまった。そんなことを言う自分と、言わせる母に腹を立てていた。

結局母は、廊下を歩く練習をさせようとしても拒むのに、ひとりでふらふらとあちこちにつかまりながら、トイ

レだけはひとりで行こうとする。そう  
こうしながら、退院後一月半後には何  
とかひとりで行けるようになった。私  
は覚悟を決めて、付いて行くことを止  
めた。しかし神経は母に向けて、元  
戻ってくるまで見届けていた。

その内に、夜中までひとりでトイレ  
へ行こうとするようになった。夜中は  
寝ぼけていて危ないからポータブルに  
してねと、何度もうるさいほど言っ  
ても、時々行こうとする。

物を持って歩こうとしたり、立って  
ふらふらしながら何かしようとし  
たり、危なくてどうにもならない。

私は母の気持ちに分からなくなっ  
た。転ぶことの怖さは、母自身が一番  
よく分かっているはずなのに、私の言  
うことには全然耳を貸そうとしない。  
危ないということが分からなくなった  
のだろうか、それとも、そんなこと  
いってたら何もできたもんじやない  
と思っているのだろうか。

私の心配をよそに、母は杖を突いて  
ひとりでトイレへ行くようになった。



## 車椅子で結婚披露宴

母が可愛がつて育ててくれた二男の  
結婚式が、退院してから一カ月後の、  
五月二十五日に行われた。

母は以前から、足が弱っているの  
で涙が出そうなど悲しいけれど、結婚  
式にはとても出席できないと言ってい  
た。それでも何とか出席させようと、  
みんなであれこれ考えていた。二男も  
母の出席を強く望んでいた。しかし、  
このたびの入院騒ぎで、とてもだめだ  
と誰もが諦めた。

当日は、私の妹の三人娘の明子たち  
と、その幼い娘たちが、我が家まで来  
てくれて母の面倒をみてくれた。

神前結婚式が終わり、賑やかな披露  
宴が始まった。親族の席は末席で、ド  
アの近くの花嫁の父に私があいさつを  
していたとき、ドアが開いて、突然、  
明子が小さな体で車椅子をよいしょと  
持ち上げるようにして現れた。何と母  
を車椅子に乗せていた。私は一瞬間が



カチカチッと混乱し、続いて涙腺がどっとたるんで母の顔がぼやけてしまった。花嫁の父もびっくりし、母の手を握りしめた。

私は明子から母を乗せた車椅子をバトンタッチすると、夫を目で捜した。びっくりして飛んできた夫と、宴たけなわの人々の中を、正面の若い二人に向かつて、ゆっくりと車椅子を押し

た。母を見つけた人たちが、おおーっ  
と声を上げている。

にこにこと笑っていた花嫁花婿は、  
母の姿に気付いた途端、電気でも通さ  
れたようにはじけ、目を見開いて飛び  
上がった。

と同時に、右と左から走り降りてきた。  
「おばあちゃん！」  
突然のことで、どうやって現れたの

か理解できないままに、二人の真っ赤  
な瞳が喜びを物語っていた。普段着の  
ままの母はただ黙って、正装した主人  
公たちを見上げていた。

「写真を撮りますか」と、花嫁に付き  
添っていた係の人が、とっさに気を利  
かせてくれた。カメラを持った人たち  
がさーっと集まり、車椅子の母を守る  
ような花嫁花婿に一斉にシャッターを

押した。

会場の人たちは、突然現れた車椅子の母と若い二人の絆に触れて、「よかった、よかった」と言ってくれた。

姪たちが仕組んだ勇氣ある行動は、私の心のひだに触れ、感情を高ぶらせてしまった。

たるんだ涙腺は元に戻らず、情けない花婿の母となつてしまった。

両親への花束贈呈では、二人がにこにこ花束を持つて近づいてくるまでは、しっかりとしていたつもりなのに、輝いている顔を近くに見た途端、私の顔はくしゃくしゃになつてしまった。花嫁から手渡された花束で顔を隠すという、情けなさだった。

二男は明子と同じ年で、姪たちとは幼いころから仲良く遊んで育った間柄だ。妹の話によると、姪たちは前夜から作戦を練っていたらしい。

明子が母の洋服だんすから洋服を出してきて、

「おばあちゃんこれ着よう、さとちゃん（二男）の結婚式見に行こう。私た

ちも見たいもん」

と言いながら、あれよあれよという間に着替えさせ、車に乗せて連れてきたとのことだ。自分たちの幼い子供二人と、歩けない母と車椅子を運ぶのだから、簡単なことではない。明子が母を

車に乗せたり、妹たちを指示して、軽自動車二台で式場まで来ると、受付の人が会場まで車椅子を運んでくれた。

大勢の人たちの善意のお陰で、母は念願の二人の嗜れ姿を見ることができた。

私などは、とても無理だろうとか、母の体がつだろうかという気持ちに先に立つて諦めてしまいが、若い人たちは「連れて行くんだ、そのためにはどうしたらいいか」と、発想が逆だった。その力強い行動力に教えられ、頭が下がった。

明子には母の入院中も、有形無形に元気づけられていたのに、極めつけのこの英断に、言葉では言い表せないほどの、感謝の気持ちで一杯になった。

(続く)

(え・佐藤瑞江子)

★わいふバックナンバー

260号  
トラブル旅行記

261号  
嫌われる姑・好かれる姑

263号  
わが家の親子ゲンカ

264号  
ふるさとの伝統行事

265号  
私の初体験

269号  
再就職で得た仕事・得られなかった仕事

272号  
カウンセリング体験

273号  
子どもとテレビ

274号  
引っ越し騒動

275号  
料理と私

277号  
不妊治療・私の場合

278号  
「おけいこごと」との格闘

279号  
あなたの夫は何番目の男？

281号  
思い出の地・再訪

283号  
私の読書歴

自分にあつた高校入りの決定版 私立高校ガイド  
ハイスchoolレポート (関東版)

2001年度版 二〇〇〇円＋税

シリーズ最後の暮らし  
お年寄りが安全に暮らすために 一五〇〇円

変わる主婦・変わらない主婦 一五〇〇円

お申し込みは ☎〇三―三二六〇―四七七―

# FREE TALK

## フリートーク

### 「加齢」という言葉

東京都台東区 高梨陽子（57歳）

年齢を表現するには、いくつかの使い方があらしい。まず、誰もが確実に一年ずつ年を重ねる暦年齢。運動能力や体力で判断される年齢。また、歩く姿など外見からの見た目の年齢。もうひとつ、宗教的には魂年齢（精神年齢）というものもあるという。

暦年齢は、みんなが平等に年を重ねるわけだが、意識のほうは一年ずつの足し算をしていないようである。暦年齢をあまり自覚することもしに日々を過ごしていた。

昨年の十月末、左目の瞼にぼつんと吹き出物ができたので、眼科で受診したときのことである。たかが吹き出物なのに、必要もないような視力検査などをするので、点数稼ぎが見え見えの感じで、気になってしまった。

診察結果は、吹き出物は心配ないが、老人性白内障だという。「加齢」によっておこるものと聞き、この「加齢」と「老人性白内障」という言葉がダブルショックであった。

老人性白内障の治療としては、症状が進んで見づらい状態になれば、手術で眼内レンズを入れる方法などがあるという。まだ、症状が軽いので進行を遅らせる点眼薬が処方された。

この点眼薬のラベルに老人性白内障用と、書かれているのを見るたびに年齢を自覚させられるのである。一日三回の点眼は忘れがちであり、一日一回がせいぜいであった。

どうにか三カ月ぐらい続けたが、その後は全く点眼していないので、いまでは少し進行しているかもしれない。症状としては時どき眼が霞むことがある。

運動能力などの体力で年齢を判断する場合は、訓練することで、ある程度は若返ることができる。この年齢をいくらかでもダウンしたいので、トレー

ニングセンターへ通っている。ダイエットを兼ねて体力アップに努めている。

外見で年齢を判断されるときは、歩く姿勢や立ち姿で若く見えたり、老けて見えてしまうことがある。背筋をしっかりと伸ばすように心がけている。

宗教的な言葉の魂年齢（精神年齢）とは、さまざまな学習をしたり、苦難を乗り越える修行を積んで、多くの人生経験を重ねていかなければ増えていかないものだという。

だが、精神年齢という言葉は、暦年齢よりも幼稚な行動をするような人に対して、「精神年齢が若い」などとこれまで使っていた。宗教的な意味とはちよつと違っていたようである。

この魂年齢については、姪が今年の五月二日早朝、三十二歳の短い人生を終えたことで、身近に考える機会となった。

姪は五年前にガンの病魔に襲われたが、手術後は順調に回復し三年が経過した。だが、二年前に別の部位にガン

が発病してしまい、手術後は定期的に通院していたのであった。

わずか一カ月の間に、週単位で容体が悪化し、最後の別れを迎えることになってしまい、肉親のショックは大きかった。

姪は二度目の入院期間が長かったのだ、病室の患者さんの入れ替わりが多かった。新しく入院された患者さんを、いろいろとお世話させていただいたりしていた。小さいころからだれに対しても優しく気配りする性分であった。

姪の暦年齢は三十二歳の若さであったが、魂年齢（精神年齢）は遙かに上だったと思っている。病氣と一生懸命に闘い、苦難を乗り越えることで修行を積むことができたし、多くの人々に優しさを与え続けた人生であったので、魂年齢は「加齢」されたはずである。

人生八十年といわれるが、姪の場合は三十二年間で八十年分の修行を積んだのではないかと思う。

果して私の魂年齢はいくつになるのだろうか。学習不足と修行不足のうえに経験不足では、まだまだ暦年齢には程遠い状態かもしれない。

この魂年齢だけは、「加齢」という言葉が好ましい感じで、受け止めることができそうである。

## 恐怖のお誘い

静岡県 藤 広見（33歳）

昨年の春の事である。この町に越してきたばかりの私達家族は、入学と入園をひかえた息子達と共に、新たな希望と少々の不安の入り混じった気持ちで暮しのスタートを切った。そんな時、一人の女性と知り合った。長男と同じ小学校一年の娘と二男と同じ幼稚園に通う息子を持った、私と一歳違いのその人は、スラリとした長身にボーイッシュなさわやかさを持った感じの人だった。



仲良くなるには余り時間もかからず、彼女は幼稚園の事からこの町の事、安いスーパーや良いお店などこと細かく私に教えてくれた。朝夕の幼稚園のバス停で会う以外にも毎日のように連絡をくれ、スーパーの特売日などには一緒に車で乗せて行ってくれるなど、とても親切にしてくれた。

彼女と親しく話しているうちに、時

折彼女がもらす「友達がいない」という言葉が気になったものの、明るくて話題も豊富な彼女を見ると「そんなふうには見えないけどなあ」と思うだけで余り気にせず、おつき合いをしていた。

ところが案外早くその言葉に納得する事になったのである。

見かけによらず彼女はどこに行くに

も一人では行けないらしく、次は買物、次は映画と次々と約束を取りつけるようになった。

私はかねてから習いたいものがあつたので市の教室に申し込みに行くと「一人で申し込むなんてずるい、信じられない」と怒り出してしまふ。次第に私は一日に何度も鳴る電話でのお誘いやFAXが恐怖になっていった。

外出先から帰って来ると必ず留守録メッセージが入っている。家事を済ませてから連絡しようと思っていると「ピンポーン」彼女が玄関に立っている。「なんだ、いたんだ。どこ行っていたの？ 留守番電話聞いた？ 連絡ちょうだいって言ったのに電話こないから……」である。週に三日は家に来るようになり、朝十時から、二時の幼稚園のお迎えまでいるのだ。昼食を出さずにいると次からはパンを持って来た。そして彼女の長話のほとんどは友達のうち、悪口である事も益々私の気持ちを暗くさせた。それでも外面のよい私は近所の人とはうまくやらなけれ



ばという気持ち強く、ストレスを感じながらもそれなりのおつき合いを続けた。

ところがある時、私の知らない人が、やけに私や私の家族の事に詳しいのに気がついた。聞けば彼女が私の情報を流しているという。驚いた事に夫婦仲や家の間取りまで皆知っていたのだ。そこで私は初めてきっぱりと「私の知らない人に私の家のプライバシー的な情報を流すのはやめてほしい」と言った。

彼女は幼児のようにしゃくりあげて泣き出し、「もう私の事嫌いになっちゃったでしょう? もう仲良くしてくれないよね」と泣きじゃくるのだった。

私は今後の事よりも何よりも、別に泣く程の事でもないのに、どうして年上の彼女がそんな幼子のような泣き方をするのかととても不思議だった。

翌日から会ってもうつろな目できろりと挨拶するだけで、あれ程頻繁だった電話やFAXがピタリと止んだ。

ホツとする反面、不気味な気もした。暫くすると同じバス停の人から電話がきた。「何かあった?」の問いにかいつまんで話をする。「わかるよ、私も悩んだもん。あなたが来る前はね、私だったのよ」と言った。

どうやら自分のお気に入りのターゲットを見つけると電話やFAX、お宅訪問を繰り返すらしい。なんでも以前住んでいた所では総スカンをくらいい、しまいは誰に電話をしてもガシャンと切られてしまったそうなの。というのも仲良くして得た情報や悪口を、あちこちに言いふらしたらしいのだ。案の定、暫くすると、私の事もさんざん言っていたという話を耳にした。後の祭りである。自分が他人様の悪口を聞いていた時に、いつか自分の事も言われるという事に気づくべきだったのだ。

一年経った現在、あのとりとした不気味な挨拶だけが変わっていない。ただターゲットだけは私の後はSさんに、そして現在はHさんに変わった。

今は毎朝Hさん宅前で「バス停まで一緒に行きましょう」と待っている。

## 輪切り

奈良県生駒郡 高松恭子

三月中頃、突然ひどい腹痛に襲われ、エコーの検査を受けた。その結果、左の腎臓がひどく腫れていて、腎臓結石かもしれないという。ちやうど連休の前だったので主治医は、「激痛になったら、すぐ救急車を呼びなさい」と、紹介状を書いてくれた。

幸い痛みはおさまったが、次の診察のとき、腎臓の腫れが気になるので、できればCTを撮りたいのだが……と言われた。

もう少し様子をみてもよさそうなおぶりだったが、やはり気になる。それにいつもの好奇心が頭をもたげ、一度輪切りになったお腹を見たかった。脂肪がどの程度ついているか知れたかっ

たのだ。再び紹介状を貰い、もう一軒のかかりつけの総合病院でCTを撮った。

初めて輪切りにされた自分のはらわたを見た。胃や腸、脾臓、胆嚢、腎臓、肝臓が、無造作に詰まっただけで、まるで整理の悪い引き出しを開けたようだった。

不思議な気がした。そんなに太くもない胴の中にこんなにぎっしり詰まっているなんて。一見、無造作のようだが、それぞれの臓器は、まるでジグソーパズルのように収まるべきところに収まって働いているのだ。思わず見入っていたら医師が言った。

「腎臓は異常ありません。ただ、ちよつと脾臓が……、ほら、大きくなってるでしょう?」と言われたが、ほかの脾臓を見たことがないのでわからない。

放射線科の方から、造影剤を入れて再検査の必要ありと言つて来たらしく、有無を言わせない雰囲気です約をさせられた。

一週間後、再びCTを撮った。造影剤で体が熱くなるとは聞いていたが、全身に飲みごろのお茶を入れられたような熱さだった。気分が悪くなり、あちこちに赤い発疹が出て、検査後すぐ点滴をした。何を点滴しているのかと尋ねると、「解毒剤のようなものです」と言うではないか。(やっぱり毒を入れられたのだ!)と、腹立たしく思う。

二日後、結果を聞きに行った。造影剤を入れると画像は鮮明になり、血管まで見事に写っていた。

「よかった、脾臓は心配いりません。ただねえ、この胃の壁、すごく厚くなってるでしょう?」と、言われたが、ほかの胃を見ていないのでわからない。医師は、何とかいう横文字の胃の病気の疑いがあると言つて、今度は胃カメラを飲み、組織を採つて検査することになった。

胃カメラは二十五年前に一度飲んでいる。思っていたより楽で、当日も軽い気持ちで出かけた。ベッドに横にな

り、自分が飲むファイバースコープを見た時、隔世の感を感じた。

何と小さくなったことか。四半世紀前は先端が太くなつていて、これが食道を通ると思うとぞつとしたものだ。今回は思わずほつとした。ところが意に反して、カメラは思うようにすんなり入らず、ようやく入ったらそのまま三十分、胃の中を右往左往して五力所から組織を採られた。癌の疑いが濃厚だったらしい。その間、痛いやら苦しいやらできんざんだった。結果は、二人の専門医が診断して、五力所ともすべて正常で、もともとの特病、「蛋白漏出性胃腸症」に落ち着いた。

この三カ月に私が支払った医療費はふだんの治療費も含めて三割負担で、十一万円弱だった。もう興味があつても余計な検査はやめよう。人間の体は、案外丈夫にできているものだ。結婚して二十七年、持ってきた家電製品はほとんど買い替えたのに、もともと持病があり、欠陥商品だった私の体は、何度も修理を繰り返しながら、部

品もそのままでちゃんと動いているではないか。あとはもうつぶれるまで大事に使う。

検査漬けでうんざりの三カ月だったが、いいこともあった。血管が健康

だったことと背骨がしっかりしていたこと、そして内臓の脂肪が極端に少ないと言われたことだった。

もう内臓の輪切りは見たくない。輪切りは、金太郎飴のようにすっきりし



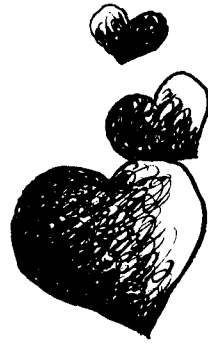
たものに限る。

## 涙・涙

埼玉県大宮市 笠原静枝

平成九年秋、二人の若い男女が病院の個室に現われた。二人とも作業衣みたいな服を着てエプロンをかけている。私は、一瞬どんな用事で来たのかといぶかしく思った。すると、一人は、「お父さんが入っておられた老人ホームの者です。お父さんと握手させて下さい」と言ったのだ。私は、驚いたと同時に涙が目にとまった。というのは、一時間ばかり前に父は、息を引きとったのだ。「どうぞ」と私は言ったものの、感激で声がかすれていた。二人は入室し、父がまるで生きているかのように話しかけ、握手して退室していった。

父の死体に握手させて下さいというのは、よほど生前に親しくして下さっ



たのだろう。こんなに父を思ってくれる二人に対して有難うという簡単な言葉では言い尽くせない思いがした。いつかこの日がくるだろうと覚悟はしていたが、父が亡くなり茫然としていた私は、何か救われたようなほっとした気分になった。

父は、病院の隣りの老人ホームに二年弱お世話になり、肺炎を起こし十日間の闘病の末亡くなったのだ。

この二年間、父はホームで大切に介護された。父は生来我がままで、母の

見舞が少ないと言っては文句を言い、母を困らせていた。その上脳血管障害のため、大声でとなりちらし皆に迷惑をかけてきた。周りの者は夜静かに寝られなかったに違いない。なにしろ、前の入院先の老人病院でも大声でどなり散らし、ついにベッドごと風呂場に入れられてしまったことがある札つき者なのだ。皆に迷惑をかけるので、母はいつ退園を催促されるのか、ヒヤヒヤしていたのだ。

この老人ホームでは、こんな仕末に

おえない父を「お父さんは、人気者なんですよ」と言ってくれる。よく聞いてみると、なんでも「有難う」「有難う」と介護人に言うんだそうだ。発病前に、あんなに家でいばっていた父が別人のように。まだらボケの父でも人の暖かい介護を敏感に感じたのだろう。心のこもった介護が相当嬉しかったのだろう。老人病院でも老人ホームでも、あんなに迷惑をかけた父が、どこでも「人気者」と言われ介護され、晩年の四年間は、つらい中にもちよっ

り幸せだったのではないかと思う。

父は白い布でおおわれ、私と一緒に寝台車の人となった。病院の出口には、病院の関係者と、ホームの人全員が見送ってくれた。父はきつと「皆さん有難う」と言ったに違いない。私は暖かい見送りに嬉し涙を流した。

介護保険がうんぬんされている今、こんな暖かいホームがあることを、嬉しく思うと同時に心強く思う。

いろいろな涙を流した長い長い一日だった。

#### 暮しの手帖社編

### 『戦争中の暮らしの記録』

東京都武蔵野市 斉藤きよみ

この本の後記によると、最初に発行されたのは、昭和四十三年の八月とある。私が、母からこの本を渡されたのも、その頃だと記憶している。小学校六年ぐらいだっただろうか。第二次世界大戦を日本国内で体験した人々の、

銃後の記録集であるこの本を、この頃の私は全て読んだわけではないが、大戦当時の小学生達が、地方に集団疎開を余儀なくさせられて、ひもじい思いをしたり、地元の子供達に苛められたりした話は、同じ年頃の子供のことだけに、とても興味を引かれて、一生懸命読んだ。

その本を、四十を過ぎ、二人の子供の親になった今になって、私は再びこの手に取った。前は、ぺらぺらの薄い表紙の雑誌だったものが、今では保存版として、立派な装丁の本になっている。わざわざ本屋に注文して取り寄せたそれを、私はどうしても自分の二人の子供達に読ませたかったのである。ちやうど私の母が、私にそうしたかったように。

もう太平洋戦争が終わって五十年以上が過ぎ、戦争体験者は徐々に鬼籍にはいり、数は減っていく一方。戦争があったことすら、ろくに知らない若い人達もいる。私の両親にしても、当時母が小学生、父は中学生で、正確に事

実を記憶しているとはいいたい。疎開先でつらい思いばかりした母がする戦争の話は、恨みつらみに終始しがちで、どうしても偏った話しか聞くことができない。あまりにつらすぎて話をしたくない（シベリアの収容所にいた経験をもつ夫の父などは、まさにそういう一人）人達もいよう。この本にあふれかえった、当時のあらゆる年代、あらゆる立場の人々の経験談は、今の、戦争を知らない私達の世代にとっては、とても貴重な記録であることにはちがいない。

暮しの手帖社としても、その思いは同じだったようである。雑誌『暮らしの手帖』は、毎号八十万部発行していたが、この号に限って非常に早く売り切れたため、さらに十万部増刷し、それもうすごい勢いで売り切れた。これはこのままですませてはいけない。語りつがれ、読みつがれていってほしい。そういう強い思いが、雑誌を、保存版という形の一冊の本として再生させたのだろう。本になったほうには、雑誌を読

んだ人々の感想集も付け加えられ、さらに充実した内容になっている。

改めて手に取って、子供だった時には読まなかった部分にも目を通した。空襲で焼け野原になった町の中を、大きな荷物を背負って歩く子供達の写真。兄弟なのだろうか。年長と思われる男の子が、赤ちゃんを背中にくくりつけて先頭を歩いている。親はどうしたのか。焼け死んでしまったのか。そんなことを考え出すと辛くてたまらない。

配給されたわずかな食料で、どうやって食べて来たかという記録なども、よくもこんなわずかな量で生き延びて来たことよと、感嘆せずにはいられない。飢える子供達を目の前にして、母親たちはどんなに辛かったことだろうと、胸が痛かった。

こんな本があるんだよ、と何気ないふうに二人の子供に見せてみたが、残念がらしらんぷり。少しずついい。迷惑がられてもいい。私が読んで、中味を話してやろう。そして、あなた達のおじいちゃんや、おばあちゃん

んが、どういう経験をしたのか知っていてほしい。それが戦争経験者を親に持つ、我々中年世代ができる、少しばかりの語り継ぎなのである。我々がいなくなったら、臨場感をもって戦争を語れる人はもういない。

## 旧姓で呼ばれる時

奈良県奈良市 田中慶子（54歳）

結婚して既に久しく、今の姓にすっかり馴染んだが、思わぬことで旧姓で呼ばれることがあった。七年前の母の入院と、それに続く介護生活の時である。病院で母に付き添っていて初めて私が「増田さん」と呼ばれた時には、私はとまどいを感じながら返事した。しかし同時に昔に返ったようで何か嬉しく面映い気持ちもあった。

その後の在宅介護、施設入所時など、私が市役所やホームへ出向き、私が母に成り代わって、

「まずだすえこ（増田末子）です」と母の名前を言うのと、「えっ？ まつだせいこ（松田聖子）さん？」と相手は驚いて聞き返し、聞き違いとわかって大笑いになることが度々あった。寝たきりで痴呆の老母と、若く華やかな彼女の何と対照的なこと！ 私は顔では笑いながら思った。

それから母が八十七歳で亡くなるまでの三年半、私は増田と田中の二つの姓を持つ生活になる。

三年半前の暮れに母は亡くなったが、その後も続いて私は旧姓で呼ばれることがある。同窓会が復活したのだ。何十年振りかで再開された友人達との交流で、私達はお互いを旧姓で呼び合う。昔の、本来の自分自身に戻ったようだ。この点でも、つまり自分自身であるという意識を持てる点でも、夫婦別姓はやはり意味のあることかもしれない。

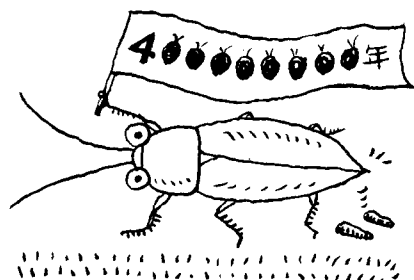
母の介護を通して、人のやさしさと醜さ、生きる歓びと厳しさを知った。同窓の友人に「増田さん」と呼ばれる

と、遠い日の子供の頃と、数年前までの介護生活がほろ苦く、そして少しだけ懐かしく甦る。

## ゴキブリ四億年

東京都世田谷区 太田啓子（41歳）

夕食事、我が家の台所をゴキブリが横切った。虫が大嫌いな息子は、素早く殺虫剤を持ってきて「シュッ」



「シュッ」と二、三回ゴキブリ目がけて吹きつけた。

ゴキブリは、仰向けになってしばらく手足をバタバタさせていたが、そのうちビタリと動かなくなった。

少したってから、死骸を始末しようと思い、ゴキブリに近づいた私は驚いた。死んだゴキブリのわきに、茶色い長方形の物体が落ちていたからである。そうなのだ。ゴキブリは、断末魔の苦しみの中で、卵を産み落としていたのだ。

子供の頃『ゴキブリ四億年』という絵本を読んだことがある。ゴキブリの絵がやたらたくさん書かれている、インパクトのある絵本だった。しかし、それよりもその内容に驚かされた。ゴキブリは、人間が誕生するはるか昔、四億年も前から地球上に生き続けていると、書かれていたからである。

確かに、この生命力ならと、昔の記憶をたぐり寄せ、大いに納得した夜であった。

（え・小沢恵子）

## 自費出版は

「わいふ」へどうぞ！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれる方のために、聞き書きのまとめもいたします。

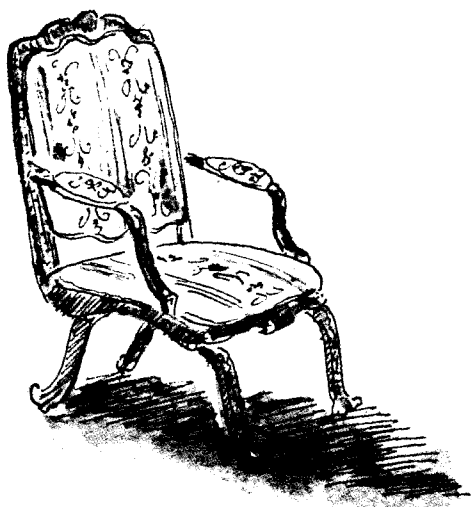
費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近では、読者からのご依頼により、「紅の雲」、「春のかたみ」、「出会いに合掌して」などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょうか。

# リラの花 桜の花

浅野素女



一年間のフランス留学を終えて日本へ戻ると、私は大学を卒業した。そして間もなく、フランスに舞い戻った。アダムに会いたい一心からであったが、ただ男のために、それも結婚している男のために外国へ飛ぶなんて役柄はごめんだと、とにかくにも仕事を探し出してから行つた。その後には続くことは、反省、後悔することばかりだが、この一点だけは、偉かったと自分を褒めてやりたい。外国であらうとなかろうと、自分の生活は自分で保証する、という大前提がなかったら、ここぞという時に責任ある行動を取れない。

当座の仕事は、テレビの海外取材のコーディネートというごく短期のものであった。

日本を飛び立った時、一体いくらぐらいポケットにあったのか、すっかり忘れてしまったが、ごくわずかな額であつたろう。なにしろ学生を終えたばかりのこと。テレビのロケが始まるのを待ちながら、臨時に通訳のバイトをして手にした十万円くらいのお金がとてもありがたかつたから、二、三カ月分くらいの生活費しか持っていなかったのではないかと思う。

アダムは自分の友人宅の一室に私を住まわせようとしたが、私は人の世話になるのはいやだった。何とか自分でアパートを見つけ出した。たまたま見つけたのは十八区という、アラブ系やアフリカ系移民の多い地区のだ真ん中で、麻薬の取引で有名な通りのすぐ裏



だった。いま振り返れば、すべてが無謀であった。若いというのはいくことなのだろう。

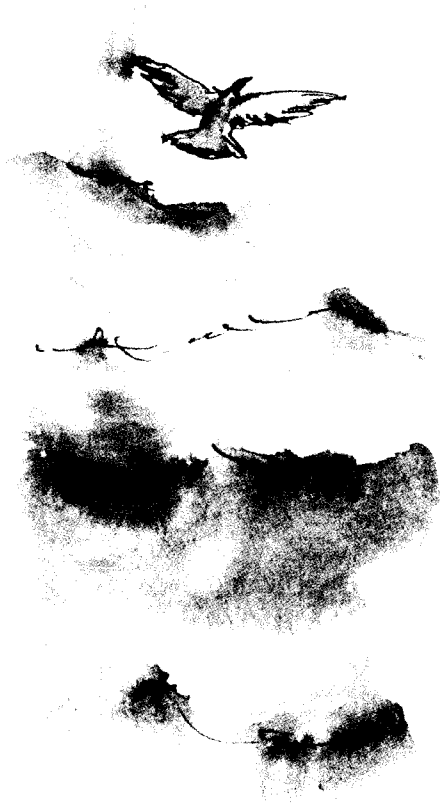
最上階のアパートだった。ベッドが傾斜した屋根に作られた天窗のすぐ下であり、仰向けになって、私はよく窓の向こうを行き交う灰色の鳩の影を見つめていた。雨の日には、重く雲の垂れ込めた空が目の前に迫って鬱陶しかった。よじ登って天窗から上半身を出せば、白いサクレクール寺院の塔がスレートぶきの屋根の連なりの向こうに見える。

脳裏に蘇るあの時期の風景は、どれも物悲しい。鳩

もスレート屋根もパリの空も、みんな灰色のトーンで包まれている。幸せではなかったからだろう。ただ、必死だった。

留学の経験があるとはいえ、自分の力で生活するのは今回が初めて。それも外国で。必死にならざるを得なかった。

いつ来るかもわからないアダムの電話を待つて、買い物に出る間も気が気ではなかった。何日も連絡がないことなど、しょっちゅうだった。もちろん、こちらからは連絡できない。まるで電話のために生きている



ような生活、それは異国生活の孤独に輪をかけて辛かった。

生きるということ自体に一体何の意味があるのかと、そう突き詰めずにはいられないほどの孤独。道を歩きながら、そのまま倒れて死んでしまいたいというような、それほど孤独だった。そうした孤独に身を投じたことは、ひとえに私の未熟さからではあったが、あの時の孤独を味わうことがなかったら、いまの私はなかったと思う。特に書くということに向かう力は、あの孤独からしか生まれてこなかっただろう。人生の幸も不幸も、すべてが裏腹だと思わずにはいられない。

十年以上に渡ったアダムとの関係の紆余曲折のすべてを書き尽くすことはできない。また、相手の口を封じておいて自分だけが語るの、私の本意ではない。ひとつの恋愛が終わり、それを両者が語ろうとした時、いかにふたつの「物語」がちがった様相を呈するか、そしてそれは真つ向から対立するものにさえなり得るということを、私は別れた後の裁判沙汰を通していやというほど思い知らされた。自分にとっての真実は相手の真実ではない。それぞれが各自の「物語」を生きている。人生は生きられ終った瞬間、フィクションと化するかもしれない。

だから、ここで私が語る「物語」の断片は、あくまで私にとつての真実であって、私はそのことの限界を承知している。それでもあえて書くのは、真実とはそうした苦い作業を通してしかそのおぼろげな輪郭を現さないものだ、とも思うからだ。

パリに来てすぐ、私はアダムとの関係が不可能なのだということに気づいた。彼には家庭があつて、すでに生活がある。私の居場所はないのだと、住まいが決まるまでの間、ホテルを転々としながら痛切に感じた。アダムには愛人を囲うほどの経済力もない。

それでも、その関係にしがみついたのは、パリまで来てしまった以上、その動機を自分に正当化する必要があつたからだろうか。私はふたりの関係の限界に気づきながらも、見て見ぬふりをしていたのかもしれない。ひとつ言えるのは、私たちは傷と傷の跡がびつたりと重なってしまう相手であり、そう簡単には離れられなかったということだ。

彼の妻には一歳にもならない子どもがいた。その時の私は、「なんでも受け入れなければいけない」とひたすら念じていた。アダムと出会った時、すでに彼女も子どもも存在していたのだから、こうした状況のすべてを受け入れなければいけない、それが勇気溢れる自立した女性の魅力ある姿であると。

子どもが生まれ出た瞬間の産声を、アダムが私に

テープで聞かせてくれたこともある。彼は私に何も隠さず、すべてを報告してくれているということが、私の自尊心をくすぐっていた。

出会った頃、彼が言ったある言葉が忘れられなかった。

「君に出会ってから、僕の中には二本の木があつて、どちらもいっしょに成長している。二本の木とは、君と、生まれたばかりの僕の子どものことだ」

この言葉が呪文のように私を束縛した。うまいものだ。最初から彼は、自分にとって子どもは絶対で、家庭を壊す意思はないのだと釘をさし、同時に君も同じくらいに大切なのだと私を最大限に持ち上げたのだ。

彼の家庭に嫉妬するなど、みつともないことであり、私は私の人生を独立して作らなければいけない、と私は思っていた。もちろん彼は、妻との間はもう終わった、と口にしていた。精神的にも肉体的にも。そうでなければ、プライドの高い私はいくらなんでもそうした状況を何年間も受け入れてはいられなかっただろう。それに、私の存在は「隠された」ものではなかった。彼の妻だけが知らされていず、彼の友人たち、母親、きょうだいなどにはある意味で堂々と紹介されていた。それくらい、彼と彼の妻の関係も振れたものであった。しかし、それについては私はここで言及する権利がないと思う。

彼が認めてくれている私の価値と彼の妻の存在は、競争相手にはならないものだ、そう思つて彼の妻を高めから見下ろし、その存在を切り捨てることで、私は自分自身を支えたのだろう。

もうひとつ、よくアダムが口にしていた言葉に、「君は僕の愛人なんかじゃあない」というのがある。その時は真に受けていたのだから、人間というのは、愚かしさからにせよ、欺瞞からにせよ、自分を救うためには何にだってしがみつくものなのだ。愛人でなければ一体何だったのか。一生に一度の運命的な出会いであつたとしても、その事実是不変ならない。

幸い、仕事があつた。二十代というのは、仕事で認められさえすれば、たいいていの充足感を得られるものでもある。しかも、仕事を必死でこなさねばやつてゆけない切羽詰まつた生活状況があつた。仕事をこなし、仕事で認められることで支えられ、アダムという心の拠り所を必死で守りながら外国での生活を何とか切り抜けていった。アダムは仕事の上ではいつも相談に乗ってくれ、助けてくれたし、それについては昔も今も感謝している。私は彼の期待に応えたかつた。アダムの方も、孤軍奮闘して道を切り開いている私の姿が誇らしげであつた。彼自身、闘うのが好きな人だつた。

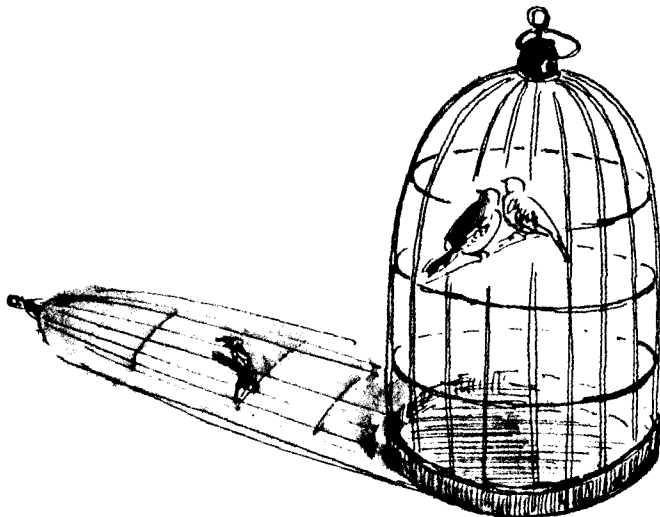
彼から経済的な援助はいっさい受けたことがない。

テレビや新聞の取材のアシスタントやコーディネーターをして、私は食いつないでいった。頼まれれば翻訳もしたし通訳もしたし、できることは何でもした。明日のことは皆目わからない日々だった。ただ、誠意をもって仕事をこなしていったので、仕事が途切れることはなく、なんとか暮らしてゆける状況だった。私もまた、八十年代のバブル景気の恩恵を受けていた。そんなこんなで、私のフランス滞在はどんどん延びていった。

それにしても、ふたりの関係が十三年も続いてしまったということは、どう考えても異常である。不倫の関係など、二、三年持てばいい方だろう。もちろん、その間には何度も別れ話が双方から持ち出された。そのたびに成功しなかった。互いへの執着が強すぎた。

しかも、私もアダムも逆境に強いという性格が災いした。恋愛の炎は、障害があればより強く燃え盛る。私は障害が大きければ大きいほどがんばってしまうところがあった。ユダヤ系である彼は、迫害や敵意や困難を前にすると、かえって人の何十倍も力を発揮するのだった。

アダムは、十歳くらいの時に父を亡くしてフランスへやってきた、ユダヤ系移民の家庭の長男だ。母親が



工場で働きながら、ぎりぎりの生活で子どもたちを育てた。早くに亡くした父親の権威というものに激しい飢餓感を抱きつつ、母親の存在の重さに押し潰されている、心理学的見地からすればある典型を示すパターンだ。いつも相手に強烈な愛情（または服従）を求め、他人と自分の間に的確な境界線を引けない。よく言えば、「思いやり」に溢れて「やさしい」のだが、それは時に相手を食い滅ぼすほどの凶器ともなる。

実際、彼は私を深く愛してくれていたのだと思う。あくまで彼なりの愛し方ではあったし、いま思えば本当に独善的な愛し方であったと思うが、彼はああいいう愛し方しかできない人だったのだ。

私は、まだ愛することを知らない小娘だった。不仲であった両親の姿から自分がどんな傷を受けていたか、その傷の深さを思い知るのはまだしばらく後のことであった。どんな風に両親それぞれの性格から抜けがたく私の性格が形作られていったかを理解したのも、もう少し後のことだった。『フランス家族事情』という本を書いたのは三十四歳の時だ。さまざまな家族のあり方を取材・分析し、家族とは何かを問う過程を通して、初めて私は自分というものを作った親、世代、国、環境を総合的に理解した。そして書き終えた時は、つきものが落ちたようにアダムから解放されていた。

二十代の私は自分というもののさえ知らなかった。自分を知らなければ人を愛することなどできない。私はアダムを愛していたのではなく、アダムに愛される自分を愛していたのである。

アダムもそれはたいへんだったことだろう。まさか私がこれほど「がんばって」、パリに居続けようとは思ってもみなかったのではないか。パリに来てしばらくしたら、現実を理解して日本に帰ってくれるだろうと、どこかでひそかに期待していたのではないか。

それでなくても、彼は、いつも息せき切らして駆け回っているような人だった。テレビという仕事柄ということもあるし、経済的に余裕のある人ではなかったということもあるが、何より性格的にそうだった。

忘れられない光景がある。ある時、私との短い逢瀬の後、いつものように彼は帰っていった。私は買い物があったかなにかで、すぐその後に出へ出た。すると、通りの向こう側を、ものすごい勢いで走ってゆく彼の姿があった。家族のもとに大急ぎで帰ってゆくのだと、私はガーンと拳骨で殴られたようなショックを受けた。どんな甘い言葉をかけてくれていても、一瞬後には家族の元へひた走りに走って帰るのだと。

しかし、ずっと後になって聞いたら、それは単にパーキング・メーターに入れたお金が切れていて、急いで走って行っただけなのだ。それが本当かどうかは

ともかく、私の芝居がかった悲劇的な思い込みとアダムの行動のあまりの凡庸さの落差は、恋愛というものの素顔を剥き出しにして、滑稽でさえある。パッションと呼ばれる恋愛のほとんどが、似たような誤解の積み重ねから成り立ってしまうのだろう。

自虐的に言うわけではなく、つくづく二十代の私は自分をごまかして生きていたと思う。アダムとの関係の限界を、どこかでわかっていた。はつきりとわかっていたのだ。そうでなければ、パリに来て間もなく知り合った日本の男性（ここではIと呼ぶ）と恋愛をして、その関係を平行して何年か続かせるなどということができたろうか。続けられたのは、Iが日本にいて、たまにしか会えないという状況だったからだが、私はアダムを反対に「裏切って」いたわけだ。

アダムとの関係に満たされなかったところを、Iとの関係で満たそうとしていたのは確かだろう。その人は文章の世界の人で、私の書くものを評価してくれ、いつも適切な助言を与えてくれていた。勢いでテレビ界に入ったものの、本当は文章の世界で生きていきたいと願っていた私には、かけがえのない存在であった。私はその人に向かって書き、書くことへの情熱がその人への情熱と重なり合って見分けがなくなっていた。

二十代の未熟な恋愛は、どれも鏡に映る自分の像に恋するようなものなのかもしれない。恋愛の相手という鏡は、自分の美しいところ、すばらしいところを映して褒めたたえてくれる鏡のような役割を果たす。相手のすばらしさ、よさも、すべて自分に貢献するものであればこそ、その人を「愛している」と思う。実際は、相手を通して自分を愛でているだけなのに。

Iも家庭のある人だった。アダムとはちがって、家庭を捨てて、私と再出発する覚悟までしてくれた。それは本当だった。誠実な人だった。

Iの存在は割と早くアダムの知るところとなる。以来、どっちつかずの状態が続く。誰が誰を裏切り、裏切られているのか、わけのわからない状態だった。

私はそれでもある時、Iと人生をやり直そうと決心し、アダムにそう告げた。アダムは慌てふためき、私も予想すらしていなかった行動に出た。妻に私との関係を打ち明けたのだ。そして、がらりと生活を変えた。少なくとも変えようとした。

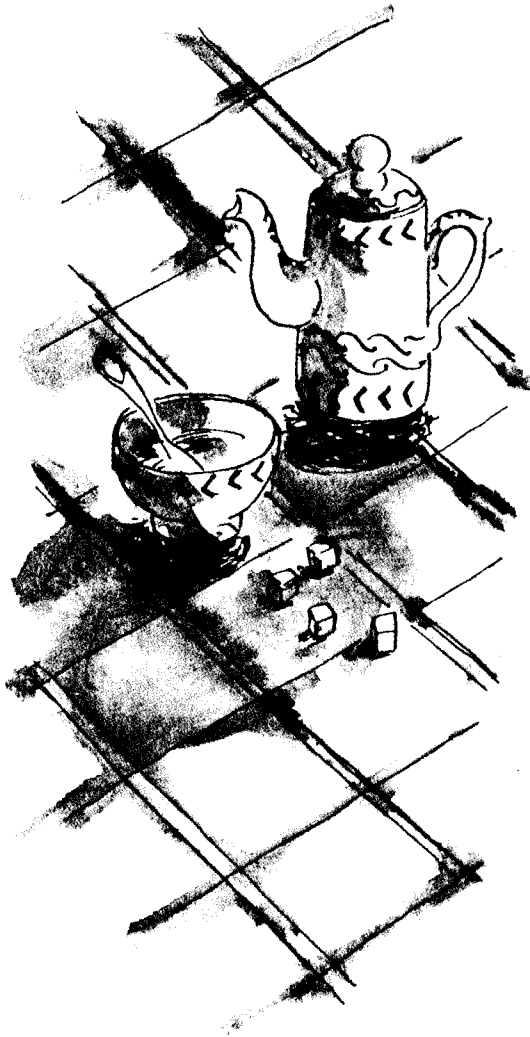
私は日本のテレビの仕事を定期的にするようになり、番組の責任を持たされ、多忙な毎日だった。アダムも忙しい人だったが、驚くほど頻繁に電話をくれるようになった。オフィスにまで電話をくれる。ちよつとの時間でも見つけて飛んできては、いっしょに昼食をとってくれる。部屋のあちこちにやさしい言葉を書

きつけた紙切れを残してくれる。うちに泊まってゆきことさえた。時間をかけて妻を説得してゆきたいというのだ。しかも、極めつきは、私の子どもが欲しいと言いだしたこと。

私はびっくりしたり、感動したり。他愛ないもので、ほだされて、Iとのことを棒に振ってしまった。もちろん、それだけではなく、私の方に、Iの腕に飛び込んでゆくだけの勇気がなかったのだと、いまは思う。どこかで相手に対する自分の愛のうすつぺらさに気づいていて、自信がなかったのだ。

私は当時、まだ自分のキャリアを作るのに夢中で、子どものことなど考える余裕がなかった。欲しいとも思わなかった。しかしアダムの情熱にほだされて、とうとう、そうしてもいいと私は応えた。不思議なものだ。その時には子どもは授からなかった。

私の愚かにもそれなりに真剣であつた恋愛の顛末は、書ききれないほどの紆余曲折を経て、破局へ向かう。読者の方々ももううんざりであろうから、この辺



ではしよる。いずれ裁判の話の時に戻ってこなくてはならない。

三十歳を目の前にして、私はテレビの仕事と手を切る決心をしていた。スピードばかりが価値を持ち、上っ面をなでるように情報を切り売りしてゆく、見かけばかりが派手なこの世界に長居するつもりはなかった。三十歳を過ぎたら、仕事を変える勇気がなかなか持てないだろうとも思った。

幸い、私の書いたものを評価してくれた編集者が、小さな仕事をくれることになっていった。テレビの仕事をしながらも、私は書くことだけは地道にコツコツ続けていて、活字にはならなくとも、機会があれば編集者に見てもらったりしていた。

仕事といっても季刊の文芸誌の海外書籍紹介のページで、これでは収入としてはゼロにも等しい。しかし、その時はいくらかの蓄えがあったので、後はどうにかなるだろうと、その仕事にしがみつこうようにして方向転換した。もちろん不安だったが、路頭に迷ったから、また通訳でも翻訳でもすればいいと思えるのが私の強みだった。

ある知人が、「二十代を無我夢中で生きなければ、充実した三十代はないよ」と言っていたが、その言葉が妙に頭に残っていた。二十代、無我夢中で生きたことだけは確かだったから、三十代もなんとかなるかも

しれないと、変な自信を持っていた。それは、テレビ界を離れ、仕事の上では振り出しに戻って生活を始めた私が、自分を支えるために自分にかけた呪文だったのかもしれない。

徐々に、雑誌の仕事がまわってくるようになった。新聞社の特派員とか大学の教授とか、そうした立場の人たちとはまた別の視点でものを書いた。特に文芸誌のための文学者インタビューは、自分の中に残る仕事となった。テレビでむちゃくちゃ働いた過去が幸いして、怖いものがなくなっていた。

取材はいまでも怖い。知らない人に会いに行くのは、いつもどきどきしながらである。だがその「どきどき」は、とても大切なことだと思う。あくまで人間と人間が出会うのであるから、むしろ臆する気持ちが必要れば味気ないものしか書けない。肩書きや社名に乗じて行動する人だけにばかりたくない、いつも思っていた。そのせいか、組織というものにはテレビ界で仕事をした最後の数年間世話になっただけで、結局、縁がなかった。いまもフリーの書き手として、仕事量は少なくても、できる限り丁寧になすように心がけている。これが私の選んだ唯一の贅沢だ。

アダムから完全に心が離れたのは、アダムの子をみごもり、その子を産んでからだだった。当初、アダムは



認知を拒んだ。私の心のどこかに、子どもが生まれれば私との生活に踏み切ってくれるのではないか、という期待がなかったわけではない。だが、その時はもう遅すぎた。Iとの関係を長引かせたことで、アダムは信頼を失っていたし、私たちの関係はあまりに振くれたものになっていた。

それでも、私が彼の手を煩わせず、ひとりで何とかやっている姿を見て、ほっとしたのである。彼は徐々に私たちの方に歩み寄ってきた。子どもにも愛情を注いでくれた。しかし、認知に関してはいつも言っていた。「そんなのは、紙切れの問題だ」

愛情という本質的なものがあれば、紙切れなどどうでもいい、という論理だ。おとなふたりの問題だったらそれでもよかったのだが、子どもという第三者が間に入った途端にそうはいかなくなる。はじめに書いた、パスポートの名前表記の問題も、そのひとつである。それはアイデンティティーにかかわるとても重要なことだ。それを重要でないというそぶく人に、私は幻滅していった。

行政上の問題ばかりではなく、子どもの誕生というのは、カップルにとって最大の危機であるということ。私はまだ知らなかった。ふたりだけの時はごまかしていられた互いの決定的な「ちがひ」というものが、子どもが間に入った途端、クローズアップされて

目の前に突きつけられる。生活の細部にわたって、生い立ちに遡るふたりの「ちがひ」が際立ち、ことあるごとに対立し始める。外国人どうしであるということもある。しかし、たとえ日本人どうしであっても、同じことだろう。

私は子どもを通して、アダムという人間の理不尽さに改めて目を開かされ、とてもこの人を愛していけないという確信を抱くようになった。誰だつて他人にとって理不尽な存在である。ただ、私は彼の理不尽さを受け入れられる器ではないと悟ったのだ。

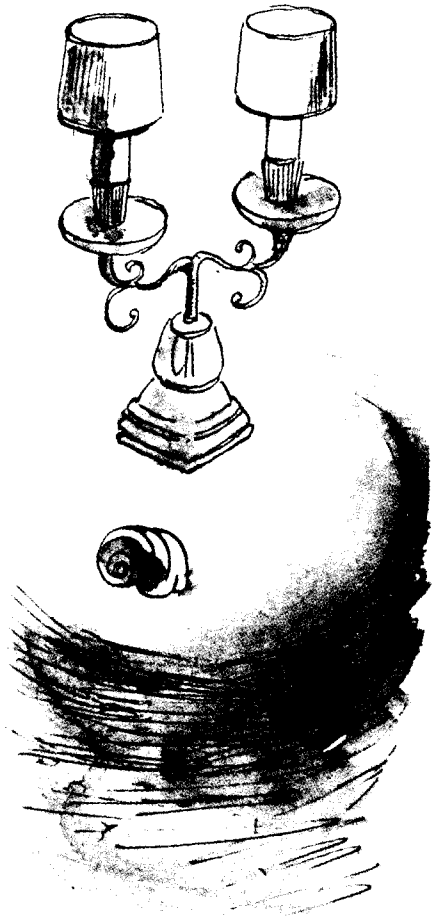
私は彼を諦めた。諦めたから、かえって彼との関係は穏やかになり、私たちの間に生まれたギョームが三歳くらいの時は、傍から見たら実に幸せそうな三人の時間を持つこともできた。かえってアダムの方が、自分の子どもが成人した暁には……、というような、将来に希望を持たせるようなことを口走ったりもした。しかし、私の心はすっかり冷めていた。あと十年もこんな生活が続けるつもりはなかった。それでいて、アダムを捨てることもできなかった。それが私のずるさだった。

破局は唐突にやってきた。すでに書いたように、『フランス家族事情』を書き終えた時、私は何から解き放たれた。無我夢中で生きてきた果てに、どうして、どうやって、一体どんな偶然と必然に引張られ

ていま「ここ」に立っているのか、それまでの自分の軌跡がすうっと見通せた。自分の問題が自分個人の狭い枠を離れ、大袈裟に言えばすべての人間の問題としてとらえるようになっていた。

その頃、私はちよつとした恋愛をし、その現場をアダムに押さえられてしまった。ギョームが四歳になろうという頃。まるでウォードウィルの一場面であつた。

状況が状況だっただけに、アダムは激しいショックを受け、怒り狂い、その狂乱ふりはその後何年も続くことになる。ありとあらゆる手段を使って私を攻撃し、私という人間を否定し、起き上がれなくなるほどに痛めつけようとした。世界中に対して私に悪者とい



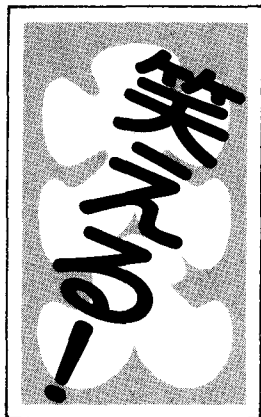
うレットルを張らなければ、彼自身の人生の言い訳がつかなくなるからだ。彼にとっては生きるか死ぬかの問題だった。

自分の引き起こした事態に打ちのめされ、私はすべてに自信を失った。こんな人を愛した自分に。自分を偽っていた自分に。不義の子どもを産んで、ひとりでやっていけると思っていた自分の浅はかさに。

しかし、はっきりしたのは、私にはもうアダムと縊りを戻す意思がまったくないということだった。それはまた妙にさばさばとした、自分でも驚くほどあつけらかんとした事実だった。

(続く)

(え・荒田ゆり子)



## 盗難車事件

埼玉県本庄市 大久保れい子

店の駐車場に昨夜から停めてある車が、昼近くになっても引きとりがないので、車の番号を書いてファックスを警察に送った。折り返しかかってきた電話で、盗難車だからすぐに行きますと言う。

本当にすぐパトカーがきて、数人のおまわりさんが車を囲んだ。

ドアに白い粉をかけた。何時頃からありましたか？ 不審者はいませんか？ ビデオは撮ってありますか？ 責任者の方はいますか？

昨夜の従業員は？ と言っていると、従業員達は「ひええ、こんな田舎でも車が盗まれるの？」と、チラチラと駐車場を見ながら騒いでいる。

そのうちに車の持ち主らしい方が現れた。五十代くらいの女性だ。どこかで見た顔だ。どこで盗まれたの？ 見つかった良かったですねと、声かける機会をうかがっていたら、外の方がおかしい。

指紋を取るためにぬったドアの白い粉などを、ふき始めている。その女性は、おまわりさんとちよつと話し込んだかなと思つたら、車に乗って動かし運転して行つてしまった。

一体どうした事なのだろう。  
おまわりさんに聞くと、



「え、まあ、本人もよく覚えてないらしいのですが……」  
と口が重い。

どうやら、こういう事らしい。

夕方当店へ車で買物にきて、歩いて帰った。夜になって車庫に車がないので、あわてて盗難届を出した。

運転してきたのだから、ボケてるはずはない。いや、まだらボケで誰も気がつかないのだろうか？ 見ていた従業員は、笑い出した。誰かが「高齢化社会って、こういう事？」と言ったので、皆、シュンとしてしまった。

それにしても、もう当店に買物に来ないだろう。ああ、一人お客を減らした。

(え・弘法堂蔵二)



笑える！

# ズバリ一言

## こんなボロ宿、あるの？！

長野県小県郡 花岡京子（51歳）

旅行に行くなら温泉宿で、精神的にも肉体的にも解放され明日への英気を養うための旅が、本来であると思っていた。それが今回の旅で、ことごとく碎き散らされストレスを抱えて家に帰る羽目となった。

今年の五月、連休を利用して一泊二日の富山滑川へ出掛けた。ほたるいか海上観光と、旬のほたるいかを食べに行く事が大きな目的であった。ほたるいかなの漁業は四月十五日から五月七日まで、限定商品の様に短い期間しかやっていない。滑川の海面は国の特別天然記念物に指定されている。早朝の滑川漁港を出港し、定置網でのほたるいか漁を観光船から見た時の、あの幻想的にきらめく不思議な光の群れは怪しくも美しかった。これを見たいのが、観光協会へ宿の申し込みをしたのだが、宿は観光船と関連しているらしく、数軒ある宿の内の残り一軒を紹介してくれた（申し込みが、おそかった）。

上信越高速道路が新潟県まで開通したので、富山に入ったのは家を出て二時間を過ぎた位で海が見え出した。なにしろ海から一番遠い県は長野県であるので、海を見ただけで何か感動して嬉しくなってしまう。ほたるいかミュージアムや、かまぼこ工場、銅製

品などを見た後宿に入った。私達にしては随分早い時間に着いたのだ。

宿の外観は「少し古い建物」だ、と思った位であるが一歩中に入ったら：。不快感が押し寄せてきた。部屋に案内され入ったら、掃除してあるの？と思ってしまう数々。部屋のカーテンは、白だったんだろうが今は茶色で、レースの間はホコリが詰まっている。窓枠はホコリの山。壁は雨もりでボコボコ。まあ、お風呂に入ろうと行くと、中庭には水琴窟があるのに、秋の落葉で埋もれている。お風呂のドアを開けた。

「あつ」

と、言葉を飲んでしまった。床は汚れていてスリッパを脱ぎたくない。脱衣かごは、これまたホコリだらけ。服を脱ぐのもいやだったがとりあえず入ると、風呂の天井は穴が空いている。シャンプーもない。後で夫に聞いたことには、男湯は天井の中央が下り、逆ドーム状で、いつ落ちてくるかわからない状態なので、その天井を四本の鉄

棒で押さえてあったらしい。夕食は広間へ案内されたが、畳はグリーンのスプレーがしてあり、これまた壁はボコボコ。もう早くねた方がいい。廊下の先の一つあるトイレ（男女兼用）に行き布団に入ったが、私はホコリの為か、くしゃみと鼻水で一晩中ねた気がしなかった。夫はというと、俺のねた所に砂がこぼれてくると言うので良く見ていると、天井から少しずつ土が落ちていく。朝食は、カウスターバーの足の長いイスで両目玉焼きが主の朝食も初めての経験だった。せっかく海のそばなのに、海のものがない朝食も珍しかった。長居は無用だ。早く出発した方がいい。支払った料金は、税別一人一万二千円。この宿でこの金額はサギとも思える。

富山から帰って数日たつても、何か釈然としない。宿を紹介してくれた観光協会へ思いきって電話を試みた。電話に出たのは若い男性らしい声であった。その男性の言うことには、「この旅館については、年に数件こう

いった電話を頂きます。旅館を見に行き指導などするのですが、なんせ古い建物なもので……そうかといって、私達が建替えろとは言えませんし……」と、返事が返ってきた。私と同じ思いの人がやはりいたのだ。しかし、命あってあの宿から帰って来れたのが幸運にさえ思える。しかし、今でも夢の中の出来事の様だ。

## 産廃問題

### 二十五年目の決着

香川県小豆郡 広瀬サカエ

豊島（てしま）は、瀬戸内海に浮かぶ周囲二十キロ、面積およそ十五平方キロ、東京都の豊島区とはほぼ同じ広さであり、人口約千五百人の小島である。

白砂青松の豊島に、ある日突然、都会のゴミがやってきた。

一九七五年に事業者Mが有害廃棄物の処理場建設計画をあきらかにした時点から、いずれは取り返しのつかないことになることを恐れて、住民が香川県に反対の要請、陳情を繰り返した。Mが札付きの無法者だったからである。

Mは県の許可を得ると、土壤改良財貨事業と偽って十三年間、シュレッダダグダスト（自動車を粉砕し、鉄を取り除いたかす）、ダイオキシン、PCBなどの有害物質を含んだ産廃を運び込み、不法の限りを尽くした。

その間、多くの住民が漁場を失い、健康を冒された。豊島住民がその不法ぶりをいくら訴えても聞く耳持たなかった香川県は、兵庫県警に摘発されるまで不法投棄を見逃し続けた。しかも摘発後、三年たつても香川県は何もしようとしなかった。

豊島住民は公害調停を申請して、中坊公平氏に豊島の公害調停の弁護を依頼した。中坊氏を団長とする十四名の弁護団は、無報酬で弁護を引き受け

た。

中坊氏は言う。

「日本には、泣き寝入りの構図が多すぎる。それをなんとかしたい。助けたかった。豊島もそうやった」

二〇〇〇年六月六日、国の公害等調整委員会は香川県と豊島住民双方が県の謝罪などを盛り込んだ最終合意文書に調印。国内最大級の産廃不法投棄事



## 産廃不法投棄 瀬戸の島



件は四半世紀ぶりに決着をみた。

「住民のみなさまに長期にわたり不安と苦痛を与えたことを認め、お詫び致します」と深々と頭を下げた知事は、処理業者に許可を与えた知事からは三代目である。

香川県は業者に対して監督責任を怠ったことを認め、公費で産廃を完全撤去するという調停に合意したのだ

が、その総事業費は、しめて三百億円。

時の橋本首相が国の支援を表明、菅厚相も現地視察をした。国際環境保護団体グリーンピースも再度やってきた。それでも解決には結びつかなかった。

豊島住民は「行政に頼ってはいかん、県民に訴えんといかん」と住民運動を展開しだした。「ボロの宣伝

カーに乗って、くる日もくる日も出掛けて行って、香川県内百カ所で座談会を開いた。聞いてくれる人が二人しかおらん会場もあった。住民の訴えが世論となり紛争が解決した」と中坊氏は言う。

産廃の撤去はこれから始まる。五十万トンの産廃とは大型トラック五十万台分である。

県は三年かけて直島に中間処理施設を建設、産廃を処理して無害化するプラントで、豊島の産廃の完全撤去が終わるのは十六年後だという。産廃を搬出する豊島も、受け入れ側の直島にも難しい課題はたくさんあるだろう。

多くの都会人にとってゴミ問題は、目の前からゴミが消えたら終わりかも知れないが、そのゴミは排出した現場から、遠く離れた過疎地や離島に押し付けられ、そこに住む人々の健康と生活を脅かしているのである。

ともあれ行政責任を問うのが、非常に困難なわが国にあって、県の責任が明確化して、産廃の完全撤去が確約さ

れたのは非常に珍しいケースだという。

## ゴミに飲み込まれるぞ！

東京都練馬区 井上暁子（40歳）

「あんたたち、ばっかじゃないの!」  
その新聞記事を読んだとき、私は思わず大声をあげていた。それは六月八日（木）の朝日新聞、第二社会面。透明キャップ付の缶コーヒーが若い女性に売れている、というものだ。お茶のイメージがつよいI社が、缶コーヒーの国内シェアに喰い込むため、「コーヒー好きな中年男性」を購買層に想定して、豆を多く使い、透明キャップを付けて高級感を出し、一缶二百円で売り出した。ところが、想定した購買層ではなく、「過剰なまでに不潔感を嫌う若い女性層」に売れているのだとい

う。

ある主婦（三十二歳）は、ふつうの缶飲料を買うと、飲み口を必ずハンカチでふく習慣があり、「工場から自販機に入るまで誰が触ったか分からないから、そのまま口をつけるのは嫌。キャップがあるのはうれしい」

また、あるOL（二十八歳）は、「飲み口がゴミで汚れていたことがあって、それ以来、コンビニで缶ジュースを買うときもストローをもらう。もっとこういう商品があったらいい」だと。ばっかじゃないの!

そんなに人が触ったのが気になるんなら、家から水筒持っていくりゃいいじゃないの、缶飲料を買うと、その缶はゴミになるんだよ。その上わざわざ、キャップやストローまで付けてもらって、自分一人が「清潔に」食事できれば、あとのゴミのことはどうでもいいの。もういいかげんにしてよ!

メーカーの方も、その所はどう考えているのだろうか。缶はリサイクルされるとしても、このキャップはどう

なるの。材質の一部はリサイクルされたペットボトルだそうだけど、それを作るのにもエネルギーがかかるし、捨てればまたゴミになるんでしょ。大きな企業は、社会に対してもっと責任を持った考え方をしてもらいたい。

この春から私の住んでいる地域では、ゴミの分別が細かくなった。こんなに細かくしてみんな守れるのかなあと思ってはいたけど、一部の人を除いてきちんと分別して出している。日本のゴミ問題は、家庭の個々人がチマチマ涙ぐましく努力して、かろうじて水際で喰い止めてるって印象だ。よく言われる「買物袋を持参しよう」ってヤツも、もちろんそれも大切なことではあるけれど、問題はそんなところではないだろう、と言いたい。どこかの地方の市長さんとか町長さんだが、わが町は買物袋持参運動やってます！と、胸をはってここに写真におさまっているのを見たりすると、あんた自分で一カ月ゴミ出してごらんよ、買物袋で片付く問題かよ、と言ってやり

たくなる。

コンビニや大きな飲料メーカーが、ストローついたりフタついたりして「清潔志向」の消費者のご機嫌を取ることで日本の経済が成り立っているのだとしたら、ゴミの濁流は、水際でその流れを必死に喰い止める小さな努力など押し流し、やがて日本はゴミに飲み込まれてしまうことだろう。

## 豚に真珠

川崎市中原区 島 初美 (58歳)

ある日、区役所に出かけたとき、書類の受け渡しのカウンターの側に、今まではなかった大きな水槽が置いてあって、中に一匹の大きなアロアナが泳いでいた。目をぎよろぎよろさせながら、緑の水草も美しい水槽の中を、飽きもせず、いつまでもゆらゆら、く

るくる回っている。

突然三、四歳の男の子が、走って来て、「ねえ、お母さん、これおかしいよ、本物じゃないよ、テレビだよ」と言う。あつ、そうかと私も気がついた。両側から盛んに出ている酸素のあぶくも見せかけで、実際は水の外側にある。男の子が言わなかったら、気が付かないところだった。きれいな熱帯魚ならよくテレビになってるのを見かけるが、不気味なアロアナだったので、だまされてしまっていた。

こんな小さな子でも、本物でないものは見抜くんだなと感心していたが、くやしいのは少し離れた所にいたその子の母親の態度である。無関心もいいところで、男の子が何度も叫んでいるのに、しらんぷりで、いつまでも返事をしてやらない。たまりかねて、その子が私の近くに來た時、「僕、よく気がついたね。あれは本当にテレビだよ」とほめてやった。男の子は驚いて、私の顔を見つめた。

あんな利口な子を持ちながら、母親



はその有り難みに気が付かない。「豚に真珠」である。幼いわが子が新しいことを発見したとき、その場においてやれるのは母親ではないか。どうして一緒に感動してやれないのかと、私は勝手にくやしがついていた。

とうとう母親は一度も返事をしてや

らず、水槽を見ることもなく、子供の手を引いてさっさと出て行った。私は母親が、その日は特別に考え事をしていたのだと思うことにした。男の子のことを、こんなに私が気にするのは、私が同じような年頃の孫を持つ身だからだと思う。



## 携帯電話

茨城県龍ヶ崎市 柴尾恵子（49歳）

十八歳の長女が自宅の近くで携帯電話を拾った。落とした人はさぞ困っているだろう。通信記録を見れば、持主がわかるかもしれないという。通信記録というのは、拾ったからといって見ても良いものだろうか。連絡がとれたとき、落とし主がその事をどう思うか不安にもなった。やはり交番に届けた方が良く私は思った。

長女は交番に届けに行ったが、パトロール中で誰もいなかった。どうしようとして私に電話してきた。交番のカウンターの上に『御用の方はこの電話を使って連絡してください』と書かれたプレートと専用の電話がおいてあると言う。それでは、かけてみてごらんと

電話を切った。

帰宅した長女の話によると電話にでたのは女性で、そんな事を言われても困る、警察署に届けて欲しいと回答したそう。それも上司らしき人と相談しながらだったとの事だ。警察署までは車で十五分程かかる。無理な話である。仕方なく長女は携帯電話を持ち帰った。

二時間程後、再度交番へ行くと「お金ではないので、お礼はありませんよ」と言われた。お礼の事等、長女も

私も考えてもいなかった。世の中、お礼が無ければ落とし物も届けないものなのだろうか。

その晩、七時頃、電話の持ち主からお礼の電話が入り、この件は終わった。若い女性のようにだった。

それから十六日後のこと、高一の長男が携帯電話をなくした。まだ高校に入学して一カ月程で、その日は九時を過ぎて帰宅し、とても疲れた様子であった。食卓についた彼の前に夕食を用意したが今日はいいと言う。食べて

きたならいいけれど、食べないときは電話してねと言うと、うんと返事をし入室へ入っていった。一時間程して、

「お母さん、僕、携帯なくしたんだ」と言う。学校を出る時にはポケットにあった携帯電話がない事に気付く、土浦駅と学校の間を真暗な中で二往復して探していたので遅くなったのだ。帰宅していた夫に「携帯電話をなくすというのはどういう事かわかっているのか」と叱られて、だからどうすればいいか、携帯電話の説明書を読んでい



た。自分の携帯電話はもうすでに誰かに拾われて、話し中の音が聞こえてい  
ると言う。それで疲れた様子で顔色も  
悪く、夕食ものを通らなかつたのだ。  
夫も慌てて説明書を調べて電話会社  
に連絡し、使用できない設定をしても  
らった。

長男は、

「少しは使ってみたかもしれないけれ  
ど、お姉ちゃんだって届けたのだから  
明日になればきっと届けてくれるよ  
ね」

と希望的観測を述べるが、私は届けて  
もらえない気がした。届けようとする  
意志があるのなら記録に残るような行  
為はしないだろう。

三日経っても何の連絡もなく、長男  
にこちらから交番に届けた方がよいと  
言った。翌日長男はニコニコして、と  
てもいいおまわりさんだったと帰って  
きた。大学へ行くのかと聞かれたの  
で、そのつもりだと言うと、勉強して  
警察官になれ。図書券をかけてマー  
ジヤンをしていても給料がもらえるし、

福利厚生も手厚く、恩給もつくんだっ  
てと話す。そんな雰囲気のおまわりさ  
んだつたので、長男が携帯を一カ月も  
使用せずになくした事にも同情してく  
れ、楽しく会話をしてきたらしい。悪  
いとは言わないが、高校一年生にする  
話にしては皮肉すぎるし、警察の中の  
複雑さを覗いたような気がした。

一カ月過ぎてもやはり電話は戻ら  
ず、同じ機種、番号でつくり直しをし  
た。心配していた料金はオーバーする  
事なく基本料金内で納まっていた。な  
くした携帯電話には自分だけの着メロ  
や、プライベートな情報がたくさん入  
力してあった。

届けてくれると信じていた長男、一  
生懸命落とし主に戻してあげたいと  
思った長女。二人とも、人の心にも警  
察にも大きな信頼を寄せている。

世の中で善意や信頼は必ずしも通じ  
ないけれど、その心はずっと持ち続け  
て欲しいと、今回の出来事を通して感  
じたのである。

(え・梅村 著)

お友達に「わいふ」を  
おすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださ  
った方には、次のように購読期間を延  
長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださ  
るごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレ  
ゼントにお使いください

●結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠  
方のお友達とのコミュニケーション  
にどうぞ。お申し込みいただければ、  
新読者に、贈り主のお名前とプレ  
ゼントのおしらせを同封の上、一年分、  
計六回送本いたします。

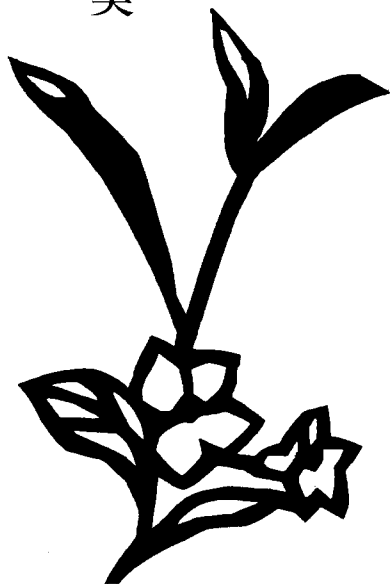
●その場合も定期購読者のご紹介の場  
合同様に、お一人につき一号分延  
長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引  
がございます。

# 母の病氣

東京都新宿区

林 直美



朝起きると、昨日の天気とはうってかわって、どんよりと暗い空から雨が降っていた。雨は音もなく静かに降っていて、涙のようにも思われた。あまりいい気持ちがないまま、受け付け時間に遅れないように、母の検査フィルムや紹介状が入ったケースをかかえて、私は病院へ急いだ。

外来で事情を説明し、廊下でひたすら待つ。順番がきて、母の名前が呼ばれた。私は返事をして、診察室のドアを開けた。いかにも外科医という雰囲気

気の医者がいて、母のレントゲン写真を見ていた。机の上には、書類やらカルテ、伝票などが置いてあった。その一番上に母の病状を記載した紹介状が、無造作に広げられていた。私は思わず、それをのぞき込むようにして見た。英語で書かれていた診断名が、私にははっきりと理解できた。癌だった。

「癌、ですね」

その瞬間、目の前の医者が、母のフィルムを見ながらそう言った。私の

頭の中で、癌という言葉がこだまするように響いて聞こえた。

「一応、進行性の大腸癌です。この紹介状を書かれた先生も進行性と診断されていますね」

「……癌、ですか。あ、あの、先生、母は告知を希望しているんですが……」

医者は写真から目を離し、私を見た。

「……そうですね、告知は、あまりすすめてはいません。大学病院なんかで

も、まだまだね、積極的にはすすめてはいないんですよ。ご家族の方とよく話し合って決めて下さい」

「はあ……」

できれば内視鏡でという希望も打ち砕かれ、母の手術が確定し、その場で日程を決めることにした。

「お母さんの都合はいいんですか？」

「はい、承知しています」

「うーん……。年内ならもうこの日しかあいていないですね。そうね、まあ、二カ月くらい遅くなっても、今の状態にあまり変化はないと思うけど、あなたの気持ちからすると、少しでも早い方がいいよね」

「はい、もちろんです」

「そうすると、お正月は病院ということになるけど、かまわないの？」

「ええ、いいです。よろしくお願いします」

その場でその日しかないという十二月十七日に手術を決めた。それにあわせて、八日に入院することも決めた。

病院を出ると、雨はやんでいた。ひとまず駅へ向かった。ホームで電車を待つ間、涙がにじんできた。

母が癌だなんて。癌と言われた父が、わずか五カ月で亡くなって、ついこの間、一年の法要をすませたばかりである。母もまた、あんなふうに闘病生活を送って、死んでしまうのだろうか。ホームに進入してきた電車の風で涙を吹き飛ばし、私は電車に乗った。

何て言おうか。転移を調べるための検査が待っている以上、癌であることは言わざるをえない。母は私に、真実だけを伝えてほしいと、何度も何度も念を押した。たとえ、余命が三カ月であつたとしても、正直に医者言葉を教えてほしいと繰り返した。

母なら大丈夫だろう。ショックは受けても、母だったら有義に自分の人生を過ごしてくれるはずである。嘘は必ずばれる。もし、私が隠していたことが母にわかったなら、私を信じてくれている母がどんなに悲しむだろう。自分が癌であることよりも、私に嘘を

つかれたということの方が、母にうれしい思いをさせるかもしれない。私には隠せない。

母は今まで病気一つしたことのない、とても元気な健康な人だった。もう二十年も前になるが、一度自転車ごとどぶへ突っ込んで、上顎骨を骨折し、前歯を八本折ったことがある。かなり出血もあつたのだが、意識もなくならず、血圧もどうもなく診察した医師が驚いていた。その時、母は睡眠不足だったが、自分の健康を過信していたらしい。以後、前にもまして気をつけるようになり、母はいつそう元氣になつてしまった。

その母に比べると、父は高血圧、アトピー性皮膚炎、胃潰瘍、糖尿病とたえまなくわずらっている感じだった。体調不良をいつも口癖のように言っていた。病院へ定期的に受診していたわりには自己治療をする人で、結局大きい胃癌を持っていたのに発見が遅れ、医師の宣告通り、手術後三カ月余りで

父は他界した。

その後元氣だった母が、健康診断を受けたとき、便に潜血があると指摘されたのである。

血液検査をはじめとして、胃カメラや腹部の超音波、脳ドックというもので受けた後の、最後の最後に、便検査でひっかかってしまった。親しい友人と何人かで受けた健康診断だったが、便まで調べているのは自分だけだと、母は得意そうに話していた。結局、大腸のカメラの検査とバリウムによる検査の結果、位置的にも大ききなものにも、内視鏡ではどうにもならず手術

をすることになった。

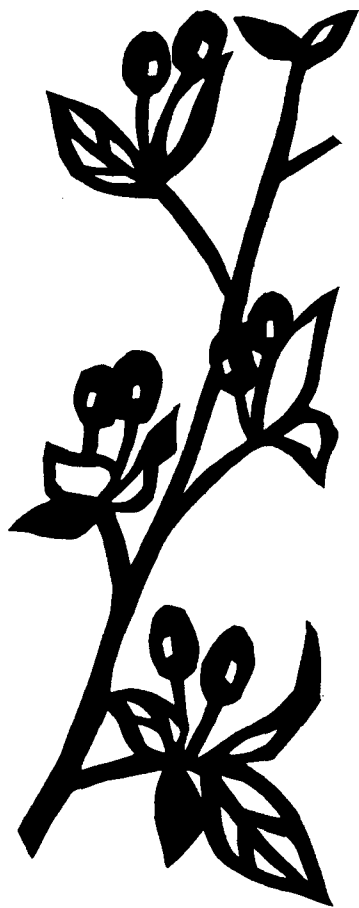
どちらかというと体質的に父に似ている私は、最後の姿が父と重なり、あまり健康には過ごせそうにない気がしていた。それでもし私が寝込んだら、おそらくその頃も元氣でしゃきしゃき活動しているだろう母に、私の看病をしてもらいたいと考えていて、母も冗談でしょと言いつつ、了解してくれた。病院で寝ている私は、この親不孝者と文句を言われながらも、よく気が付く母に痒いところに手が届くような、手厚い看護をしてもらえらるだろうと、母と二人で笑ったりしたものだった。

た。それがまさかこんなことになるうとは夢にも思わなかった。父の一年忌の法要が終わって落ちついたばかりの時に、まさに寝耳に水のような、衝撃を受けた。

母は夜行バスで上京してきた。いつもとんなら変わることはない、明るい元氣な母だった。すでに電話で癌であることを話していたが、母はわずかな期間で驚くほど客観的に、自分の中で気持ちの整理をつけてやって来た。私はあらためて母の精神力に感服した。

父が亡くなった今も、六十五歳になる母は一人で徳島に住んでいる。友人には恵まれているが、息子は福井県で、娘の私は東京である。結局、母が子供にはできるだけ迷惑をかけたくないという思いから、東京の病院で手術を受ける決心をしてくれた。もちろん回復後は徳島へ帰る予定である。

去年の父の看病には母がいた。私もまだ幼稚園だった一人息子を連れて、夫には申し訳なかったが、徳島にたび



たび帰った。最後の一月月には、兄が有給休暇を使い果たす覚悟で、徳島にいて母の援助をしてくれた。すべては母が決断し、母を中心にまわっていた。今度はその母が病人で、兄にも私にもそれぞれ家族がある。誰がするにしても、付きっきりですつと世話をするとすることはなかなか難しい。そして今回も母が決断してくれたのである。

母は進行性の大腸癌であったが、自覚症状も何もない段階で見つかったので、見た目には健康そのものだった。母は自分のおかれた状況を冷静に判断していて、入院生活も自分なりに楽しくすごすように工夫していた。今回手術ができないと、順番があつて二カ月近く後になってしまうこともあり、母は自分の健康状態に細心の注意を払っていた。週末に外泊もできたのだが、風邪をひいては困ると外出もせず、ひたすら病院ですごし、呼吸の練習などを一生懸命にやっていた。母はいつも前向きに過ごしていた。そして私はか

つて息子を出産した病院へせつせと通った。

小学校一年の子供がいる私にとって、母が東京へ来てくれたことは何よりも有り難かった。私の夫にしても、私が徳島へ頻繁に帰ることを考えれば、母の上京に反対する理由は何もない。退院後しばらくは一緒に生活することになるだろうが、夫は協力は惜しまないと言ってくれた（もつとも、母も夫が優しい人なので上京という選択をしたのだろうが）。手術前夜には福井から兄も来てくれた。兄にも中学生と小学五年生の子供がいるので、ひتماず義姉は福井に残った。

母はすべてを理解してくれていた。

予定通り母は手術を受けた。

徳島では大きい病院であつても、手術後などは家族が泊まり込みで世話をすることになっている。義務付けられているわけではないのだろうが、家族あるいは家政婦をつけたりして、誰かしら付き添っているということが当然という雰囲気だった。

しかし、都会の大きい病院ではそういうことがほとんどない。たとえ手術後であっても、面会時間という決められた時間にしか会うことができない。少なくともよほどのことがない限り、泊まり込むということにはなかった。

数日後、私は洗濯物をあずかり、面会を終えて病院を出た。家に帰る電車の中で、風変わりな手遊びをしている小学校一、二年くらいの数人の男の子を見かけた。それぞれにあげないかわい顔をしていて、ゲームに興じる子供よりもずっと健康的で、見ている私の方がとても楽しい気持ちになった。電車を降りたら風もなく、いかにも穏やかな暖かい午後だった。私は真冬の今が春になっていくような、とても穏やかな気分だった。

母は順調に回復している。もしかしたら、私の看病は無理でも、あと二十年、生きてくれるかもしれない。

(え・小林正子)

## 座談会 私も言いたい

# 公園育児って



出席者 柴尾恵子 高木飛鳥 山本洋子

司 会 田中喜美子

司会 大分前から「公園デビュー」なんていう言葉ができちゃって、流布していますよね。若いお母さんが家の中に子どもと二人で閉じこもっていることができないから、公園に連れて行って広い場所で子どもを遊ばせようと思う。そこにお母さん同士のつきあいの難しさがからんでくるので、とても悩む方もあるっていう話なんです。

今日は、皆さんにご自分の体験の中から話していただきたいと思います。

柴尾 私は第一子を産むときは、まだ公園デビューなんて言葉は知らなくて、七カ月まで共働きで働いて辞めたんです。

いざ赤ちゃんが生まれて、おっぱいを飲ませるとこまではよかったんですけど、離乳食を受け付けないタイプの子で悩んじゃって。お友達がいらないからどうしても育児書に頼って、「離乳が進まない」とか書いてあると本気にしちゃうんですよ。

どうしていいかわからなくて、赤ちゃんを抱いて公園に行ったら、同じ歳くらいの赤ちゃんをバギーに乗せたお母さんがいたんですよ。「実は離乳が進まないのよ」っ



ていうような話をしたら、「うちの子はものすごく食べるの。そんなに悩んでるんだったら、家に来ない？」ってそのままお昼に呼んでくださったんですよ。

司会 それ、初対面のとき？

柴尾 はい。そのお母さんの子には、おかゆみたいのが用意してあって、うちの子にはバナナをつぶしたのとカップヨーグルトを出してくださって。「まず食べるところを見せましょう」って、自分の子に食べさせ始めたんです。もうすごい食べるんですよ。こうやって乗り出して（テーブルに乗りそうにして見せながら）。その子がこうして食べるのを見て、うちの子も、口をモグモグやっていたんです。そのお母さんが「やってごらんさないよ、いやじゃなかったら」っていうんで、つぶしたバナナとヨーグルトをやったら、食べたんです。

司会 面白い話ねえ。

柴尾 もう、すごくうれしくて。うれしいというか安心していうか、人並みに育ったってほっとしたんですね。

司会 とてもいい公園での出会いだったわけね。

## 今どきの育児

高木 私は結婚してすぐに社宅に入って、十年間いたんですよ。一階だったんですけど、家の前がすでに公園状態なんです。砂場があって、ブランコがあって。

世帯数にしたら二十四軒くらいしかないんですけど、同世代の方が多くて子どもの数、多いんですよ。

公園に行かなくても、そこが公園というのがすごくありがたくって。でも、プライバシーはないんですよ。

司会 それはそうよね。一長一短ありね。



山本洋子さん

高木 先輩のお母様方もいっぱいいらっしゃるから、困ったときは何でも相談に乗ってくださいまし。でも、それもブラスマイナスの両面があって、逆におせっかいっていう方も出てくるし。

情報が多すぎて、例えば立つのが早いとか遅いとか、それも競争になるんですね。うちの子はありがたいことに、平均よりも早いほうだったけど。

でも、育児書とは常時にらめっこの状態でしたね。『家庭の医学』の育児欄で、何か月で何をすべきとか見て、そのときできていたらほっとして、できてなかったら寝返りなんか早くできるよう、わざと転がしてみたり。そういう焦りとは常時隣り合わせって感じはありましたね、一人目のときは。ちよつと大きくなってくると、ケンカも始まりますしね。親が出てくるとややこしいんですよ。子供にとっては集団で育つのはいいことだけれども、悩んできたことはすごく多かった。

司会 高木さんは公園育児というより、ずっと社宅の中の集団生活だったんですね。

高木 そうですね。杜宅の中で行き詰ったときは、子どもを連れて他の公園に出ようとするんですよ。でも、この公園はこのグループ、とかにもうなっちゃっていて、入れないんですよ。公園ジブシーっていうんですよ、そういうの。

司会 かわいそうに。

高木 たまにはいい方もいらっしやるんですよ。初対面で仲よくなったりする方もいるんですけども、やっぱりジブシーかな。居場所がちょっとないって感じ。

山本 私もやっぱり杜宅だったんですね。で、私は出ちゃった人なんです。大変ですよ、ほんとに気を遣って。

高木 村社会でね。

山本 クリスマスパーティやつても、全員呼ばないで三組だけ外すとか。「どうしてこの三人、外したの？」って聞くと、「あの人は幼稚園に入るときに私に許可をとらなかったから」とかね。

一同 えーっ。

司会 そういうホスみたいな人がいたわけ？

山本 いるんですよ。



柴尾恵子さん

司会 いやー、かわいいなあ。

山本 あその子は凶暴だからとか、いろんな理由があって外されるんですけどね。けっこうきれいな杜宅で、都心にあって広いし安いし、それでも私と同じようにみんな出ていくんで、やっぱりいろいろ大変なのかなーと思いますね。

楽しいこともたくさんあったんですけど、「私はやっぱりここにはいられない」って一番思ったのは、子どもの教育を自分の考えでできないってことでした。自分がこうしたいと思っても、みんなと合わせないで、一人だけみでるとパツンとたたかれて。パツンとやられると、子ども

もがかわいそうじゃないですか。いつも遊んでいるのに、自分だけ入れてもらえないとか。

幼稚園から帰ってくると制服のままでその辺で遊んでいるんですけど、そのまま遊びに行くと、みんなおうちまでついて行っちゃうじゃないですか。そうすると一人だけ「ごめんね、あなたはお母さんに来ていかどうか聞いてから来てちょうだい」とかって、ボタンってドアを閉められて、ぼんに残される子がいたりしていたんですよ。だから、一回わざと解散する。家に帰って、あらかじめ呼ばれている人だけが、今日は誰のうちって決まっているところにお菓子とか持って行くんですね。

### 公園育児の実態

柴尾 私、初めて専業主婦のお母さんになったわけなんです。ね、勤めていたから。専業主婦っていうのは、公園デビューしましてお友達になると、もう、一日中つきあうんですよ。朝「柴尾さー

ん」って呼びに来られたら、お昼も一緒、お使いも一緒。ダンナが出張しちゃうば、夕食も一緒に、お風呂も一緒に入ろうなんて話になるんです。

司会 えーっ。

柴尾 私、のろまんなんですわ、ご飯作るのも何やるのも。「柴尾さーん」って呼ばれたとき、家事がまだ終わってないんです。しょうがないから、家の中しっちゃかめっちゃかで行くんですけど、だんだんだんだん、疲れてきちゃった部分があったんですよ。

司会 そうよねえ。

柴尾 でも、みんなそんなの疲れないんですよ。みんなちゃんと主婦もやっておつきあいもして。のろまな私だけが家事がたまって、主人が帰ってくると、おむつ一緒にたたんでもらってたんですよ。

司会

高木さんのところもそんなことあった？

高木 皆さんがふとん干したら、見栄だけで慌ててふとん出して。無理しました。自分のペースと全然違うんだけど、合わせないといけないって。

司会 山本さんの社宅ではそういうのはなかった？

山本 いや、みんなそうでしたよ。

司会 そうすると、一人あるいは二人の子どもを連れて公園に行くと、親同士はずっと一緒にいるわけ？

高木 そうです、ずうっと。

司会 何という時間の無駄。

高木 だから親のほうにすぐく気を遣う。砂でもかけちゃったりしようものなら、「ダメダメダメ！」って感じで。

司会 そうなるわよね。



高木 ほんと、子ども同士もってケンカ

させたほうがいいなとか思いながら、子どもを無視しても親同士のつきあいのほうを優先させて、止めちゃう。

司会 そうなのよ。元気な子のお母さんのほうが気を遣うのよね。

柴尾 うちの子もすごい元気で、夏のビニールプールって、おうちでやりますよね。おとなしい子はお風呂みたいにつかっているだけなんですすよ。

司会 あっはっは。

柴尾 遊ぶとお顔にお水がかかるって言われて。

山本 冷や冷やしどおしですよ。

柴尾 もう、引きずり出して、裸のまんま連れて帰っちゃった日もありました。

高木 そう。だから子どもが悪いことしたから叱るよりも、体裁で怒ったこと、多かったですよ。最初の子どもって、人の目を気にして手を上げることもありますよね。

柴尾 叱らないと、あちらのお母さんの気が済まない。

高木 虐待一歩手前ですよ。

いつも一緒にホントに楽しい？

司会 朝からずっと集団行動で、それがつらくないらしい人が多いっていうのは、何だか私、どうも信じられない。一皮めくってみると、「私も本当は実はいやだったのよ」って我慢してることってない？

高木 つらい方は出ていきますよね。お家建てて出ていく方、多いですよ。

柴尾 そういうのが好きな人、多いんですよ。私は今、都市銀行のパートやってるんですけど、私のいた都市銀行は合併につく合併を重ねてきた銀行なので、それぞれの杜宅の人がいて、みんなに「どうしてこういう生活がいやなの？」って逆に聞かれちゃうんですよ。誰かのうちで一日過ごすことがどうして苦痛なのかわからないって。

自分のうちに来たときだけ、お昼も用意すればいい。あとは人のおうちで一緒に作って、子どもも食べて楽し。

結局、物量っていうんですか。やっぱり

経済力の豊かな方がいつも出しちゃうわけなんです。最近『婦人公論』で読んだんですけど、女性って物量に弱いらしいんですよ。物量に負けてこっちについた、なんてけっこう載っているから、ああ、そんなもんかなあ、って。

やっぱり主婦は一生懸命少ないお金でやりくりしてますから、もらえればうれしいし、そっちについて、うまくしのいでいくっていうのも、一つの女の知恵かなって。

高木 群れたがりますよね、主婦は。絶対群れで動いてますよね。

山本 そうですよ。

高木 結局、自分自身で考えなくてすむから、楽なんじゃないんですか？

山本 私、お母さんは寂しいんだと思うんです。私は杜宅のつきあい以外にいろんなところに出かけたりしているの、もう満たされているんですよ。杜宅に頼らなくても友達もたくさんいるし、グループもあるし。だから別に一匹狼でも耐えられるんだと思うんですけど、やっぱり、ずっと杜宅の家のなかになるとしたら、子どもと二

人って会話にもならないじゃないですか。司会 そうよ。

山本 いくら子どもが好きでも、二人で遊んで、ご飯も一人で作って、二人で食べて、すごく寂しいと思うんですね。これを共同でやると、三人で三人の子どもを見るのは楽なんですよ。

司会 例えば今日はAさんのうちに最小単位の子どもが集まって一人で三人見て、次の日は交代っていうふうにしたら、あとの日は自分がやりたいことできるわよね。

高木 ええ、でも、それだとお母さんが暇になっちゃうんですよ。

山本 そうなんです、お母さんも一緒に遊びたいんですよ。

高木 そうそう、お母さんがすることがなくなっちゃうから「私も一緒に」っていう感じになるんでしょうね。

司会 でも、することなくとも、ひっくり返って寝ていとかね。

高木 そうすると逆にね、気を遣っちゃう。

山本 罪悪感ですよ。

高木 なにかすごく悪いことしている気に

なるんです。

山本 子どもも預けて、寝ているっていうことはできないですよ。

高木 私って悪い母親？とか思っちゃう。

一人目の子のときはすごく感じましたね。

山本 私は子どもを預かるのはいやじやないの、よく「お子さんだけどうぞ」って声をかけると、必ずお母さんがついてきちゃうんですよ。「ああ、お母さんはいらない」と思うんですけどね。逆に子どもが呼ばれるときも、子どもだけかと思うと、「えー、帰っちゃうの」と言われて。

私は公園ジプシーしている中で、「ああ、ここにいちやダメだ」って思ったことがあるんです。

みんなグループで一緒に遊んでいるので、誰かが病気になるとうつつてしまうから困るんですね。一人の子どもがインフルエンザになったとき、ボスの人が「薬を飲みなさい」ってみんなに言うんですよ。まだ風邪もひいてないのに。

一同 えーっ。

山本 「二週間分もらってきたから、みんな飲みなさいよ、うつっちゃってるかもしれないから」って。

れないから」って。

司会 ばかみたい。(笑)

山本 私は「薬は副作用もあるから、まだ風邪引いていないからいらないわ」って、

一人だけ言ったんですよ。みんなしーんとしちゃって。

高木 偉い、偉い。私なら、もらっておいて捨てます。

一同 (大笑い)

山本 すごく気まずい雰囲気になったんですよ。でも、家に帰ると電話がじゃんじゃ鳴って、「よく言ってくれた」って。

私みたいに、ここがダメならあっち、って思える人ならいいですけど、その人にとつてそこしか居場所がなくて、反発して明日から行く場所がなくなると思うと、仕方ないのかなって。

高木 自分をさらけ出さないと、ほとんどの友達になれないですよ。今、子ども同士も気を遣っているから。ほんとに言いたいことってケンカして、相手のお腹の中わかって、それで人間同士ね、裸のつきあいしていくのが私は好ましいと思っているんですけど。でも、往々にして、そういうお

母さん、少ないですよ。

柴尾 一回しくじっちゃったら、パーだよ。

高木 だから、全部言てないからじゃない？ 誠意込めて、本心全部言っちゃえば、わかってくれる方がでてる。中途半端に断片だけ言ってもわからないから、わかってもらえるまでとことん言わないといけないなあって。

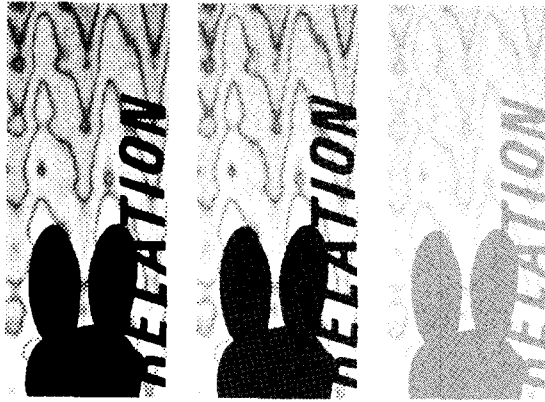
司会 でもやっぱりあなただって、お薬もらって捨てるほうなんでしょう。

高木 今は言えますよ。でも、社宅時代だったからって、黙って捨ててる。やっぱり子どもがいるから、はねのけられたら困る、っていうのは一番に頭にありますよね。

## 仲間外れになる

柴尾 私が仲間外れになっていった過程なんですけどね。やっぱりボス的な方がいらして、お医者様の奥さんだったんですけど、その子どもが結膜炎になったんです。

私、中学三年生のときに、流行性結膜炎っていうものすごい大変な結膜炎になっちゃったんですよ。リンパ腺ははれるわ、視力も低下するわで、中三の夏休みですから、非常につらい体験だったんです。やっと治したものですから、結膜炎に対しては、恐怖感があった。



病気の間は、こういうべったりした生活を少し控えない気持ちもあつたんです。だけれど、言えなかったの。その子と遊んでいうちの子がうつっちゃって、私にもうつっちゃって。

私は「三人で一緒にお医者さんに行つて、早く治そう」って言ったんですけど、それが彼女の逆鱗に触れちゃったらしんです。そのときに、そのボスの人は「だまっていれば、だんなが適当にカルテを書いて、薬なんかただで持ってくる。病気は医者が治すんじゃない、薬が治すんだ。そんなことで騒ぐんじゃない」っていうようなことを言ったんですよ。私、そういう仕組みなんて知らないし、結膜炎になっちゃったら、お医者に行つて治すしかないって思っていて。騒いだ覚えはないんです。

ただ、下地としては、私がもう、こういうべったりのおつきあいに耐えられなくなつてたっていうのはあつたんですね。

司会 普通は耐えられないと思うけどねえ。

柴尾 それから、お昼ご飯一緒に食べよう

の誘いもないし、十時頃になつて電話もかかつてこなければ、誰も呼んでくれない。

年長のお母様に「子どもも仲間外れにされるのかしら」って相談したら、「それはしないわよ」って言つてたんですけど、しつかりします。うちの子が寄つていくと、子どもたちがさうして向こうに行っちゃうんです。もう私、つらくて。ここまでするんだなあって。

これは、私が悪いんだ、私の人づきあいの下手さがこういうことになつちゃったと思つて、公園ジブシーっていうんですか、一生懸命いろんな公園に出て、またそこで開業医の奥さんのお友達ができた。

やつぱり彼女とおつきあいは、距離があるっていうのかな。同じマンションではなかったの、なにをやつてるかまで見えない。電話かかつてきて、「行つていい？」ってワンクッションあつたので、すぐくスムーズで、今もおつきあひしてます。

高木 私の場合、幼稚園の役員になつたときに攻撃が始まつて。そのときの役員っていうのが、一軒家の地元の方にしか来ない

名譽職のような時代だったんですね。二人目が幼稚園に入ったときに、その話が来たんですけど、ボス的な先輩達は「お話し来たら引き受けてもいいわよ」って言いながら、やっぱり悔しかったんでしょね。

だから、ほんと、ある家が車買ったり、なにか大きなもの買ったりしたら、羨望の的。嫌みを言われたり、ずきずきすることはいっぱいあつて。

その役員のときは私、体壊しましたもの。瘦せるわ、腎臓は患うわ。でも、気づいてらっしゃらないですよ、ね、ちくちくおっしゃる方は。言われるほうは、すごくこたえているんだけど、言う方は、「高木さん、体大丈夫？」って。あなたのためにこうなっているのに、何が大丈夫なのって。

## イジメの問題点

**柴尾** 私は仲間外れにされた経験があるのでしよう。だから思うんですけど、春菜ちゃん事件で、あのお母さんは、山田さんを仲

間外れにしてやろうとか意識してやってたんじゃないと思うんですよ。気がつかないでやっていたことが、すごく山田さんを傷つけたと思うんですよ。気がついてやるほど、絶対悪い人じゃないはずですよ。

**高木** 「虐待するお母さんも被害者なんだ」っていうフレーズがありましたけど、そうなんですよ。しているほうも気づかずに、自分がうっぶんだまっているからはけ口を向けちゃっただけで、悪気があつてやつてる方はいないと思うんですよ。

**司会** お母さんが暇すぎるのよね。あまりに時間がありすぎると、子どもとつきあいのことだけに関心が行ってしまっている。

**柴尾** 私は我孫子のマンションで子どもを保育園に一年通わせたんですけど、まあ、もったいないことしたなあ、って。保育園の人間関係が素晴らしかったから。保育園のお母さん達っていうのは、まず、忙しい。だから、相手にたいしてすごく思いやりがある。それからいろんな方がいるんです。母子家庭の方とか。夜も仕事があるから、入ったばかりの私に預かって欲し

いっていうことがありましてね、収入はある方なんです。自分も役に立ってあげられるってことで、私も充足感がありましたし。だから、春菜ちゃんの事件の山田さんも、あんなに悩んでいるんだったら、殺しちゃう勇気があるんだったら、打破して欲しかった。全然違う世界なんですよ。もうそんな悩まなくていいんです。今日はどうやって過ごしたらいいんだろう、なんて思わなくていいんです。保育園で子どもも、本当に楽しく過ごすし。

**山本** 私もその気持ち良くわかる。私は、あちこちの集団に属したって言いましてよね。それがすごくよかつたんじゃないかって思うんです。

上の子の幼稚園に行くと、けっこう受験する地域だったので、みんな悩んでいることは受験のことなんです。もう、朝から晩まで受験のこと。幼稚園だけのつきあいをしていたら、例えば早期教育をしなきゃいけないような気持ちになってきたりとか。

**高木** なるよね。

**山本** 公園のグループは逆に、「そんなのはいらないわよ」っていう感じで、全く価

値観が違う。

好きな人だけと作っているグループとかは、本音でガンガン言えて楽しいんですけど、でもいいとこだけにいても、勉強にならないじゃないですか。

司会 そうだね。

山本 もう子どもが育ったような年齢の高一ところにも入っていくんですよ。そうすると、大きくなったらこうなのよって聞かされて、あ、そうかと思って。

いろんなところに行くと、何かひとつの考え、こうじゃなければいけないっていうのが、なくなってくるんです。

高木 子どももそうですよ。一人っ子のときは、もうその子しか日が行かないけれど、二人になったとたんに、子ども同士兄弟で遊びますでしょう。それで親は、手もかかるけれども、気を抜けるようになりますよね。私なんか三人、四人できたら、うるさくなっていくんだけど、一人だけのときにたった一人だけの気分がなくなるんですよ。こう、分散するっていうの？ 適当に遊んでいたら大きくなりそうって感じて。

そういう気持ちを切り替えられる何かを持てないと、追いつめられちゃうんだと思う。子どももつらいですよ、お母さんと向き合ってばかりじゃ。

## 追いつめられないために

柴尾 公園に行けば、いいお友達もできます。ただ、子どもが小さいうちは、身近なところでもまずくのはつらいです。ほんとにつらいです。

だけど、失敗しちゃったら乗り越えられるしかなから、公園ジプシーと言われようが、自分の世界を持っていくてことがすごく大切なって思います。

子どもを通してのおつきあいはないっていう状況は、寂しいですよ。子どもを通してのお母さんの社会っていうんですか。そうじゃなくて、自分の世界をもっとお母さんが持っていたら、そういうゆがんだ形がなくなるような気がするんだけど。

山本 そうですね。一つのグループにいると、一つの価値観しかわからなくなってしまう。

まうから、世代も違ったり、興味も違ったり、環境も違ったりんなグループに入っていくこと。

あと、お母さんが、世の中の役に立つこととか、自分のやりたいこととかもう一つ、子どもと同じぐらい大切なことを持っていれば、子どもだけに集中しないで、いいんじゃないかなって思います。

高木 私は、それぞれが自分らしく自信を持って生きていたら、一番いいと思うんです。だから、どんどん自分の感性を磨く。自分はこういう考え方を持っていて、自分は自分なんだっていうことはつきりと持つこと。

まず第一に自分を大事にする、それが他人を大事にできることになっていくから。そのためには、いろんな本を読んだり、出かけていたり、いろんなことをして視野を広げて。自分を大事にすることから見えてくるのがいっぱいあるから、それを忘れないで、人に振り回されなくていいことを、若い方達に伝えていきたいと思います。

(え・Jasmine)

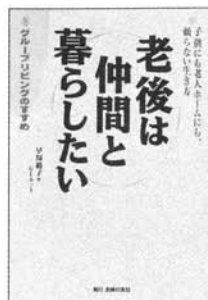


子供にも老人ホームにも、頼らない生き方

## 老後は仲間と暮らしたい グループリビングのすすめ

早川 裕子 著

GLネット



早川裕子+GLネット著  
主婦の友社  
本体1400円+税

生きていこうと願っている。仲間と暮らすことは楽しく有利であるが、また、「元気で仲よく」はキレイゴトじゃないですかの項目が示すように、高齢者たちのプライドや頑固さをも考慮に入れた、グループリビングの実例もある。

福島県 桜井淳子

年を取ったら、自由に生きたい。誰でも願うこと。その理想、実態、未来像を徹底的にレポートしたのがこの本である。

どのようにすれば、仲間と共に暮らすグループリビングに参加出来るのか、を実際に生活している人々を取材して具体的に述べてある。

さまざまなケースが書かれているが、それぞれが真剣に自分の老後を

みんな自分の居場所、生きる場所を探している。「下宿屋バンク」はそのような人々のニーズに込められている。これは、入居希望者と部屋提供者とのパイプ役。現代社会の人間関係が気薄になった今、新しい生き方を求めている高齢者に希望にかなった下宿を紹介する組織。斬新な企画である。

年を取っても、健康で元気な人々も大勢いる。そのような人達は、自由に仲間と楽しく暮らせる。だが、

病を得た時、共同体の中での終焉を自ら選んだ実例も述べられている。

青春時代を戦禍によって失い、一生一人で暮らし、老後をどうしようかと悩んでいる女性や、独身を余儀なくさせられた人々が集い、一戸建ての家を寄り添うように立て、自立心を持ち、仲間たちとの交流もある素晴らしいコレクティブハウスの例もある。

老後はどのようにして暮らしたらいいのだろうか。考えているうちにその時は来てしまう。

今から自分の老後は、しっかりと決めておきたい。

この本は、手探りで自分の老後はどう生きるか、また肉親との情愛や葛藤に、あるいは経済的な問題に悩んでいる人々の道標になるだろう。



# か い ま 見 た 中 国 の 家 庭

青木 千恵

去年の十一月、私は「大田区女性の海外視察」に参加した。三カ月半の研修の後「ふつうのおばさん」が訪れた中国。そのひとこまをつづてみた。

高層マンションが幾棟も並ぶ北京の住宅街。エレベーターに乗ったところ、隅に椅子に座っている女性がいる。行き先の階数のボタンを長い竹の棒で押して操作している。ほかのマンションでもそうだったとのことだが、一人分の給料を払ったほうが、修理代より安いとのこと、操作する人が配置されているんだって……？

許無惧先生は中国農業大学の教授、妻の謝郁さんは以前は産婦人科の女医さんであり、現在は朝陽区副区長。チャイムを押すと、許先生が迎えてくださる。

ドアを開けると玄関は日本のようにタタキにはなっていない。靴箱がありそこでスリッパと履き替えた。

部屋はマンション二戸分をぶち抜き一七〇㎡もあるとのこと。三ベッドルーム、リビング、ダイニング、トイレ兼洗面所二カ所、書斎、ウォーク・イン・クローゼット、シャワールーム兼洗濯室とひろいお宅に二人住ま

い。台所はそれほど広くなく、流しは小さいものが二槽、ガスも二口で日本の普通のお勝手といった感じだった。大型冷蔵庫や電子レンジはそういえばダイニングに置いてあった。

許先生はヨーロッパ暮らしの経験があるとされていた。部屋全体の雰囲気は違和感がなくゆったりとしており、インテリアも中国的なものだけではないので、近所の友人のお宅に伺ったというような気分だった。もちろん広さには感動したのだが……。

「妻はまだ仕事で六時半ごろ帰宅する。自分は毎日授業があるわけではな



「エプロンは私専用です」とおっしゃる許先生。奥様と台所で



大きな本棚がいつも並ぶ  
許先生の書斎

いので、今日は料理をしていました」とのこと。

リビングのテーブルのうえには小皿にナッツ類が用意されていて、お茶道具も日本の土瓶とお揃いの湯呑みで出してくださり、心遣いが伝わってきた。空気が乾燥しているので、このようなナッツ類を出しっ放しにしておいても湿気ることはないみたい。

先生の娘さんのことからお聞きする。一人っ子政策以前に生まれたので、二人の子どもがいる。教育方針は品格を高く持ち、勉強して成績をアップさせ、能力をつけ、いい職業に就くように、男性に負けないような独立能力をつけるように、小さいときから配慮した。長女は三十二歳で今、北京で医療機械の会社を営んでいる。二歳半の娘がいる。長女は航空会社勤務の夫より収入も地位も高い。次女は独身で三十歳、カナダにいて国際会計士をしている。

長女は結婚してから少しの間同居していたが、親のほうから親離れさせ

た。今はすぐそばのマンションに暮らしている。週末に孫をつれて遊びにくるのが楽しみ。中国では子どもは自分の子どもだけではなく社会の子どもなので、自活するように育てる、どここの家庭でもそうしているとのことだ。私も家族の写真や東京の最近の風景の写真を持参して話題を提供した。

六時を過ぎたころ奥さんが帰宅し、急ににぎやかになった。いままで先生が座っていた椅子が奥さんの場所になり、先生は台所へ行つてなんとエプロン姿になって登場。食事の準備をしていただいている間に奥さんと話をする。奥さんは以前産婦人科の医師をしており、今は副区長としてとても忙しい毎日をおくっている。休みの日は党の勉強会に出たりしなくてははいけない、と話してくれた。

先生から夕食の支度ができましたとの案内があり、席に着く。ディナーは、春雨サラダ、ほたるいかと豚バラ肉の煮物、太刀魚の煮物、ホウレン草と豆腐と椎茸の炒め煮、かぼちゃの煮

物、スープ、ご飯とご馳走。レストランでも感じたのだが、日本の中華料理店のようにつかえひつかえお皿を出してくれるのではなく、中国人の食事は食器はほとんど使わない。一人分が直径十二センチくらいの小さな小皿とご飯の茶碗、箸だけ。スープはご飯を食べ終わってからその茶碗に入れてくれた。味付けは醤油ベースでやわらかでくせがなく、とても美味しい。

中国では食材が豊富なためか、日本のように化学調味料でごまかすことがないので後味がよく、食後喉も乾かず、なるべく合成調味料を使わない暮らしをしている私にとっては、とても嬉しいものだった。炒め物の味がとてもよく、何かひと味違ふと話したら「秘密はね」と「花山椒」を見せてくれた。香りがとってもよく、炒め物によく使うと話してくれた。帰るときに小分けにしてお土産にいただてきた。「春雨サラダは私が出勤する前に作つたのよ」と奥さんが言っていた。「ご主人が海外へ行っているときの料理は

どうするの？」と聞くと、戸棚から何やら取り出して見せてくれたのが、何と即席ラーメン。とても美味しいと言っていた。中国の即席ラーメンはどんな味がするのかひとつもらつてくればよかった、ちよつと味見がしてみたかった。

楽しい食事が終わって、かたづけはご主人、奥さんはデザートのリングをむいてくれた。国光で、やはり旬のものなのでとてもおいしかった。中国は果物がとてもおいしい。

許先生にアンケート用紙に記入していただいている間に、奥さんから家の中を案内していただいた。許先生の書斎は壁一面二間<sup>けん</sup>くらいの幅で、本がびっしり天井まで詰まっていた。また、奥さんが以前来日したときの可愛い置物も飾ってあった。

飾り物は出発前の勉強会で教わったとおり、花瓶でも何でも二つずつお対で並んでいた。書斎の奥にお二人のベッドルームがあり、脇にあるウォーク・イン・クローゼットは許先生が設

計して作り付け、とても便利よと見せてくれた。天井からきちんと衣類が収まっていた。その前には健康器具の自転車置いてあり、奥さんの運動用で乗って見せてくれた。

九時半までの約束だった通訳の韓さんが帰った後は、英語、日本語、中国語が入り乱れての会話で、私たち二人は十時すぎにはリビングの奥にあるベッドルームにそれぞれ案内された。久し振りに個室で寝られた。ベッドカバーやシーツは洗濯したばかり、まぐらの上には故宮博物院のタオルをかけてあり細かい気遣いに感謝、感謝であ

る。

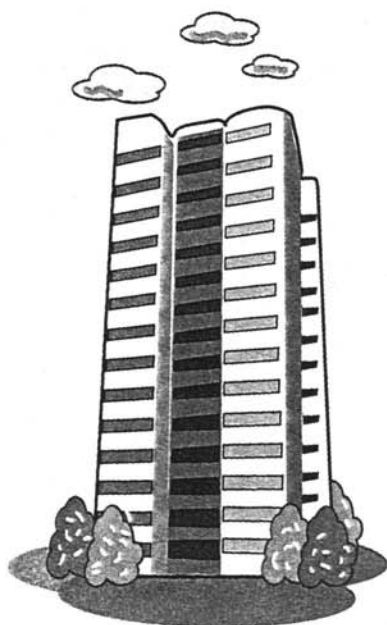
朝五時半から緊張のしどおしでもすごくハードな一日だったが、その分充実して日本への報告書をベッドの中で書き始めたが、どっと疲れが出て早々と寝てしまった。翌朝はまた暗いうちから目が覚めたが、よく眠れて快適だった。

今朝は通訳がいないので先生とはジャパニーズイングリッシュとチャイニーズイングリッシュ、奥さんには先生から中国語になおしてもらい、同じ漢字圏、筆談では話が通じた。

朝食も先生がつくってくださり、目

玉焼きに食パン……このパンがとっても美味しかった、牛乳、コーヒ、果物と至れり尽くせり。女性三人で先にいただく。先生は後からゆつくりと召し上がるのだそう。今日はこれから万里の長城へ向かうと言ったら、奥さんが飴とリンゴとチョコレートをくれた。まるで遠足みたい。

マンションの入り口で迎えるバスを待っている間、住民が出勤、通学のために出て行く。よく見ていると、小さな袋を片手に持って出てくる。この袋は「ごみ」で、片隅にあるリヤカー型のごみ箱に入れてから出掛けて行く。それにしても少ないごみの量だ。出てくる住民に怪訝そうに見られながらも、バスを待ちながらメモを片手に先生方と筆談する。別れ際奥さんがあなたと私は「姉妹」と書いてくださり、嬉しかった。社会的に立派なご夫婦なのに、私たちにとっても気遣っていただき、その暖かさや真摯な態度が印象に残った。



セクシュアル・ハラスメントのない世界へ

理解・対策・解決



財東京女性財団編  
大谷恭子・牟田和恵  
樹村みのり・池上英著  
有斐閣  
本体1000円＋税

セクハラについて不快感を感じてい

ても、少々のことは我慢している人（女性も男性も）は少なくないだろうが、そんな人にとって「誰も職場で不快な性的言動を我慢する必要はない」とは、なんと心強い言葉だろう。

この本は、職場や学校におけるセクハラを理解から対策・解決まで、最新の事件や判例をあげながらコミックも交えて分かりやすく解説してくれる。

今悩んでいる人には解決の方法を、そうでない人にも自分の持っている権利を知り、身を守る方法を示唆してくれることだろう。セクハラ問題で本来の目的を失うことのないように、全ての世代の人達に読んで欲しい。（T）

片づけられない女たち



サリ・ソルデン著  
ニキ・リンコ訳  
WAVE出版  
本体1600円＋税

身の回りを片づけられず、あらゆる

物事を順序立てて考えられず、それが極端で日常生活に支障を来た。そういう人は男女共にかなり目に付く。筆者はこれを脳機能の化学的欠陥による注意欠陥障害（ADD）だという。

男性は職業上も家庭的にも、細かい仕事をしないで済むため目立たないが、女性には整理整頓能力を要求される場合が多く、苦難を強いられる実状がある。

本書ではそうした女性たちが障害とどのように折り合い、充実した人生を送るかの手だてを示している。

しかしADDの経過と治療法・及び予後については精神医学書の記載とかなり異なるところがある。（十）

公立小学校でやってみよう英語

「総合的な学習の時間」にすすめる国際理解教育



吉村峰子著  
草土文化  
本体1700円＋税

英米の国語としての英語ではなく、

日本の文化を背負ったままで世界の共通語としての英語を話そう。

アメリカの大学院で言語教育を研究し、日本で青年海外協力隊の専任講師を務め、アフリカの国々でも生活してきた著者が、その活動の中で培った国際感覚をもとに、二〇〇二年から始まる小学校での「総合的な学習の時間」に英語を取り入れた国際理解教育を提案する。キーワードは自己尊重感。

その授業には、トイレットペーパー、象、難民、大陸といった今までの英語教育には見られないテーマが目白押し。我が子の通う小学校の先生にもぜひ、読んでもらいたい一冊です。（W）

## 私の意見・

## あなたの意見

## 世代間・ホンネの ぶつけあい

立場が変われば

東京都世田谷区 後藤 晶 (41歳)

夫の両親との付き合いで、私の心の中  
で乱反射することが多い。

つまりは子ども(孫)への接し方。  
たまにしか会わないからって、金やモ

ノを勝手に与え過ぎる。そうしなければ孫に好かれなと思うっている。見くびらないでほしい。

子どもは祖父母のことは、何もくれなくても大好きですよ。私たちは自分の親のことを折にふれ子どもに話すので、子どもも親の親を親しく感じ、好きになるのは自然なこと。それなのにおみやげやおこづかいを与えなければ、祖父母を忘れてしまうと心配らしい。

たぶん、三十年前ならこういうことはとがめられなかっただろう。付き合いで親類どうしが物や金を頻繁にやりとりしながら暮らしていたと思うし、その量もいまほど多くはなかっただろうから。

お金さえあれば安心で幸せだったのだろう。とくに自立した社会人の息子の家庭に金銭の援助は不要なのに、お金こそ愛情の証と思っている。お金を与えることで自分の満足が得られるのだろう。

また帰省時など、幼児にジュースな

どを欲しがるままに与えたのもとても気になった。とにかく孫に気に入られない、嫌われたくない。

「たまにだからいいだろう」と私には言うが、それではしつげができないと思った。

ところで最近、曾祖母は物忘れが多く義母が困惑しつつも世話をしている。わが家に来たときもふだんと違う場所なので、トイレに何度も行こうとする。私が「何回でも気の済むようにさせてあげれば。今日だけなんだから」と言うと義母は「そんな癖がついたら毎日が困る。連れていくのは私なのだから」

はっとした。

子供のしつげに「ただだから」と言われ、困っていた私が曾祖母のことになると「ただだから」と思ったのだ。赤ちゃんと老人は違うとは思うけど。今は「私は孫にも子どものように分別ある愛情を注ぐゾ」と思っているけど、案外ケロッと忘れてたりして。気をつけなくちゃ。

# ワーキングライフ

## 十日間のおつとめ

川崎市中原区 和田美代子

私が今迄通っていたヘルパー先のおばあさんが「介護5」に認定された。その家の人に、「続けてあなたに来てもらいたいよ」と言われたが、年齢制限にひっかかる私はこのお宅の活動を中止しなければならなくなった。とても残念だったが、これを機会にヘルパーをやめようと決心した。

折も折、このことを知ってか知らずにか、社会福祉協議会の方から、「ホームヘルパー養成研修を終えた人たちの、アンケートの集計を十日間ほどやってくれませんか」と頼まれ、「今後の勉強になるな」と思い、引受けることにした。

朝九時から夕方五時までで、場所は川崎の福祉センターとのこと。ここ数年、定年を迎えた夫と朝の時間をゆっくり過ごす習慣になっていた私にとっ

て、久しぶりのおつとめである。家から駅まで自転車十五分、電車に乗って二十分、終点川崎駅から徒歩十分、ラッシュアワーの通勤だ。ホームにはあふれんばかりの人、これらの人たちが来た満員電車に乗り込んだ。次の駅、またまたぎつしりの人が待っている。降りる人はほとんどない、のに、全員乗ってしまった。よくまあ詰め込めるもの……と感心する。いや、感心なんかしている場合ではない。私の身体は上半身とカバンと、下半身が別々の場所に存在していると思われる状況で終点まで運ばれる。こんな思い、十日間と限られているからいいが、毎日の人は本当にご苦勞様と思う。と同時に長年働いてくれた夫に、改めて感謝の念がわく。

やつと仕事場に着く。

「おじやまします。十日間ほどよろしく!」

と挨拶後、腰かけた場所はというと、まず目に入ったものは、ずらりと並んだコンピューターと書類の山、その間から老若男女の頭が、右往左往しているのが見える一角だった。そして私の机の上にもずつしりと川崎全市のアンケートの書類が積まれている。これらを項目ごとに「正」の字を書いてゆき、後に集計して表にまとめるのが私の仕事だ。

至って単純な作業なのだが、最後の質問の「今後のヘルパー研修への抱負」は、書かれている内容が





いろいろなので、これを読み取り各項目に当てはめる部分は、少々時間とヘルパー経験が必要だ。こういうところがコンピュータでは処理できないのかなあと思いつつも、機械に弱い私は内心ほっとする。それにしても同じことのくり返して、いささか参る。もう随分やった、と思って時計をみるとまだ十時前だったりして。思わず、「頑張れ！」と自分を励ました。

ここで気をとり直して、ちょっと考えた。

「今、やたら緊張してどんどんやっているが、これだけの量を十日間でやればいいのかから集計は後半二日でやって……などと配分して一日の仕事量を決めよう」

と、なつてからはやけに心が落ち着いてきた。そして自分の居る部屋のようにすや、人の動きなどを観察するゆとりまで出てきた。

ちよつと息抜きに部屋のムード紹介といこう。この部屋は「高齢者無料職業紹介所」と、「市民総ヘルパー大作戦研修室」の仕事所を十名ほどでやっている。そして、しょつちゅう電話が鳴っている。それぞれの電話の子機も同時に鳴るもんだから、さわがしさも倍増だ。若手の職員数名がインターネットをつかって交信中で、その音も加わつてハモつている。一方、入れ代わり立ち代わり人が訪れる。

「私の年齢で働ける所を紹介して下さい」

まだ若そうな紳士、会社のリストラにあい困っているとのこと。今、私のやっているアンケートの中にも「研修受講の動機」の欄に、ほとんどの人が「介護を仕事にしたい」と書いている。つくづく時代の流れを感じる。

お昼のチャイムが鳴った。同室の女の人たちにさそわれて近くのファミリーレストランに行く。方々から出てきたサラリーマンで大変な込みようだ。ランチタイム・サービスマニューとやらを選び、家庭では出ない話に花が咲く。楽しい休憩時間もあつという間だ。午後、睡魔と戦いつつの単純作業、結構きびしいものがあつたが何とかクリヤー。



こんな調子で第一日は終わった。何疲れだか知らないけど意外に疲れた頭で、夕食のメニューを考えながら帰途につく。ふっと、疲れて帰るご主人を、夕食を用意してやさしく迎える奥様の存在の重要さを再確認してしまう。

今迄私はホームヘルパーとして個人の家に行き、年をとってからの生き方を学び、今回思いがけず、高齢社会を迎えたお役所の風景を眺めることができた。

しかもその間の夫の協力ぶりも味わえて、此の度の十日間は私にとって、すばらしいプレゼントだったように思う。



健康双書

## 無意識の不健康

島田 彰夫 著



島田 彰夫著  
農山漁村文化協会  
定価1300円

東京都八王子市 和田好子

日本は世界一の長寿国である。乳幼児の死亡率もはなはだ低い。

しかしそれは数字の上だけだ……と、その内容、質的な問題を取り上げ、広い視野で考察を加えているのがこの本。

空前の健康ブームで、健康に関する情報はテレビ、新聞、雑誌と目白押しである。それを見てはさまざま健康法……生活習慣の改善から、

正体の知れない健康食品に至るまで真偽とり混ぜて試してみる、という人々が多数存在する。

ところが日本人の体は、年々質が落ちていっているのだそうだ。

背は確かに伸びているが、痩せ願望の一般化で女性の体格は貧弱になり、反対に食べすぎる人の生活習慣病も増え、若者の体力テストは次第に成績が悪くなっている。

乳製品を摂っているが骨折が増加しているし、便秘に悩み、清潔志向が行きすぎてバイキンへの抵抗力も落ちていいる。大学生の視力が平均〇・一八、正常は一・〇だというが以前は一・二だったはず。母親になっても乳の出の悪い人が多い、などなど、健康々と騒ぐわりにはよくない。むしろ悪くなっている

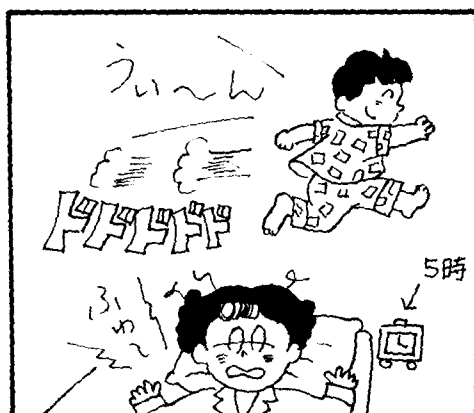
る実態が指摘される。

著者はこうした隠れた不健康を、「無意識の不健康」と呼んで、原因は生活の欧米化、近代化だと言っている。現代の日本人は日本という風土（自然環境）、日本人の体質、伝統的生活様式などをすべて忘れ、偏った欧米化を進めてきた。その結果、強健だった昔の日本人とは似ても似つかぬ、ひよわな人間になってしまったのだという。

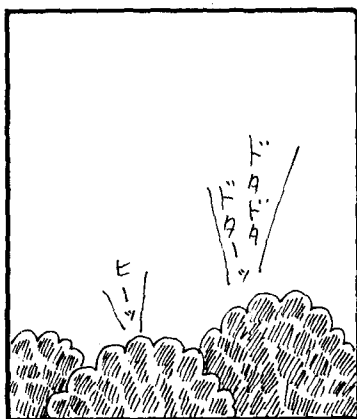
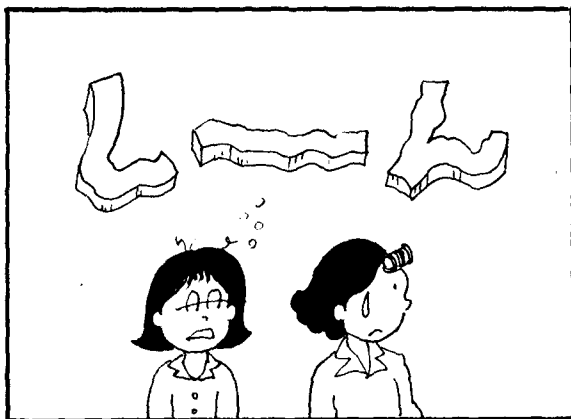
民族の未来が危ない、といってもよくいらぬ事態なのだが、著者は人間が生物であるという原点に帰り、日本人に適合した伝統的な食文化を大切に、もっと自然な生活をすべきだと提唱している。

新しい視点で、一見繁栄している日本社会と日本人を斬った好著。

これが  
子供の生きる道  
栗田 光









# 子育てフォーラム

NMSのページ



## 当たり外れ

横浜市旭区

隅田美幸（41歳）

「お子さんが三人も小学生だと、先生の当たり外れってあるでしょう？」  
と言われ、少し考えてしまった。

「ええ、まあ」

と言いつつ、現在小学六年生、四年生、一年生の子供達の担任を思い浮かべていた。が、「当たり」と感じたことはあっても「外れ」と思ったことはほとんどない。ラッキーだったのか、私がいい加減だったのか。

子供のマイナス面ばかり指摘され、

落ち込んだことはある。同じ子供でも、見方によってこうも違うものなのか。その先生には、我が子の長所より短所が気になったのだろう。仕方がない。親が思うほど、子供は気にしていない様子だった。「外れ」というより、うちの子と馬が合わなかったのだと思う。

多くの先生は、子供の良いところを誉め、励まして下さった。親にまで元気をくれるパワフル先生もあった。次男が一、二年の時の担任K先生である。高校生の娘さんがいらつしやるそう、私より少し年配ではあるが、明るく元気、発想が豊かで自由な感じが、とても好感が持てた。たまたま学

校に用事があってでかけると、K先生のクラスから子供達の楽しそうな歌声が響いてきて、こちらの気持ちまで弾んできたものだ。

授業参観に行けば、こちらもおちおちしてられない。親を巻き込んでの授業展開に、子供達も大喜び。父母懇談会は、先生の伴奏で、いつも子供達が歌っている歌を合唱してから始まる。最初は気恥ずかしかったが、慣れるとこれが結構楽しい。その後の会も和やかなものとなった。

K先生は、ご自分の娘さんの話をよくなさった。髪の毛や爪に色をつけたがったり。大きくなったたらなったで、別の苦勞も多いらしい。



「ああ、うちの子は、こんなところがまだ育ちきつてなかったんだなあ。よくそう思います。その育てられていなかったところを見てゆくのが、しつけです」

ちゃんと育ちきつていなくても、まだまだ大丈夫。みんなで見てもよしよし。先輩にそう言われ、ホッとしたのは私ばかりではないだろう。

国語で自分の小さい頃のアルバム作りをしている時、先生がおっしゃった言葉を今でもよく覚えてる。

「自分はこんなに大事に育てられたんだと知ること、他人も自分と同じように大存在だと気付けばしめたもの。人をいじめることが良いことか悪いことか、わかってくる」

「親が親になりきっていない」「子供のような親」、巷ではそんな風に言われている。それを意識してか、子供同志が喧嘩をした時のアドバイスをしてくれた。

「万が一、自分の子がよその子を怪我させてしまったら、まず謝りましよ

う。逆にやられても、すぐには怒鳴り込まず一息入れてください」

子供だけでなく親まで面倒見なければならぬ時代に、先生のご苦労をお察しする。が、当の本人は、気負いがなく自然で、いつもひょうひょうとしていらつしやうた。

「授業中に誰かが席を離れて歩いていても、その子が座るのをみんなが待っていてくれるクラスなんです」

とベテランの貫禄で、親達を安心させた。

だから、次男が「学校つまんないから、行きたくない」と朝、グズグズする回数が増えた時は、すぐK先生に相談した。

「わかりました。ちょっと様子を見させてください」

しばらくして席替えて、後ろの席から前の席になったと子供が言ったので、先生の心配りに感謝した。

「オレすごいんだよ。作文の代表に選ばれた」

嬉しそうな彼の顔。お昼の全校テレ

ビ放送で、得意な作文を一人で読み、自信がついた彼に、ほっとしたものだ。勿論先生が引っ張り出したのである。

引っ越しをしなければならなかった際も、ひょうきんなわりには神経質などころがあるので、学校での様子を尋ねた。

「新しい学校に慣れるまでちょっと時間がかかるかもしれませんが、大丈夫と思いますよ。まわりをよく見てますから」

そう励まされ、私も元気が出た。K先生なら、子供の短所も笑いながら話せた。先生も子供とのエピソードを、面白そうに話してくれる。

「テストで一つの問題をずっと考えてるから、『時間がなくなるから先にわかるところからやりなさい』って言うて、ぐるっと教室回ってまたのぞいてみると、まだその問題やってるんですよ」

ああ、子供って親の要領の悪いところまで似てしまうのだろうか。いや、

だからこそ子供って可愛い。親が子供の全てを受け入れるように、先生も子供の長所も短所も受け止めてくれた。

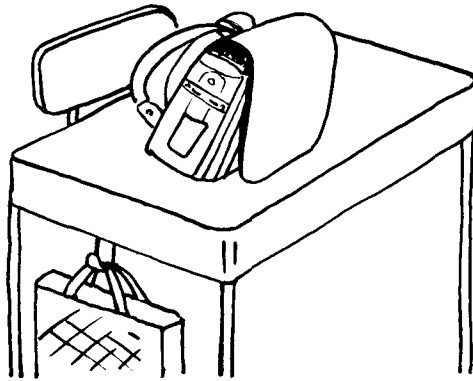
引越して一年後、以前住んでいたマンションの友人から、K先生が体調を崩して療養休暇をとっていたと聞いて、びっくりした。あの元氣なベテラン先生が……。

どうも担任をもったクラスで、何かあったらしい。ある子供に、手を焼いたようだ。

「学級崩壊寸前の状態だったみたいよ」という彼女の言葉に、耳を疑った。

まさか。きつと噂が大袈裟に広まったのだろう。それが直接の原因か、たまたまそういう時期だったのかははっきりしないが、体を壊してしまったというのだ。

随分前だが、テレビの特集で見た学級崩壊の実態を思い出す。ベテランの先生が語っていた。今まで自分が積み重ねてきたものが、全てひっくり返され、修復不可能になってしまう事を。



一体何が悪いのか。

親の側に「先生の当たり外れ」があるように、先生の側に「生徒とその親の当たり外れ」があるのだ。

こっちが「外れ」と思っている時は、あちらも「外れ」と思っているに違いない。

「当たり外れ」にこだわらず、お互いが全てを受け入れるなんてのは、夢幻なのだろうか。

K先生は音楽専科として、もうすぐ復帰なさるそう。楽しみにしている子供もたくさんいるだろう。

## 子供の人生乗っ取るまい

埼玉県浦和市 両角葉子（39歳）

我が家には、小四と小一の女の子、二人の子供がいる。

上の子が小二の時のある日の話である。クラスで、係を決めたが、長女が希望した係は、何人もの希望者があり、誰かが他の係に移らなければなら

ない状況であった。担任の先生もジャンケンではなく、話し合いをして決めるという形をとり始めており、どうするかということになった。

「私、○○の係に変わっていいよ」と、長女は他の子に譲ったということとその日の出来事として事実だけをのべてくれた。その時私は、そういうえば前回もそうやって違う係になったという話を聞いたことを思い出し、「ねえ、他の人達は、ずるいと思わなかったの？ この前、我慢して違う係に

なったのに、また今度とも思わなかった？」と聞いたところ、長女はキョトンとした顔をして、「ママ、どうしてそんなこと聞くの？ 別にそんなこと思わないし、係の人が、ちゃんと決まったんだからいいんじゃない」と言った。

今度は、こちらがキョトンとしてしまった。我が子といえども、人格は別とわかっていても、こうも発想の原点が違うのかとびっくりした。長女と八年間も付き合っていて、こんな大切な

ことに気付いてやれなくて本当に私は何をしていったんだろうと思う。今まで、私が長女に言ってきたことの中で、私にとって当り前のことが、長女にとっては、不思議に思うことがたくさんあったのではないかと思う。

一方、次女は、「幼稚園のお帰りのときの席で、A君はいつもB君の隣りにいて、C君いつも我慢してたから、A君ずるいよ、たまにはC君に座らせてあげなよって言ったんだ」と、言っている。



この係決めの話を友人にしたところ、おもしろいことに第一子である人は、長女と同意見であった。私は、第二子である。結果的に、他の係に移るとしても、どうして「私、この前、希望と違う係をやったよ。だから、今度はやらせてね」と言いわないのだろうか？ やはり、第一子と第二子の環境の違いから生じる発想の原点の違いだろうか。すぐ法則性を見つけたがる私のクセも出てきて、そんなことを思ったりしていた。

その夜、夫にこの話をしたら長女と同意見だという。夫は、第二子である。私の見つけた法則は、あつという間に成り立たなくなつた。夫は、「また、アレコレ心配しているのだからうけど、そうやっていくうちに、失敗したり、悲しい思いをしたり、逆に、うれしい思いをしたりして、色々な経験から、あの子の性格にあつた生き方のスタイルを自分自身で作っていくだろうから。あーせい、こーせい言つても、二人の性格の違いがあるからあの子に

とつては、無理なこともあるだろうしね。変に甘やかさず、基本的なことばかりつとおさえておいて、対処していけばいいんだよ」と言われてしまった。

自分の子供と言えど人格は別、子供の人生を乗っ取つてはいけなないと、日頃からよく自分自身に言い聞かせわかつていたつもりであつたが、どうもそうではない自分自身にハッと気付かせてくれた出来事であつた。子供が親につきつけてくる様々なことには、大人として、親として成熟する為のヒントがたくさんつまっているような気がする。

## LD児だとしても……

千葉県船橋市

### 由美あき子

LD…(学習障害)のことをご存じでしょうか？ 息子は今春小四になりましたが、文字の読み書きがスムーズにできないのです。

赤ちゃんの頃からを思い起こしてみ

ると、言葉の出が遅いので心配してしました。二歳八カ月になって急に何でも話せるようになり安心したもの、人見知りが強くて、公園へ連れて行っても母親の私が近くに居ないと人の輪の中に入つてゆけず、その上すごく恥ずかしがり屋で性格は私の幼少の頃とそっくり。姑に聞いてみると主人もやはり同じで「カエルの子はカエル」って本当なんだね」と主人共々そんな様子の息子を見ては微笑んでいたものです。

成長も順調に思っていました、年中入園してから周りの園児たちとの差を感じさせられることがいくつかありました。

そのひとつは文字への興味でした。すでに自分の名前やいくつかの単語をひらがなやカタカナで書いている子もいるというのに、息子はまったく言つていい程文字に興味がなく、クラス友達に感化されて「何て書いてあるの?」と聞いてきたことも何度かありました、でもそれに応えて教え

てあげているのに知らんぷりなのです。部屋にはあいうえお表を貼り、お風呂でもスポンジのあいうえおを用意して色々と手を尽くしてみました。嫌がるのでやめました。

部屋にあいうえお表を貼るだけにし  
て、「そのうち興味を示すだろう」と  
いうくらいの軽い気持ちで息子の成長



を見守ることにしたのです。

年長になり園生活にも慣れ、周りの園児たちはますますしつかりしてきました。敬老の日にはハガキを祖父母へ出すと、ひらがなで一所懸命に手紙を書いていてというのに息子は案の定書けません。ハガキ一面に絵を画くだけでした。正直あせりましたが、頭のすみ

には「まだ幼稚園児なのだから大丈夫、大丈夫……」という思いがありました。

小学校への入学も近づくにつれて段々と心配もふくらみ、家で教えたつ公文に通わせたりしましたが、数カ月通ったもののやめました。息子を心配するあまり転ばぬ先の杖……という感じで手を出しすぎていたのではと思い、一切無理はやめて入学に臨んだのです。

ところが小一の一学期の終わりに、担任から文字の読み書きの遅れを指摘されてしまいました。当惑した私は市の教育相談に電話したり教育委員会の先生にも相談しましたが、それは私の気持ちをややすためのものであって息子の状態改善には結びつきませんでした。

入学してしまつと一年の経つのはあっという間、ほとんど何の手立てもないままに二年三年と過ごしてしまつたのです。それでも息子に対する「大丈夫」という思いを持ちつつ、現実をしつかり受け止めて、息子に合った生

き方をすればいいんだと思える様になつてから、LDに対して色々情報を集めたり、LD児親の会の代表だった方からお話を伺い、目からうろこが落ちる思いでした。

LDには大きく分けて次の五つがあります。(一)学校の教科学習で、読み書き算数に困難さのえられる子どもを「学力のLD」(二)聴覚や構音に異常がないのに、聞く話すことにつまずきのえられる子どもを「ことばのLD」

(三)日常生活を営む上ではそれ程困ることとは無く、どちらかと言えば生活習慣ができておらず、整理整頓が苦手であり友だちと協調できにくい子ども達を「社会性のLD」(四)ボール投げや自転車乗りなどの粗大運動が不得手であり、ボタンのかけはずしやハサミの使い方などの巧緻運動に不器用さが見られる子どもを「運動のLD」(五)ちょっとした物音にも気が散ったりと、落ちつきのない子どもを「注意のLD」という五つの分類です。実際にはこれらの特徴が重複しているLD児が多い

のだそうです。

息子は学力のLDだと思われます：：というのはまだこれからLDであるのかどうかの検査を受けるからです。

春休みにLD児の息子さんのことを綴った本を読み、その著者に手紙を出し電話とFAXを頂き、それを手がかかりに親の会のこと、フリースクールのこと、病院のことなどたくさん情報とアドバイスを得て、私は勇気づけられ息子のことも前向きに受け止めることができるようになりました。

息子がLD児であってもボーダーライン児であっても、私はこの一カ月半の間に懸命になって過ごしてきました。周りの方々の好意に感謝すると共に、LDについてのことをもっと周りの人たちに理解してほしい、強度な競争性のある日本の教育を改善すべきであると強く感じ願います。

私達の本当の苦悩、本当の戦いはこれからです。息子に合った教育、道は必ず開けると信じて。

(え・奥島千恵子)

## 専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、  
でも何人かいれば心強いあなた…  
お友達・職場の仲間などなたでも結構です。  
3、4人でも何人でも  
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。  
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。



くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください

わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

あ  
なたへ

スマッシュ

二八四号 「あなたへスマッシュ」の  
青島典子様、そして皆さま

エールをありがとう

神奈川県平塚市 飯島まゆみ(45歳)

二八三号の拙稿『『要約筆記』入門』にエールを送って下さり、有難うございます。私はまだ「駆け出し」前の準備運動中で、この五月から県のろうあセンター（赤十字）でも、要約筆記者養成の講習を受けています。

受講料は無料で、応募者数が多いと抽選になると聞き、三度目は自分の「怖いもの知らず」に賭けて申し込みました。

今回の研修生は、女性ばかり十五名。入門↓基礎↓応用コースで約三十回、一年がかりの実技と講義です。一つのコースへの出席回数が必要で、一回の課程に進級できず、次年度の応募から出直しになるので、まず健康に留意しなくては。

今年度から厚生省のカリキュラムが一部変更になり、センターの要約筆記者養成の現場に、難聴者の皆さん

も参加することになりました。従って授業時間帯も夜になり、私は夜間学級生になりました。

こちらの研修はなかなか厳しく、「皆さんの書き方に少し配慮が足りないだけで、画面の文字情報が頼りの人たちに誤解や不安を与え、混乱させてしまうのですよ」

という講師陣の叱咤と訓戒に、私はますます緊張して混乱してしまふ。

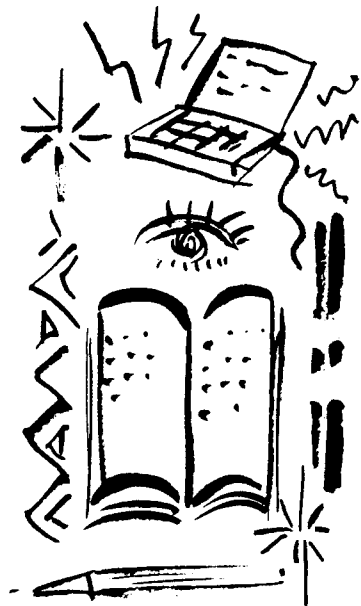
研修生には手話を習得している人が多く、手話の素養のない私は、「聞きだめ」——自分の手を動かしながら、先行する口語の内容を、よ



り多く正確に具体的な言葉で記憶しておく——の訓練も人一倍必要です。

神奈川県は他府県に比べ、要約の基準（要約すれど意識せず）や表記の基準（きちんと漢字を使い、文を完結させる）が厳格だとか。また要約筆記者の派遣制度も、県下の各自治体によって違うようです（ろうあセンターの課程終了者は、県に派遣登録できます）。

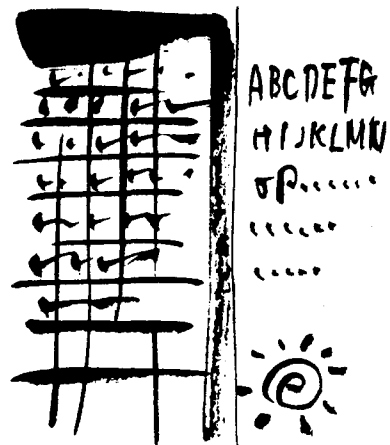
私の要約筆記者修業は、これから



が本番。新聞やこの「わいふ」にももつと丁寧に通し、常用漢字のあて方や送り仮名のつけ方など、「一貫性のある表記のしかた」の参考にもしたいと思います。

最後になりましたが、当市要約筆記サークルのメンバーたちも、「『わいふ』の皆さんによりしく」と申しておりました。

（先日、ある知人が「不倫」の手話表現を教えてくださいました。NHK「みんな



なの手話」より、エッチ系「おとなの手話」の方が覚えやすい？」

名称にひかれて

匿名

二八三号の飯島さんの「要約筆記入門」を読んで、遠い昔になつてしまった私の経験を思い出しペンをとりました。



夫の勤めの都合で五十歳で勤めを辞めた私は毎日退屈で困っていた。

丁度そんな時、やはり区の広報に「要約筆記者養成講座・受講生募集」が載ったのである。一日二時間二十日間、全日程出席すること（遅刻、早退認めず）。欠席した場合、翌年の同講座に出席して、単位を認めてもらわないと、修了証は出せないというきびしい条件も、ごく新鮮で輝いて見えた。

応募者数は三倍というのに、運よく受講生になれ、緊張しながらイソイソとその講座に通った。前半は講義、後半は実技である。一週間に一回であるが、宿題も出される。「テレビのニュースを聞きながら、要約筆記をしてごらん」「ことばづかいの問題プリント」「漢字の書き方」などなどである。三倍の希望者の中から受講生になれたのである。みんな張り切っており組んだ。いろいろな障害をのりこえて修了証を手にし

た時には、もう一人前の要約筆記者になったよううれしさで一杯だった。

早速、活動できる者として区に登録し、出番を待つことにした。

修了式のあと、聴覚障害者の会の方達と交流会をもった。私はもうここで出鼻をくじかれたのである。ここではノートテイクでもOHP（飯島さんの説明により省く）でもなく、すべて手話だったのである。誰のための要約筆記かと言えば、それは聴覚障害者のためのものである。とすれば、手話も勉強しなければ日常会話は成り立たない。一つの山をこえて、また目の前に山ができてしまった。

修了証をもらったからと言って、ただ漠然と出番を待っているわけにはいかない。自己研修も続けなければならぬ。区で行う他の講座等にOHPを入れさせてもらって、自主的にグループ研修もしなければならぬ。聴覚障害者のいろいろな会

に出席して、コミュニケーションを計らねばならないと、要約筆記者としての出番より、それに係わる他の外出の方が多い。

大きな字など（直径三センチ位）

書いたことのない主婦が、速くきれいに、そしてなるべく話に忠実にと緊張して書いていて、仲間の一人は腱鞘炎になってぬけていった。OHPの機械は目を痛めるからと普通サングラスをかける。私は眼鏡をかけているので普通のサングラスでは板書が見えない。度付きサングラスを作ったが、黒色であるから他には使えない。こうやって待っていても、OHPの必要な講演会は一カ月に一回あるかないかであり、待っている人は大勢いるわけである。当然先輩のお気に入り声がかかるというものであろう。

そして、実際に要約筆記をして報酬をもらった時は（かなりの額をもらった）「やったあ」という気持ちではなく、私の不十分な要約筆

記で今日の講義がわかってもらえたのだろうか。"こんなにたくさん謝礼をもらえる仕事をしたのだろうか。"このお金、障害者の会に寄付した方がいいのかなあ"というものだった。

これから先の事を考えれば、音声と同じ速度でタイピングされる器械が開発されることは必至だし……。半年余りで見切りをつけた。

「要約筆者」の名にひかれての浮気心と決別した次第です。

## 「嫌」と言えない大人

埼玉県浦和市 麦穂(44歳)

……それは私です。二八三号、文字さんのお子さん可哀想ですね。私も子どもの頃から頼まれると「嫌」と言えず何度も泣きを見ました。ただ不幸中の幸い(？)、私の

物を欲しがる人は居なかったの、大切な物を手放すことはありませんでした。ひたすら精神的、肉体的(身体を動かさざるをえない用を頼まれる)痛手のみ。そう、十文字さんの心配されたとおり、私はキャッチセールスに引っかけたり訪問販売を断りきれない大人になりました。知り合いに貸した物を「返して」とさえ言えません。その辺の性格は変わりようが無く、今でも頼まれ事には弱いしセールスにも滅法弱い。しかし何度が痛い目にあって自衛策を講じました。

「嫌」と言えないのなら言われそうな人から逃げる、近づかない。街でのアンケートには全く答えず、聞かない振りをして素通り、エステのお試しキャンペーンの電話には「興味がない」の一言で切る。訪問販売に至ってはセールスし続けている人を玄関に残したまま「忙しいので」と二階へ逃げる(ちょっと危ないなこりや)。

そんな自分を大人気ないと思いつつも、「嫌」とハッキリ言えない私はこうするより仕方がないのです。

「嫌」を言える人間になるよう努力をすればと思われるかも知れませんが、それは今となってはかなりのプレッシャー。大人気なくても格好悪くても私はこのまま逃げ続けます。……一生自立できないってことでしょかね。

## 結婚

東京都三鷹市 林夏子(45歳)

結婚という制度はもう過去のものとなるかと思われた、二十世紀の最後の年になって、カトリックの洗礼を受け、結婚をしたという浅野素女さんの話は、すくなくらず、わたしに衝撃を与えた。

サルトルとボーボワールの関係が究極の男女関係のようにもてはやさ

れ、神を殺してしまった時代を経て、浅野さんがそこに到達された過程を是非とも知りたいと思った。

わたしは、二十年ほど前、一年間フランスで暮らしたことがあった。パリ在住の父の友人の紹介で、たさんのフランス人の家庭をみた。

いわゆる複合家庭がほとんどだった。今ほど離婚も多くな、シングルマザーという言葉もまだまだ目新

しく、父親と母親そしてその実子で構成される家庭が一般的だった日本から来たわたしにとって、この光景が未来の日本なのか、個人を尊重して女も自由を手に入れるところなるのだろうかと、若いなりにいろいろと思いを巡らしたものだ。その一方で、一晩とめてもらった家庭で、継母がタバコをくわえるとすかさずライターで火をつけてあげる少

年の淋しそうな目が今でも忘れられない。

わたしは、留学前から今の夫とつきあっており、フランスに残りたい気持ちをおさえ、帰国後しばらくして結婚した。そして十八年がたち、二人の子供もだいぶ大きくなった。

家庭はそこそこ平和であり、夫ともうまくいっているのだが、わたしは、三年ほど前から、カトリックのシスターのところで聖書の勉強をはじめた。そして、その深さに驚くとともに、ますます惹かれる日々である。

こんなわたしであるので、「リラの花 桜の花」の連載に大きな期待を寄せている。

## パラサイトシングル 次男の場合

岩手県北上市 菊池喜恵子(48歳)

我家の次男もパラサイトシングル



というのだろうか。高卒後、働きながら東京の建築専門学校を卒業し、親が親元に戻って来るよう強くすすめたため、岩手に戻り地元の建築会社勤めて、三年目になった。その間二級建築士の資格も取り、たまに自営業の店の店員の仕事を手伝ってはくれるが、ほとんど家事は、母任せである。

親がなぜ戻って来て欲しいとすすめたかというと、その方がお互い経済的に楽だし、将来独立したら近い所に住ませて行き来し、親子で何かと助け合えたらこんないい事はないと思ったからだ。

次男はパラサイトシングルとはいえリッチな独身貴族には、ほど遠い。手取りで十四万円代の給料で、家に三万、車のローン、保険、生命保険、電話代で十万は消える。残り四万が小使いとはいえ、この不況でボーナスも二年目からはゼロになり、ボーナス時の車のローンは、月々少しずつ残しておかねばなら

ず、ほとんど遊びも旅行もしていない。現実の生活は、家事が楽なだけで厳しいものがある。

その次男が、今年の正月に、来春には家を出て自立すると言い出した。今の会社に見切りをつけて、新天地を求め家を出るという。行き先は、なぜか九州。次男には次男なりに理由があるらしいが、よく理解できない。菊池のルーツが熊本にあるからか、友人に九州出身者がいるからなのか、あるいは次男のアレルギーが寒冷地特有のものらしいからか。そう言えば、専門学校を出る時も九州に就職したいと言っていたが、まさか本気になるとは思ってもみなかった。

何度も何度も話し合い、言い合いもしたが次男の決心は固く、着々と準備をしている。私の胸には、正月から小骨が刺さったような感じが続いている。十年一日のごとく、義父母の食事作りやら雑用、家事など、嫁だから当然と押しつけられ、三十

年近い。現役意識の強い八十四歳の義父と、言葉のきつい、冷たい七十九歳の義母。その義母がこの春体調を崩し、二度入院し手術もし、その世話もある。永遠に続くかと思われた私の義父母の飯炊きも、あと何年かと先が見え出してきた矢先の次男の決意なのだ。独立したら近くに住ませて、孫の顔など見ながら暮らしたいという私の、ささやかな夢など捨てねばならなくなった。

二十三歳の次男の気持ちも、なんとなく理解できるような気がしてきた。楽な方楽な方と求めていたら全然進歩はない。彼には勇氣と、根性があり、浮わついた所はない。春には行動できるよう資金の用意もしているようである。

地元の職業安定所に相談したところ、九州の求人情報など分からないと言われてしまった。次男は九州に行ってから行き当りばったりで、就職先と住む所を見つける気であるが、親としては不安で、親バカかも

しれないが、何とか情報を知りたい  
と思っている。

福岡県か熊本県の「わいふ」の読  
者の方々、どうか私に求人情報誌を  
送っていただけないでしょうか。お  
願い致します。

しぐれ雨 義父母の飯炊き 三十  
年

老いて病む 義母の口調の 強き  
まま

連絡先☎〇二四—〇〇三二

岩手県北上市川岸四丁目1の22

TEL・FAX

菊池喜恵子

〇一九七—六三—三八三四

幼稚園の父母会役員って……

来春が恐ろしい 十文字圭子様へ

千葉県印旛郡 末永真理子(43歳)

今年、幼稚園も最後なので、幼稚  
園への感謝の気持ちで副会長を引き



受けた者として一言。

転勤族ということもあり、いろい  
ろあり、幼稚園は四園目です。今の  
幼稚園が一番気に入ってます。子ど  
も一人一人の個性を大切に、学園長  
先生をはじめ、どの先生も慈愛の心  
で満ちあふれています。

一月に三役の推薦に上がったとお  
手紙があり、数名集まり、前役員さ  
ん達との話し合いで、会長一名、副  
会長二名決まりました。

定例会への出席、総会への出席、  
引き継ぎと新学期までに見習い期間  
がありました。

新学期が始まり、クラス役員決め  
(なかなか決まらないんですね)  
にも協力し、やつと全員クラス役員  
がそろい、書記、会計等決めました  
(決まったのでなく、三役が積極的  
に決める方向へ持っていったので  
す)。

初顔合わせの時、園側からのあい  
さつは、

「お母様方の負担にならないよう、

子ども達のためにお願いします」でした。

父母会の活動方針は、「保育の妨げにならない、子どもが楽しめる、父母の負担のかからない」と決めました。

個人的なことですが、私は仕事（パート）もしており、ボランティアアサークルにも参加、行政主催の講座への参加、お手伝いもしております。

四人の子ども達の学校行事等にも必ず参加します。

だからといって副会長の仕事、手を抜いているわけではありません。無理をせず、自分一人で抱えこまず、自分のできることを楽しんでやっております。

たまに考え方の違い等もあり、落ち込んだりしますが、自分を見失わず、自分のやれることをやろうと決めています。

今、幼稚園でも学校でも自治会でも、役員を引き受ける人、少ないん

です。

仕方なしに一部の人が引き受け、牛耳って知らない間にいろんなことが決まってしまう。

それって何か恐くないですか？

何かと似てませんか？

もっともつと一人一人が興味を持って参加していかなければ、民主主義とはいえないんじゃないですか？ 十文字さん、どうか恐ろしいと思わず、いろんなことに首つつこんで、自分の目で耳で、身体、心で感じて下さい。

一人一人の意識の改革が大きな力となつて山をも動かすと私は信じています。

## お役に立つ理論です

千葉県船橋市 山口遼子（48歳）

二八四号の「子育てフォーラム」で、水沢瑞穂さんが「子どもは預か

りもの」という文章を書いておられるのを見て、「おお、同志だ」と、うれしくなりました。

かつて子どもが小さかったとき「子どもは授かりものつていうけど、別にもらったモノじゃないんだよね、神様が『このヒトをしばらく頼みます。ちゃんと大きくしてやってください』って、私に預けたんだ」という思いが、突然ひらめいた経験があります。そう考えると不思議と肩の力が抜け、子育てのたいへんさがずっと和らいだ気がしたものでした。

子どもが自分の所有物（モノ）だと思うと、思いどおりにしたくなるし、思いどおりにならないといらつくでしょ。でも「この子は私のモノじゃない。一時的に育てるのも任されているだけなんだ」と考えると、ちゃんと大人にしさえすればいいんだ、あとは自分で生きていく力をちゃんと神様が授けてくれてるはず、とあまり欲深なことも思わなく

なっちゃうものです。

後年文章書きになり、折にふれてこの「預かりもの理論」を書いてみたり、お母さん向けの講座でエラそうに吹聴したりもしてきました。けっこう受けますよ、この理論。これを聞いた若いお母さんたちの目が「あつ、そうなんだ」って、輝きますもん。だって親にとっても子にとってもラクなんだから、この方が。

はつきりいつて、親子なんてしょせんは他人。長女産んだとき、ヌルって出てきたベビーを見て、（「うわー、私の中から違うひとが出てきた」）って、驚いた。わが子といえども、世に出た瞬間から、一個の人間、他者であることには違いないものなんです。一人で生きられない間だけ親という大人がそばにひつついてるけどね。

## 子どもという預かりもの

東京都世田谷区 後藤 晶

二八四号の「授かりものではなく」を読んだ。子どもはその子が自立するまでの間、親が預かせてもらっているのだということを私も実



感ずる。

妊娠中は、もし生まれてくる子どもになんらかの障害や病気があつてもしっかり受け止められるだろうか、と自分に問いかけていた。ところが健康な子を抱いた途端に、そんな謙虚な気持ちを忘れてしまった。日々成長するだけでも親を幸せにし



てくれるのに、いつのまにか息子には、もつともつと私に都合のよいような子どもになつてほしいと思つていた。それが自分勝手なことにも気づかなかつた。

妹が生まれてから、子どもの個性ということをやつと理解できた。娘とは、こんなに楽な子育てもあつた

の、と思うような関係。私が楽な気持ちで接しているからだろう。水沢さんと事情は違うかもしれないが、「上の子の育て方が悪い」とか「無能な母親」というレッテルを自分ではがして、私の心もバランスを保てた。

ときどきよその家庭を見聞きして、世の中不公平だなあと思うこともある。親が頼りないほど子どもはしっかりするのも、とはいえ健康や経済的に不安のない幸運には感謝している。どの子もその子だけの人生を歩めばいいのだと、本当にわかるまでにはかなり遠回りして悩んできた。

そうこうするうち息子は十四歳。母親の期待に押しつぶされずに、よくぞここまで自己を保ち続けたものよと、感心する。私が心からそう思うようになったら、最近何だか息子は、今までつけていた硬いヨロイを自分から脱ぎ始めたように思える。こんなことだったのか。前よりお



しゃべりになった息子はけつこうカッコいいし、妹はいつも兄を尊敬している。こんな二人がわが子だという貴重な時間がこの先も続くなんてありがたいことだ。

## 「情が仇―私の事故顛末記」 を読んで

大阪府豊中市 高宮みか（61歳）

小田多恵さんの「情が仇―私の事故顛末記」を読んだ。

思ったことは山ほどあるのだが、ご当人に向かって何か言おうとするたいへん難しい。

お年からして大先輩であるし、自分も車を毎日運転している。いつ事故を起こさないとも限らない。車のない人生なんて……と、言いたい気持ちもある。

けれども、いつ運転を降りるか、ということについて、私も考えはじめていい頃かもしれない。

人身事故をいままで一度も起こしたことがないからといって、明日起こさないという保障にはならない。土砂降りの雨の日だからといって、カーブミラーや標識が見えなかったことは言い訳にはならない。広い道路と交差する時は、広い道路の走行車優先であることは、法令で決まっている。そんなことより、カーブミラーや標識が見えないほどの大雨の日に、広い道へ一時停止なしで進入することは、普通なら恐ろしくてできない。たまたま相手がいい人で、幸運だったのは小田さんであって、お相手は不運をあきらめただけだろう。

私が不思議に思うのは、小田さんがこの事故から得た教訓である。車に関する責任は全部自分が負う。当たり前前のことではないだろうか。それとも保険に入っているから大丈夫、という意味だろうか。人に親切にしたばかりに、情を仇で返された。これからはうかつに人を乗せる

のは止めよう。

なんて寂しい結論だろう。

毎日お孫さんの送り迎えをしていらつしやるという。お孫さんに怪我でもさせたら、息子さんにはなんと詫げるのだろうか。それでも優しい息子さんは、お母さん、これから運転には充分気をつけて、と許してくれるのだろうか。

私が小田さんの文を読んで得た教訓は、私は七十二歳になる前に運転を止めるべきなんだな、ということである。

八十歳まで運転をしていたい、とおっしゃる小田さん！ 今まで守って下さった神様を恨む前に、もう運転はお止め遊ばせ。

## S子とYちゃんのその後

横浜市磯子区 十文字圭子（37歳）

二八四号の後藤さんの温かいお言

葉、ありがたく思います。また、野本さんのご意見もその通り。S子の「よい子」で「素直な」ところが返って気になるから、私は「いや」と言っただけだった」のだと思います。

あれ以来、Yちゃんは遊びに来ません。怪我をして学校を長く休んでいたということもありますが、学年が上がってからも一度も見かけません。かといって、全く関わっていないわけでもなく、友達の家に偶然、来たというようなこともあったらしくて、会話の中にもたまに彼女の名前が挙がります。

それよりもI子ちゃんという子と「親友になった」らしく、毎日交換ノートなるものを始めました。休みの日にも電話して、訪ね合ったりして、私も自分の事を思い出し、微笑ましく思っています。

お二人方の言われるように、子どもは色々な経験を重ね、大人になっていくのでしょう。親は火の粉を振

り払ってばかりではいけないのかもしれませんが。多少きつくても自分でしたこと責任は自分で取る、という当たり前のことを経験させ、見守ることが務めなのでしょう。

それにしても、最近の「十七歳」の一連の事件でも盛んに言われるように、「よい子」というのが危険というのは、気になります。七歳のS子も四歳のI男も、およそ「ふざける子」ではないからです。明るく、よくおしゃべりしますが、集団の中で、「活発に発言し、おどけたりする」タイプではありません。

「それまで何の支障も無く過ごしてきたが、中学になって突然、不登校になり……」という記述を読むだけで、不安になります。私たちの頃にいた「つっぱり」はなりを潜め、どこにでも居る「よい子」がある日豹変する。今、「素直で」「よい子」の我が子たちを見ながら、「ではどうしたら……？」という疑問が浮かびます。

## 圧倒的な哀しみ

東京都練馬区 井上暁子(40歳)

二八四号「悲しき上野動物園」の長谷部さん、あなたの文章を読んで、忘れていた光景をありありと思い出しました。

あなたより少し年上の私が五、六歳の頃です。昭和四十年頃、あなたがよく動物園に出かけていたのと同じ時代ですね。それは日暮れの早い晩秋の日だったように思います。家族で出かけた帰り道、私は母に、弟は父に手を引かれて人込みの中を歩いていました。木枯らしがびゅうびゅうと吹いていました。道端に靴みがきのおばあさんが背を丸めて座り、缶に入った小銭を数えていました。小銭は十円玉や五円玉など赤いお金ばかり十数枚だったように思います。

それを見た私は、圧倒的な哀しみに打ちのめされました。当時の靴みがきの代金はいくらくらいだったのでしょうか。その日の稼ぎが多いのか少ないのか、あの十数枚の小銭で、

おばあさんの今日の暮らしは成り立つのか、この木枯らしの中、おばあさんはもううちへ帰れるのか、まだまだ働かなければならないのか——幼い頭で、そう言葉に考えてたわけではありませんが、そんなふうに感じたことをはつきり憶えています。そして、大きくなったら「みちこさま」になって、このおばあさんのような人を、みんなみんな幸せにしてあげたい、とつよく思ったことも思い出しました。

それからずいぶん長い間、私は道端の靴みがきの人に気づくと、そちらを見ないよう、意識にのぼらせないようにしていました。この時の記憶があまりにつらかったからです。そして、そんな靴みがきの人の傍らには、時折、長谷部さんの見たような

軍人さんたちが、ハーモニカで哀しい音楽を奏でていました。

今、娘達があんな圧倒的な哀しみに打ちのめされたら、私はどうやって慰めてやればよいのでしょうか。でも、その後日本は豊かになって、私や長谷部さんの見たような光景を見ることも、ほとんど無くなりました。そのことを幸いにとらえるべきなのか——。哀しみに押しつぶされた幼い私を心に抱え、しばし考えたひと時でした。

## 見方を変えれば、 幸せなことかも

東京都北区 森本満美子

二八四号の柳本様のその後を読み、大変残念に思いました。エールを送りたいと思います。

二七七号「保険会社の内幕」は、とっても興味深く読ませて頂きました。清濁併せ吞んでいるようなこの

世の中、全く想像がつかない訳ではありません。それでも、ああして会社の内部事情が具体的に明らかにされ、活字となって目の目を見ていることにワクワクしました。どうなっていくのか続きを早く読みたいと思っておりました。ただ、それを書かれた柳本さんという方は大丈夫なのだろうか、ということが、ちらっと頭をかすめたのを憶えています。「わいふ」といえ（編集部ごめんなさい）、一度世に出れば誰の目に止まるか分かりません。勇気ある方だと思ったものです。

二八四号で解雇のことを知り、申し訳ない言い方だけど、今の日本の社会って、やっぱりこうなんだよなあって思ってしまった。

渦中にある時は、どうしてこんなことが自分の身に起こってくるのだろう、なぜ？ と私も思ったことがあります。腹は立つし、悲しい。苦しくてどうしようもない。どうすればいいのか、考えることすらでき

なくなる。そして落ち込みうつ病にもなりかねない自分がいる。なのに、なのによりよく考えてみると、もしその事件がなければ、自分は今までのまんま、変わりなく過ごしていただろう。何かが違うと感じていながら、何も変えることなどできなかっただろう。無理矢理変化せざる

を得ない状況が起きてしまったことで、考える機会をプレゼントされたのだと思うことができたのです。自分が本当にやりたいことを、今一度考え直すチャンスを与えられたと今では思っています。

最悪なんかじゃないのです。定年まであと何年もあり、本来定年となる年齢以降を含めて、人生の方向を見つけられるのではないのでしょうか。理不尽な事が次々と身に振りかかり、変化を生きる途中は苦しい。人はその苦難の中で強くなり、成長していくものなのです。

何か起きてきても、すべて自分の為になるのだという構えでいれば、



恐れることはありません。なんて言うは易しですね。

ご披露下さった経験を肥やしにして、美しい華を咲かせて下さい。ゆったりと芽が出るのを待って、心が感じる方向へ育てて下さい。それから、裏側の世界やつぱり読みたいです。

## 幼稚園の役員と洗濯物(?)

埼玉県飯能市 岩崎八恵

二八四号、「幼稚園の父母会役員って……」読みながら、長男の幼稚園時代を思い出しました。そこも二歳児から年長児まで合わせても三十名ちょっとという小規模な園で、親の手伝いなしでは行事が成り立ちません。

役員の負担は似たようなもので、朝、子どもと一緒に登園し、一緒に帰ってくるというようなことはざら

でした。

役員でなくとも、じやがいも掘り、バザー、クリスマス会、プールの付き添い、その他もろもろのお手伝いは当り前。

私が一番苦手だったのは、大きなテールクロスの洗濯でした。

でも、三歳の子がマッチをすって、ろうそくに火をつけ、ぱりっとアイロンのかかったテールクロスで、楽しそうにお弁当を広げている姿を見れば、何週間かおきにやってくるテールクロスのお洗濯当番も苦にはならない、というわけです。

親たちが集まると、「園長先生は人を使うのがお上手よねえ」とか「他の園だったら楽なのね」などとよく愚痴を言い合ったものでしたが、今になってみると、あのころ大変だったなあ、と感じたことが大したことではなく、むしろ楽しい思い出となって残っています。

十文字さんのお知り合いの方も、

案外何年かたつと、大変だったけど、いい園だったわ、と思えるようになってるかも……。だって本当にいやだったら転園したっていいのですから。

ところで、文中に、いつ家の前を通っても平日はほとんど洗濯物を見かけない、という部分がありました。洗濯なんて、その家の事情でいつやろうがかまわないと思います。それを、日中洗濯物を見かけないのはきつと忙しくて家のこともできないのだろう、なんて思われたら、落ち込んでしまいそう。

たとえそれが事実であっても、そんなこと他人にいちいち詮索されたくないですね。

かくいう私、ほとんど洗濯は午後にしています。それが習慣になっていくのですが、きつといるでしょうね、あそこは平気で夜干しするところでもない家だ、と思っている人が。

(え・カステラネコ)

# 私も ひとこと

## 中年淑女の玩具

アメリカ・リトルロック市 伊藤琴子

ジェンターの講義。進んでいるアメリカでも男女区別はまだまだ根強い。名前、色、壁紙、玩具、ゲーム、大学の専攻から職業に至るまで。子どもの頃はお人形やなわとびや、出て入って一の段とかしたものです。中年になった今のオモチャはね……。アメリカ人の学生はわかったような顔をしてニヤニヤ笑ったり、変にうなずいたりしている。答を聞いた彼らはぎやふんとしたよ。

万歩計と血圧計！

## 春菊

静岡県小笠郡 鴨川典子（46歳）

晩秋に播いた春菊。食べきれず、とうが立ってしまった。抜かずにいたら花が咲いた。黄色のマーガレットのような花の、きれいなこと。五月中、家中の花びらが春菊の花だらけだった。

花も食べられると聞いたので、花びらをサラダに混ぜたら、なんともオツな味。食べて良し、見て良しの丈夫な春菊。皆さんも十一月になったら、ぜひ播いてみませんか。

## 快適カップルよ、いずこ

カナダ 海林寺ひろい

私達夫婦は、子供を持たない主義。子供は嫌だし、この国で老後頼りになるのは、子供よりお金と福祉制度だ。周りには同様のカップルが何組もいて、結婚と同時にサッサと避妊手術を済ませ、夫婦二人生活を満喫している。そんな彼らとのつきあいは楽しい。が、日本に帰ると、子抜きでつきあえるのは独身貴族の連中だけ。日本には、快適カップルは生息していないのだろうか？

## 歯の治療

神奈川県中郡 石井しのぶ（41歳）

歯の治療をするたび金属の部分が入っている、今では銀がかぶった歯が七本もある。見た目ではそれほどひどい虫歯に見えず、まだ痛くもないのにどんどん神経を抜かれ、銀がかぶせられていった。疑うわけではないけれど、本当に患者の歯のことを考えて治療してくれたのだろうか。自分たちに全く知識がない分、収入面で都合のよい治療法が選択されている。いても気づかないだろうことがおそろしい。

## 我が子のテーマ曲？

東京都北区 立山花恵

息子の名はりんべい。幼稚園ではりんちゃんと呼ばれている。今年生まれた娘の名は、るる。いつもの様にTV「おかあさんといっしょ」を見てみると、六月の歌は「あめふりりんちゃん」で、歌詩に「りんちゃんるるらー」と出てくる。「りんべいとるるちゃん」の歌だね」と喜んで歌う息子。かわいらしい歌で私も気に入っているが、歌の中のりんちゃんは、かえるの女の子である。

## はらのたつこと

東京都武蔵野市 齊藤きよみ (42歳)

つい最近知った。森喜朗首相が文教族議員の中心人物であると。全てに納得がいった。なぜ政府が、日の丸や君が代を学校現場に強制し、愛国心を養成せよといふ幕のか。本当によりくわかった。上からの統制に国民が素直に従って、それで世の中が変わるとも思っているのでしょうか？ 上から見おろされるように指示されて、国民が御威光を有難がつてへーッとひれふすと考えてるなら甘い。

## 年齢を知りたい

和歌山県田辺市 奈桃有子 (63歳)

氏名の下に年齢を書く事にしませんか？ その人の文を読みながら年齢を明記してあると、時代・年代を想像しました世代に依る考え方や、生き方等も読む方に伝わり、年齢不詳よりも理解度が深いと思います。殊に同年代だと、思い入れが更に強くなったり、同時に人生の勉強にもなります。年齢が判らない人の場合、勝手に想像する訳ですが、きちんと明記している人の文章は、はっきり言って読み易いです。好感が持てます。如何でしょうか？ なくとも可なんて止めようよ。

## 姑より始末の悪い小姑

埼玉県浦和市 匿名

今秋より夫の両親と同居します。玄関と風呂のみが共同の二世帯住宅です。姑とは、世代も違うから……という割り切り方ができているのでいいのですが、問題は夫の姉です。自己中心的で、未だに親に食ってかかって文句を言い、拳句に泣く、ふてくされるといった調子です。今までは、ほうっておきました。が、この波長のあわない姉に、我が家に来たときはやめてほしいと一言いいたいのですが……。

## 卵のダンス!?

茨城県那珂郡 サト ウタ

本日、二十回目の結婚記念日なので、投稿します。大安 天気も上々。先日のお話です。お気に入りのジャズのカセットを聞いていると、そぼで、メダカの卵を顕微鏡で観察していた小五の娘が、「あつ、卵が音楽に合わせてピクピク動いている!」、曲が変わると、「あんまり動かなくなったよ」です。メダカの卵にも、好みの音楽があるのかもしれないね、ということになりました。すごい発見。

## トイレ借ります

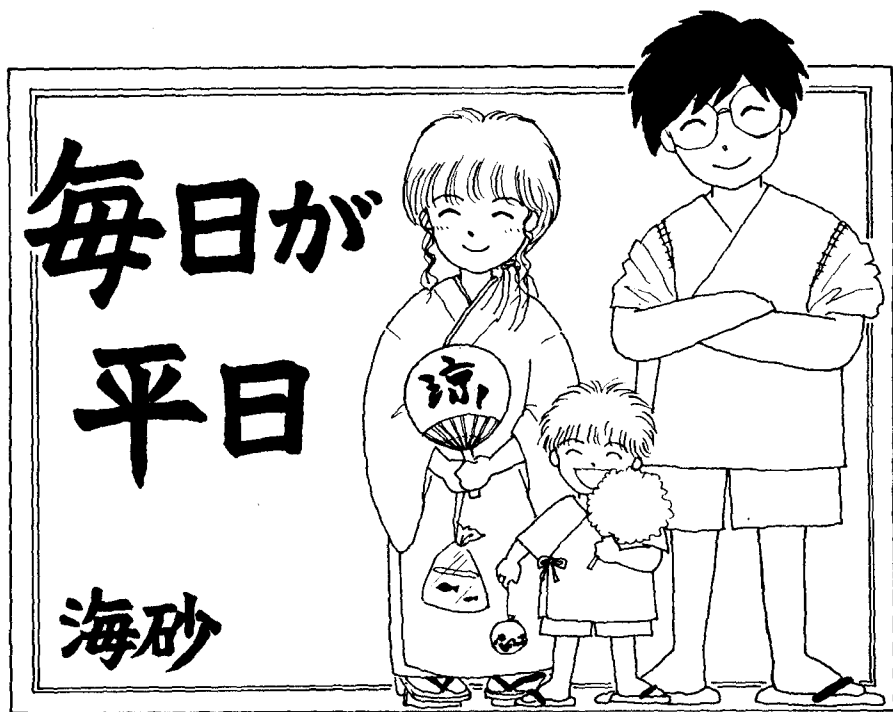
千葉県船橋市 草野ゆき

公民館にはいろいろな人がおこしになる。何といっても多いのは、トイレにお立ち寄りの方々。深々と頭を下げてお礼を言っている方もあれば、使った何が悪いとばかりに居丈高な方もいる。特筆すべきは近くでお店を営業している方。一日何回となくスーとお帰りになる。どうやらご自分の店には、トイレが無い汚らしい。こういうことは良くあって、公共施設の近くの小さなお店やさんにはその常連さんが多いのである。

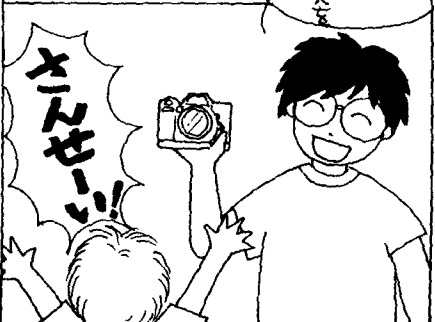
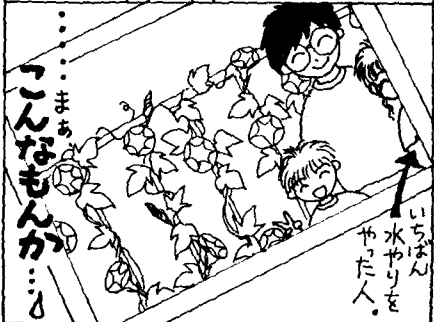
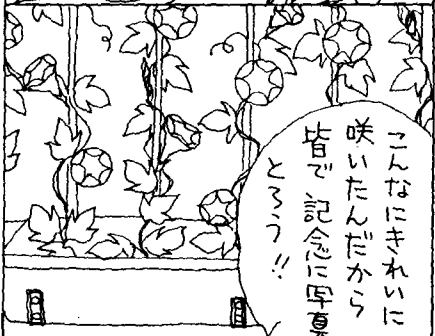
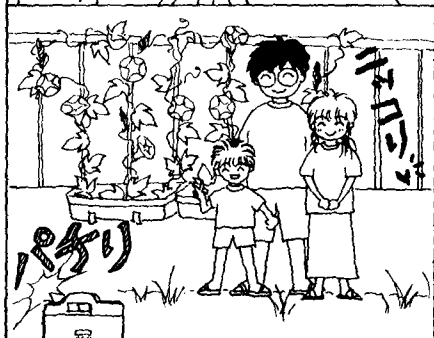
## 友達の髪の毛が抜けて

永田道子

四十代の友達が室内で帽子を取らないので「おかしいな?」と思っていたら、帽子をはずして頭を見せてくれた。なんと毛が少ししか無く医者は「ストレスでは!」と言っているとか。六十代の私は毛が抜けたら再び生えてこないが、彼女はまだ若いのだから新しく生えてくるのを願うのみである。そして「髪は女の命なのに思いもかけないことが起きるのだなあ」と改めて感じたできごとだった。







# 情報コーナー

ホームページ開設のお知らせ  
「サバイバル☆ママ」

ライターの森田千恵です。わ  
いふ読者のみなさまには、「二  
八二号」にて取材協力をお願い  
し、たくさんのご応募をいただ  
き、ありがとうございます。  
少々企画決定に時間がかかって  
おりますので、ご了承ください。  
さてこのたび、「サバイバル  
☆ママ」という個人ホームペー  
ジをオープンしました。再就職  
したいママ、再就職してがん  
ばっているママ、そして働くマ  
マのための情報がいっぱいの  
ページです。どうぞ遊びにいら  
してください。「わいふ」の

「ニューマザリングシステム」  
も紹介。

「サバイバル☆ママ」アドレス

[http://homepage2.nifty.com/  
SURVIVALMAMA/](http://homepage2.nifty.com/SURVIVALMAMA/)

問い合わせ先

e-mail:QZF05610@nifty.ne.jp

森田千恵

出版しました

「看護婦さん 出番です!!」

この度、出版社との共同企画  
で、本を出版しました。

タイトルは

「看護婦さん 出番です!!」

患者さんとかかわりを中心  
に、ナースたちの病棟奮闘記の  
ような内容です。

問い合わせ 明窓出版

TEL〇三―三三八〇―八三〇三

定価一三〇〇円(送料、税別)

本屋さんでも購入できます

が、取り寄せる、場所によつて  
はかなり日数がかかるようです。  
読んでいただけると嬉しいで  
す。よろしくお願いします。

東京都新宿区 林 直美

## 子宮・卵巣がんの サポートグループ発足

長いこと、タブーとされてき  
た女性生殖器にできるがんの、

本格的なサポートグループが、

東京で今年五月に発足した。

共通の問題としては、子宮摘

出による排泄障害や、卵巣欠落  
後の更年期障害、リンパ節郭清

によるリンパ浮腫、性生活の問  
題など。生殖器を取った後、女

性だとは思えなくなったり、子

供のいない生き方をどう受けと  
めるかなど、心の悩みも伴う。

今後「わかちあいのミーティ  
ング」と公開講演会を毎月交互

に開催する。九月十七日には、

産婦人科医の丸本百合子さんが

「卵巣欠落による更年期障害」

について、十一月十九日には廣

田彰男さんが「リンパ浮腫の子  
防と治療」について話す予定。

●問い合わせ・連絡先

千一五六―〇〇四四 世田谷区

赤堤二郵便局留 まつばら

TEL〇九〇―一七三二―七二三

## パソコンでメールを

こんにちわ。五月一日、パソ

コンを買いました。最近は文章

もEメールで送る時代なので挑  
戦してみることにしました。

連休の初日に画面が固まって動  
かず大騒ぎしました。どなたか

メッセージ待ってます。

千八一三―二三三一 熊本県天

草郡五和町鬼池五八八―一

松本とみよ

tomio.m@jasmine.ocn.ne.jp

女たちの情報紙  
**ふえみん**  
f e m ♀ n

婦 人 民 主 新 聞  
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は  
伸びつづける。

からだのしんぱいは  
はたらくもんだい  
こころのえいよう  
さべつへのいかり  
アジアのうづき  
あんぜんでなに？  
きのうまでのみず  
あしたへのみち  
わたしのいけん  
あなたのいけん  
おんなという  
ちから。

世の中に？を  
もち始めた  
男たちにも。

新聞代 (送料込)	
1ヶ月	750円
3ヶ月	2,250円
6ヶ月	4,500円
1年	9,000円

創刊以来、無党派の立場で50年。  
女視点で創る、もうひとつのメディア。

毎月・5日・15日・25日発行

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府堺 大阪市北区中崎西3-1-5  
TEL 03(3402)3244, 3238 TEL 06(371)2429  
FAX 03(3401)3453

ふえみん婦人民主新聞  
婦人民主クラブ責任編集

『母と子』8月号 定価500円/送料68円

(今月の視点) **国際化を考える**

日本人は自国の文化を意識しない

—ヨーロッパ人と日本人の考え方の違い— リチャード・ニコル

◆アメリカ便利 マイノリティのクラスメート 山本由美

◆〔私獣医師〕捨てられた動物たち 渡 真紀

◆幼児と遊ぶ 110段のお弁当 有吉有己子

◆「自己決定」する人間の脳 山田雅康

◆ナイフ脅迫事件に遭遇して 後藤 重三郎

——保存用『母と子』臨時増刊シリーズ 定価1050円/送料78円——

□当世 学校事情 (8月臨時増刊号)

—いち中学教員の意見— 坂本 安之 著

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

## 本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくべー

ジです。あなたの声をお待ちしています。  
投稿には、右の原稿用紙をご利用くださ  
い。

●タイトル、住所 氏名は一行めに。もし、

二〇字を超える場合には横目にこたわらず、小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]

## スタッフから

ミ ハー気分で、本場の宝塚市で宝塚劇団を観賞。舞台演出や衣装を、体を乗り出してオペラグラスで見た。

宝塚は天才アニメ作家『鉄腕アトム』の手塚治虫の郷里でもある。『リボンの騎士』は宝塚ファンだった母親の影響らしい。今だにお受験熱もすごいし、トップスターへの追っかけも存在していた。(菊池)

黒 い花びらのパンジーを苗で買って育てた。すてきな雰囲気のある、ピロッドのようなつややかな花がたくさん咲いて楽しませてくれた。種子を取って来年も、と期待して待っていたが、さすがにエフワン。ほんの少ししかつけない。

先祖がえりをして、紫や濃い赤の花になるかもしれないけれど、せっかくの種子だから大事

にしたい。(望月)

二 八二号の「わいふ」で紹介されていた林千春さんに誘われて、「昼下がりのシャンソン」を聴きに新宿のライプハウスに行ってきました。林さんと他に二人の歌手が、

愛・大人の恋・別れ・夢など、切々とした思いを、たつぷりと聴かせてくれました。おかげですっかりシャンソンに酔いしれたひとときをすごしました。皆様もたまにはいかが？ (成井)

野 村さんですか。スタッフから「読んでいますよ」と電話の向うの会員が言ってくれました。うれしかった。

この短かい文を書くのに結構苦しんでいる。でもこの一言が私を元気にさせた。「わいふ」の読むだけ会員の皆様、どうぞ気軽に投稿してみたいかがでしようか。きっと新しい緊張、喜び、出会い、経験が生まれ元氣

になります。きっと。(野村)

日 本では、家庭でもホテルでもトイレウォッシュレットが普及している。一度使うと快適この上なく、便利で清潔な生活に慣れ親しんでいる。

私は敦煌までは行ったが、その先の砂漠地帯に点在するオアシス都市、砂だらけの遺跡群を巡る長いバスの旅をしたいとずっと思い続けている。そのため不衛生な環境にもすぐに順応できるようにしたい。(山本)

新 しいカヤックを買った。流れておもしろく遊べる、短くて軽い流行のカヤックだ。うれしくて小雨模様の御岳に行って漕いだ。乗り心地は良いが、ボリウムがあるのでロールが難しい。一生懸命ロールの練習をした。御岳の水はきれいで気持がいいのだがとても冷たい。練習につきあった夫も私も風邪を引いてしまった。(水落)

二 のごろのお母さんは、幼ない子に怒鳴られたり、ぶたれたりして平気な人が多い。

先日も本屋で「早く帰るんだバカ!」と四、五歳の息子にこねられて、知らん顔で立ち読みしている人を見た。

私なら黙っていない。息子が中学生のときの話。「ママに暴力なんか振るってみな。喰いついてやる」「ぼくはまだ何もしていないのに」(和田)

五 十年ぶりに入院という体験をしました。もうすっかりよくなりましたが、新しい体験でとても面白かったです。

患者にとつて、もちろん医者質は気になりますが、それより大切なのは看護婦さん。私の入院先は「準看」が一人もなく「正看」ばかり、人数も十分。だからこそか、看護の質は最高でした。病院の看護システムを調べてみたい!(田中)

## 「ファム・ポリテイク」より

●時代は少しずつ動いているのかなあ、と嬉しくなってしまう出来事がありました。総選挙の二、三日、日本経済新聞が、最高裁判官の国民審査についてすぐナットクのいく記事を署名入りで載せたのです。

●いま、地方と都会の一票の格差は約二・五倍も。それが「違憲」ではないかと訴えが起こされても、最高裁の判決はいつも「合憲」。そのおかしさを指摘する記事でした。さっそく選挙公報で調べましたが、審査対象の八人の裁判官中六人が「合憲」、二人だけ「違憲」という判決を出していて、後者は弁護士出身の人。

●保守的な日経新聞がこんな記事を出したのははじめて。事実即して「おかしい」ものはおかしいという、それが日本中に広がればすばらしいことではないでしょう。

## NMS研究会より

●最近の『婦人公論』に、作家で写真家の藤原新也さんが、少年犯罪について談話を載せていますが、内容がすっかりNMSの考えと同じなので嬉しくなりました。結局、親に抱え込まれ、子ども時代に実際の生活体験をしないままに大きくなってしまい、仮想現実のなかで育って「透明な存在」になってしまいう子どもの危うさを語っているのです。現場を知っている人、感性の鋭い人の言葉は読んでころよいものです。

●ただしもの足りないのは、この人といえども子どもの背後にいる母親が、どんな生活を強いられているのかがわかっていず、母親の生活が開放されなければ、子どもも解放されないということがわかっていないということですね。やっぱり男性は限界がある、と感じるのはこんなとき。

## 老人ホーム情報センター便り

●介護保険法がスタートし、現場は一時混乱したが、少しずつ落ち着いてきた。しかし新規参入した在宅支援サービス業の大手コムスンが、もう業務を縮小しヘルパーの人員整理を始めた。介護保険法スタートまでに八億円ともいわれる宣伝費をかけ、全国各地に事業所を設け、大々的にヘルパーも募集した。さてどんな介護を提供するのかと注目していたが、もう部分的に撤退する。あれだけの宣伝費の回収は容易ではない。

介護はヘルパーの資質もあるが、会社の経営方針でサービスの内容が変わってくる。良い介護を希望するから、利益を優先する企業には参入してもらいたくない。

高齢者になっての住まいのご相談をお受けします。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします（有料）  
電話でご予約ください。

〇三―三三三五―二八五四

# 募集します

## 特集テーマ

二八七号（二〇〇〇年十二月一日発送）のテーマは「父親としてのわが夫」です。

最近、子育てにおける父親の役割がクローズアップされ、厚生省まで「子育てをしない男を父とは呼ばない」な

どとポスターをつくったりしています。

そのせいか、乳幼児の世話をする父親はかなり増えたようですが、しかし父親の役割はそれでいいのか？

父親としての夫を心からたのもしいと思ったとき、ここ一番というときに何というだらしなさとうんざりしてし

まったときなど、体験のなから、父

親としてのあなたの夫のプラスマイナスを語ってください。もちろん危急？のとき以外、ふつうのときの父親ぶり

がどんなか、という話でもかまいません。

字数 二千～四千程度  
締切り 二〇〇〇年十月十日

## 座談会 私も言いたい

二八七号のテーマは「困りものの母親」です。「うるさくてわずらわしい母」の意味とでもいいでしょうか。

母親というものは、誰にとつてもなつかしい存在であるはずなのに、うつかりすると子どもにのしかかり、取り

つき、何ともわずらわしい存在になる

ことがあるようです。子どもが中年になつてからでさえ、何のかのと指示命令したり、逆にやたらと面倒を見てもらいたがる老いたる母。こうなると「魂のふるさと」どころではありません。こうした母親に悩まされている方、

ぜひお声を聞かせてください。ご自分の母親でも夫とその母親のケースでも結構です。

誌上匿名はもちろん可です。

日時 九月十二日（火）二時より

場所 「わいふ分室」

申し込みは八月二十日までに電話で。

## 私の意見・あなたの意見

二八六号のテーマは、「子どもの小遣い・わが家では」です。

商品の満ちあふれている今日、どんなかたちで、どれだけの額の小遣いをやったらいいのか、親の戸惑いも少なくありません。子どもの数や年齢や、

親の懐具合でも違いますよね。

他のご家庭への参考にもなると思いますので、お子さんへの小遣いのやり方をぜひリポートしてみてください。

お子さんの数、現在の年齢と小遣いの額、何歳のときはどれぐらいの額だったか、家の仕事を手伝ったときに

はどうなのか、アルバイトは許しているのか、お子さんの金銭感覚はどうか、小遣いでトラブルが起きたことは？など、細かい部分も書き込んでくださると参考になります。

字数 千字前後

締切り 八月二十五日

## ◆グラフィア「わが家の歴史写真」

どこのご家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べてもけっこうです。

お申込みは電話で編集部まで。

## ◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをご覧ください。

## 一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

## ◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

## ◆ズバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

## ◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

## ◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子。どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

## ◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦労話を。

## ◆今これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

## ◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマを。自由なコーナー。

## 八〇〇字のコラム

## ◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

## ◆ことばでハッピー

ことばの使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

## ◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り回されている人、体験談を。

## ◆おすすめの一冊

書評のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。お読みになった本について感想を含めて、ご紹介ください。

## 四〇〇字のコラム

## ◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

## ◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直な意見を求めます。

## その他

## ◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

## ◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい、聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

## ◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(一四二〇行にまて)



# 投稿の

## ◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

## ◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

## 注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「おすすめの一冊」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶっても可。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いします)

●他誌との二重投稿はお断りします。

●写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。

●誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上1カ所を留める

ペンネーム・匿名希望の方は明記

本文……	タイトル	コラム名
		ペンネーム・匿名 住所 会員番号 本名 電話番号
		年齢

① ページを明記  
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を載せるかどうかを明記

なくても可

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。ワープロ打ちは二〇字×二〇行を一枚に、行間一行おきにあげる。字間はとくにあげないで。

へあて先> 〒162-0815 新宿区筑土八幡町一―三―二〇―一

わいふ編集部

投稿のきまり

# 編一集一だ一より

◆今回の特集は、とてもおもしろい作品が集まりました。何といっても女は「おしゃれ」なんです。

戦争中電力不足でパーマメントが禁じられ(電髪といって電気でかけるパーマでした)、美容院の前にはたくさんの女性が風呂敷包みをかかえて行列していました。包みの中には炭(バーベキューに使うあれ)が入っていたのです。炭も不足していて、持参しなければならなかったのですが、それでヘヤーアイロンを焼いてウェーブを付けてもらいました。洗えばすっかり落ちてしまうウェーブでした(一週間に一度くら

いしか洗髪はしません)。

どうも、昔のことを説明するのは難しいですね。

爆弾が落ちて来て、命が危なくてもおしゃれをしたいのが女だ、ということを書いたかったのです。

◆森菜美さんの「私の男女共同参画体験記」はぜひお読みください。日本の多数派の本音がよく分かります。

まあこんな連中が何を言おうと、歴史は後戻りしつこないんですけどね。森さん、これからも折角ご勉強なさって、活躍なさることを期待しております。

◆今号のグラビアは歴史写真ではなくて、花菖蒲見物の懇親会になりました。当日はなんとか晴れ間に恵まれ、花も盛りだった

のはラッキーでした。来年もまた何か企画したいと思います。

◆はじめての投稿ですが……とお手紙のついた原稿。編集部としてはとてもうれしいものです。未投稿の方、ぜひ書いていただきたいと思います。

「載っているのを見ると、うまい人ばかりで、とても……」というお手紙を何度かいただいたことがあります。間違いは直し、文脈を通すなど多少の手を入れて整えているので、そう見える面もあるかと思えます。ひるまないでお書きください。

◆編集部は八月に夏休みを取ります。八月十日(木)から十五日(火)まで、事務所は留守になります。よろしく。

## 購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りします。折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

## 購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方が。そのため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

## わいふ◆285 (隔月刊)

- 発行日 2000年9月1日
- 編集 わいふ編集部
- 定価 620円(本体590円)
- 年間購読料 4224円(送料共)
- 印刷 平河工業社
- 発行所 ㈱グループわいふ  
〒162-0815  
東京都新宿区筑土八幡町  
1-3-201  
電話(03)3260-4771  
FAX(03)3260-4773
- 郵便振替 00150-3-110430  
加入者名 わいふ編集部

# あなたの子育て 診断します

母親の個性を生かした「子育て」を

◆子育てを診断するなんて、嫌な感じ！  
なんて思わないでください。そうでなく、あなたの性格に合わせて一番やりやすい、いい子育てができるガイドブックなのです。

◆五種類のアンケートと、その答えからあなたのタイプがわかるチャートがついています。  
●権威型●保護型●受容型●放任型●流れ型の五つです。

もちろんどれがいい、どれが悪いという問題ではありません。自分のタイプを知った上で、自分に一番ふさわしい、そしてやりやすい子育てのしかたが見つかる本なのです。ぜひお試しください。

◆それぞれのタイプがよくわかる、すごく愉快な子育ての実戦記がついています。

田中喜美子+NMS研究会 著

定価一三六五円（税込み） 小学館刊

東京都文京区本郷3 ☎03-3813-8105 書店品切の時は何冊でも一回代金引替宅急便380円

## 社会思想社 (税別)

与謝野晶子からきたやま・ようこまで。初めての小学校児童文学史

## 文化学院児童文学史稿

上笙一郎著 多彩な芸術家を送り出した自由と芸術のミニ・スクール文化学院。本書は児童文学との関わりを学院80年の歴史とともに描く。教師をふくめ八二〇余人が登場、壮観な人物絵模様。四六判・四〇〇〇円

## 虹の民におくる歌

生誕八〇年 記念限定版

矢沢寛監訳 「ウィ・シャル・オーバー・カム」花はどこへいった」などで知られるピートの歌で綴る自伝。楽譜、全訳詞、最近作等収録。【少数部】B5変・七五〇〇円

名作『日本之下層社会』刊行一〇〇年記念企画  
広く社会学・経済学・文学に及ぶ全業績を収録 初の本格的全集！

## 横山源之助全集 全9巻別巻2

編集 立花雄一 民俗学を創始した柳田国男、民芸の発見者柳宗悦に並び称される横山源之助の全貌！  
■第一回配本・別巻「日本之下層社会」／九四〇〇円  
A5判函入・平均五〇〇頁 三カ月に一冊配本

## 『主婦の復権』はありうるか。

田中喜美子 鈴木由美子／著 一四〇〇円

体の中からキレイになるための

# 健康ダイエットQ&A

小西 すす 体重を減らすことが  
ダイエットの目的になつていま  
せんか？ 食は科学・食は文化・  
食はいのちです。栄養学の専門  
家が、健康なやせかたの法則を  
紹介します！ 一八〇〇円



## 水・空気・食品・生活・健康 暮らしの中の環境問題 Q&A

山口英昌編著 生活者の視点に立つて、身近な環境問題  
をわかりやすく解説する。 二二〇〇円

## ケア・福祉のしごとまるごとガイド

田端光美監修 だれにでも分る分類で、今注目の福祉  
の仕事解説する98の職種・52の資格。 一五〇〇円

まるごとガイドシリーズ〈好評発売中！〉

各二二〇〇円

### ① 社会福祉士まるごとガイド

日本社会福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

### ② 介護福祉士まるごとガイド

日本介護福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

### ③ ホームヘルパーまるごとガイド

井上千津子監修／資格のとり方・しごとのすべて

## 介護休業でいい仕事いい介護

沖藤典子●家庭も自分も大切にするために 自ら狭間に  
立つて悩んだ著者が、介護と仕事の両立を探る人たちに  
捧げる意欲作。読んでわかる介護休業制度。二二〇〇円

## 介護が変わるみんなで変える

樋口恵子編●女性が進める介護の社会化Ⅳ 高齢化を縦  
糸に男女共同参画社会の実現を横糸にして、介護保険施  
行前夜を幅広い範囲の専門家が語り合う。 二二〇〇円

## 介護保険で拓く高齢社会

樋口恵子編●女性が進める介護の社会化Ⅴ いよいよ実  
施された介護保険。日本全国で積み重ねられている介護  
保険への取り組みを、事例を中心に紹介。 二二〇〇円

## ジェンダーの心理学「男女の思い込み」を科学する

青野篤子／森永康子／土肥伊都子 人の持つ思い込みを  
キーワードに、法や制度を整えても、なぜ伝統的な性別  
分業社会は人びとの意識に残るのかを解明。二二〇〇円

## 現代日本女性の生き方

山縣喜代 宗教的・倫理的価値意識と心情 宗教的・倫理的価値意  
識からその特色を描いた希少な研究書。 二八〇〇円

## 女性が変わる生活と法

佐々木静子編著 男女共同参画社会をめざして 介護、少子化、働きかた、  
環境問題、政治参加など16の例から学ぶ。 二八〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別  
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>